

# 小野堀口遺跡

—県営かんがい排水事業（排水対策特別型）松崎東に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

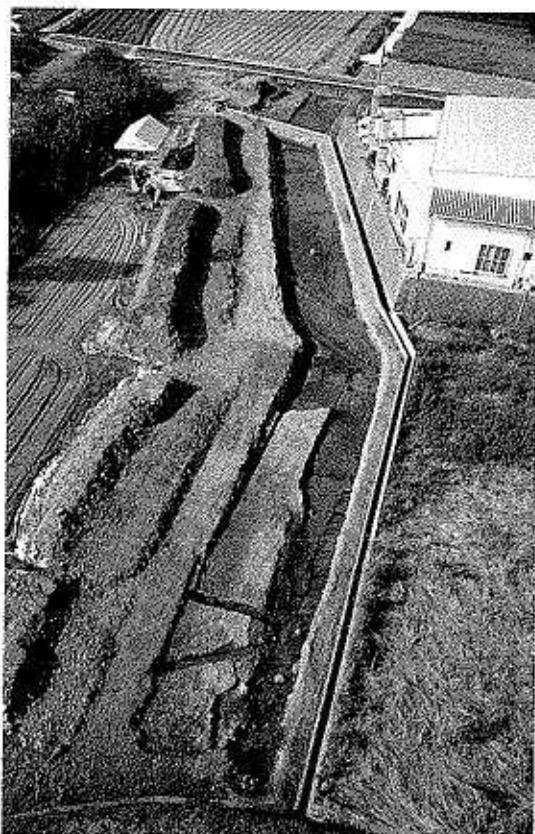
2005.3

諫早市教育委員会





卷頭写真 1 遺跡遠景—遺跡・宗方集落・金比羅山—



卷頭写真 2 遺跡全景（南から）



卷頭写真 3 1号杭列全景（南から）



卷頭写真4 2号溝（北西から）



卷頭写真5 1号杭列杭出土状況（南から）

## はじめに

小野堀口遺跡は諫早市宗方町にあり、今回県施行の県営かんがい排水事業（排水特別型）松崎東の事業実施地区となり、発掘調査を実施しました。

調査地からは道路状の遺構や、杭列、かつての宗方川の流路などが確認され、古くからこの地区が利・活用されていたことが判明しました。道路状の遺構は現在の畦畔の方位とは主軸を異にしており、宗方川の北流する方向と関係しているのかもしれません。

また北方の田圃には縄文時代前期の小野宗方遺跡があり、約1m程の貝塚が確認されました。この貝塚は縄文時代前期の海進期の状況を残す遺跡として重要です。遺跡の周辺は縄文時代晩期頃にはすでに干陸化しており、耕地として使われていた痕跡を植物珪酸体の検出で確認できます。さらに律令期まで遡る可能性のある条里遺構が「二ノ坪」、「五ノ坪」などの坪付けの数詞名として字名で残されています。

このように小野堀口遺跡を含むこの地域は、生産力のある耕地として利用されてきました。このことから伊佐早庄は早くから公領、更には莊園として推移し、ことに永野村は鎌倉時代に宗方村とに中分され、遺跡を含む東方は宗像六郎氏業が所領するところとなったのです。この時の中分線が今回の調査で確認された流路の一部の可能性があります。

現在の地貌からは推し量ることのできない事実が地中には潜んでいます。考古学の成果と古記録の一一致により、地域史が積み重ねられ、市民の皆様の向学の糧となれば幸甚に存じます。

最後になりますが、調査に際しご高配いただいた地元町内会をはじめ、県農村整備事務所及び関係行政機関に衷心より感謝申し上げます。

平成17年2月28日

諫早市教育委員会

教育長 峰松 終止

## 例　言

1. 本書は「県営かんがい排水事業（排水特別型）松崎東の事業実施地区」に伴う長崎県諫早市宗方町 282-4 番地外に所在する小野堀口遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は長崎県諫早農村整備事務所の委託を受け、諫早市教育委員会の指導のもと国際航業株式会社社会情報事業本部文化財事業部が実施した。調査担当者は同社調査研究室研究員　園村雅敏、長尾聰子、東園千輝男、藤崎周太郎、小日置晴展、安全監理は飯田英樹、佐々木亨が担当した。
3. 小野堀口遺跡は、当初小野宗方遺跡の一部と認識して調査を実施したが、時期や遺跡の性格などの調査の成果により小野宗方遺跡の一部から切り離して小野堀口遺跡とした。
4. 調査面積は 400 m<sup>2</sup>で調査期間は現場調査を平成 16 年 8 月 28 日から平成 16 年 11 月 28 日までの 56 日間である。
5. 本書に記載した土層分類の色調表現は農林水産省農林水産技術会議事務所・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』を用いた。
6. 調査区内的グリッドの設定は 5 m 間隔とし、2000 年国土座標第 I 系に準拠している。
7. 遺物実測図の縮尺は原則的に 1/3 としたが、一部 1/4、1/5 のものがある。それらのものはそれぞれ右下にそれぞれの縮尺を示した。また、土器の実測図のうち、断面を黒く塗りつぶしてあるものは須恵器をあらわしている。
8. 杭の実年代については  $\beta$  線による  $^{14}\text{C}$  の測定を株式会社加速器分析研究所に依頼し、分析結果報告書を掲載したので参照されたい。
9. 本調査にかかるすべての遺物、記録類は諫早市教育委員会に保管され、これらの活用、ならびに本調査において作成された資料等の管理は諫早市教育委員会があたる。
10. 現場作業及び整理作業にあたられた方々は以下の方々である。

現場作業員　道辻久美子　樋口伊津子　田崎ウメノ　野崎トミエ　牟田和子　山崎敏子  
中島豪志　田渕マスヨ　馬場ヤスエ　西村絹枝　野中要子　原多鶴子  
野田敏枝　岩本君子　松本マサエ　北原ナオエ　田崎ミエ子  
整理作業員　小野てるみ　三原寛子　平山裕子  
現場協力者　内田秀雄

11. 発掘調査ならびに本書の作成にあたっては次の方々、諸機関から多大なご協力、ご指導をいただいた。記して感謝申し上げます。

木本雅康　柴田哲也　川瀬雄一　川口洋平　合田芳正　下川達彌　手塚直樹　諸熊義勝  
増瀬和夫　宮本　勤  
パーソナルセンター　宗方町自治会　国見町教育委員会　長崎県教育委員会  
東京都教育委員会

# 目 次

はじめに

例言

目次

## I 遺 跡

1 調査に至る経緯	1
2 遺跡について	1
3 調査の方法	3

## II 遺 構

1 溝・道路	6
(1) 1号溝	6
(2) 2号溝	7
(3) 1号道路	7
(4) 3号溝	7
2 杭 列	11
(1) 1号杭列	11
(2) 2号杭列	11
(3) 3号杭列	12
3 調査区の土層と遺物分布	18

## III 遺 物

1 縄文時代の遺物	28
2 古代の遺物	31
3 中世の遺物	36
4 近世の遺物	49
5 杭考察	50

## IV まとめ

加速器分析研究所放射性炭素年代測定結果報告書	55
------------------------	----

あとがき	57
------	----

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2	第19図 遺物実測図（1）	29
第2図 宗方村郷図	2	第20図 遺物実測図（2）	30
第3図 調査区位置図	2	第21図 遺物実測図（3）	31
第4図 グリッド・遺構配置図	5	第22図 遺物実測図（4）	34
第5図 1号溝遺構図	8	第23図 遺物実測図（5）	35
第6図 2号溝遺構図	9	第24図 遺物実測図（6）	36
第7図 1号道路・3号溝遺構図	10	第25図 遺物実測図（7）	37
第8図 1号杭列遺構図	13・14	第26図 遺物実測図（8）	38
第9図 2号杭列遺構図	15・16	第27図 遺物実測図（9）	39
第10図 3号杭列遺構図	17	第28図 遺物実測図（10）	40
第11図 古代遺物包含層完掘図（1）	18	第29図 遺物実測図（11）	41
第12図 調査区南北壁面土層断面図（1）	19・20	第30図 遺物実測図（12）	42
第13図 調査区南北壁面土層断面図（2）	21・22	第31図 遺物実測図（13）	43
第14図 古代遺物包含層完掘図（2）	23	第32図 遺物実測図（14）	44
第15図 遺物平面・垂直分布図（1）	24	第33図 遺物実測図（15）・写真	49
第16図 遺物平面・垂直分布図（2）	25	第34図 旧公図・字図	54
第17図 遺物平面・垂直分布図（3）	26	第35図 遺構配置図	54
第18図 遺物平面・垂直分布図（4）	27		

## 表目次

第1表 土器観察表（1）	29	第5表 杭観察表（1）	45
第2表 石器観察表	29	第6表 杭観察表（2）	46
第3表 土器観察表（2）	33	第7表 杭観察表（3）	47
第4表 木製品観察表	39	第8表 杭観察表（4）	48

## 写真図版目次

巻頭写真1 遺跡遠景	写真1 1号溝（北西から）	59
巻頭写真2 遺跡全景（南から）	写真2 2号溝・2号杭列（南から）	59
巻頭写真3 1号杭列全景（南から）	写真3 2号杭列（南から）	60
巻頭写真4 2号溝（北西から）	写真4 3号杭列（北から）	60
巻頭写真5 1号杭列杭出土状況（南から）	写真5 1号溝（南から）	61

写真6	1号杭列検出状況（南から）	61	写真17	杭出土状況（2号杭列）	65
写真7	1号杭列杭出土状況（西から）	62	写真18	遺物写真（1）	66
写真8	1号道路（西から）	62	写真19	遺物写真（2）	67
写真9	1号道路（北西から）	63	写真20	遺物写真（3）	68
写真10	3号溝（南東から）	63	写真21	遺物写真（4）	69
写真11	I区完掘状況（南東から）	64	写真22	遺物写真（5）	70
写真12	II区完掘状況（北から）	64	写真23	遺物写真（6）杭（1号溝～ 3号溝）	71
写真13	III区完掘状況（北東から）	65	写真24	遺物写真（7）杭（1号杭列～ 3号杭列）	72
写真14	土器2-7、23-7出土状況	65			
写真15	土器23-12出土状況	65			
写真16	下駄27-17出土状況	65			



# I 遺 跡

## 1 調査に至る経緯

小野堀口遺跡の調査の契機は、県農村整備事務所施行の「県営かんがい排水事業（排水対策特別型）松崎東地区」実施によるものである。同事業に係る発掘調査は平成6年度曾屋地区、平成7年度扇町地区で実施しており、それぞれ報告書を刊行している。平成15年度は国道以南に施工されるものに係っていたが、本遺跡以北の施工箇所は以前から排水路が敷設されていたため立会い調査を実施することとした。

しかし今次の調査は、過去の調査成果から全面調査を実施すべきとのことで協議を行い、年度当初から調査を実施する予定であった。しかし、諸般の事情から本会での調査が不可能となり、現地調査を外部委託することとなった。

以上の経過を踏まえ、平成16年8月から調査を開始し、途中計画変更に関する協議を行い、11月下旬に調査を終了した。

## 2 遺跡について

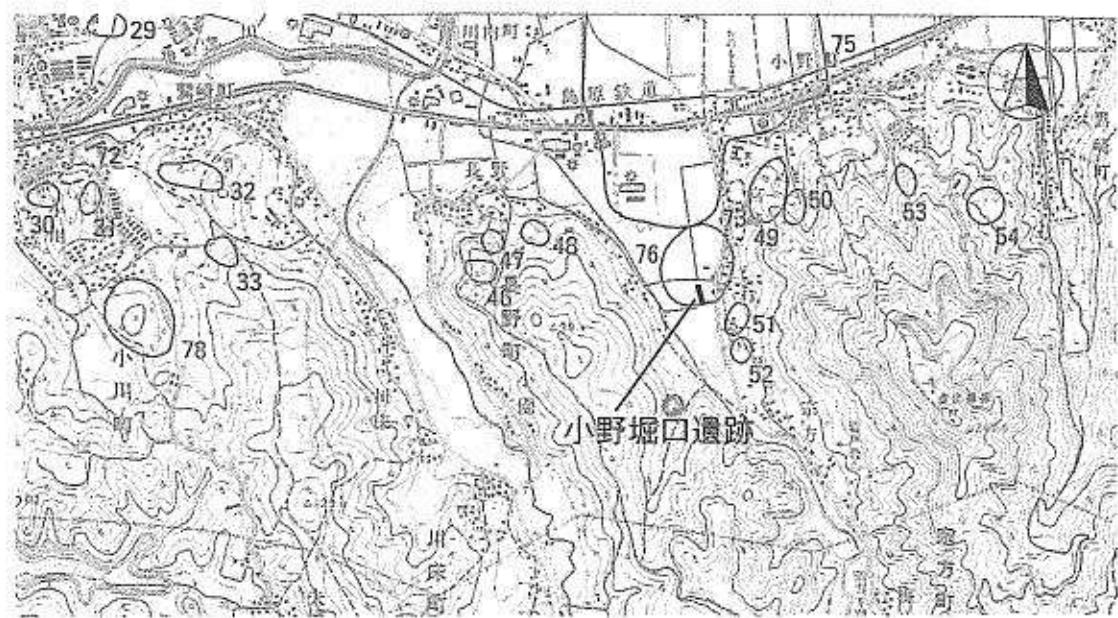
小野堀口遺跡は、諫早平野の最奥部の諫早市宗方町282-4番地外に所在する。

遺跡は現況水田であるが、かつて河道の一部であったことが地形図上に現れた矩形でない田園の形状や曲がりくねった畦畔及び用・排水路のあり方などから窺われる。

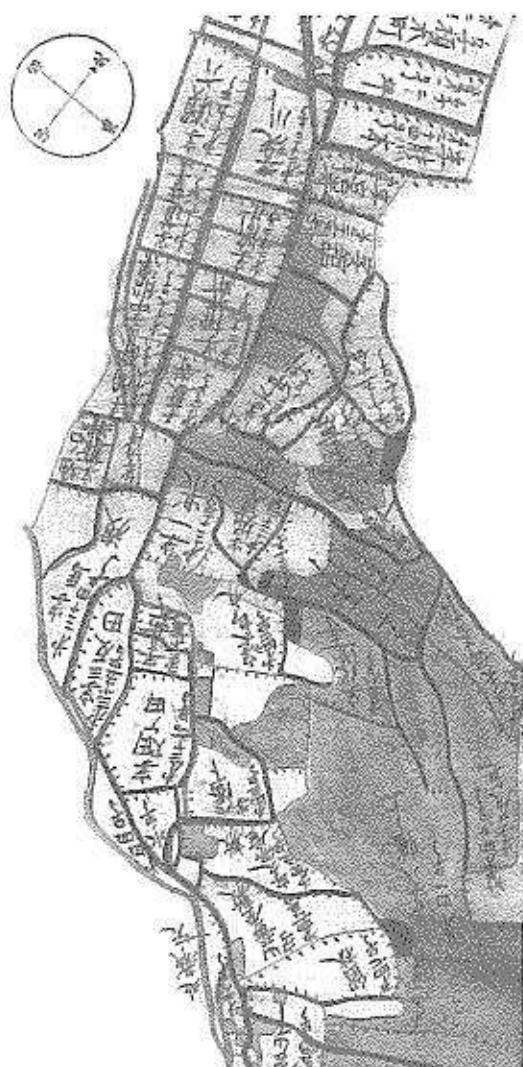
遺跡周辺の基盤は古第三系砂岩で、その上に岩戸山火山角礫岩、有明粘土が堆積する。さらにその上位に本遺跡の基底となる河川堆積物である砂礫層が存在している。この砂礫層は後述するように古墳時代の遺物を含んでおり、少なくとも4~5世紀代以降の所産であることが知られる。この砂礫層は宗方川の本流あるいは氾濫によって形成されたものであり、砂礫層検出の土師器などの磨耗が遺物の原位置からの移動を証明しており、近くに当該時期の遺跡が存在することを傍證させる。この砂礫層が内容物を変化させながら北側へ伸び、宮崎館遺跡等範囲確認調査第3次調査のT21の最下部検出の土師器・須恵器検出層に連続する可能性を示唆している。このことは、地形図上の乱れた畦畔の連続性からも首肯されるところである。よって古墳時代までは宗方川は本遺跡西側近傍を北流していたものと思われる。その後、宗方川の河川堆積物によって自らの流れが遮断され、西側に偏していくものと思われる。

本遺跡周辺には、旧石器時代から近世期までの遺跡が集中している。特に縄文時代晩期以降は耕作地として活用され、その生産力の高さに着目した先人の慧眼に驚かされる。金比羅岳から伸びる舌状丘陵地の地先には、条里遺構が展開し、坪数詞名を残している。条里遺構は小野小学校グラウンド付近小字「館」を1の坪として北進し、「芦牟田」で西に折れ、「新替」から南に下る千鳥式の坪付法を採用している。小字と坪付【小字名の後に（no）で表示】が一致するものとして、「二ノ坪（2）」、「三ノ坪（3）」、「八ヶ坪（8）」、「二ノ坪（12）」、「五ノ坪（15）」、「四ノ坪（24）」、「大坪（28、33）」がある。最後の36番目の小字名は「曾屋」である。

この「曾屋」では縄文晩期終末から弥生前期の土器群、弥生後期から古墳時代前期の土師器



第1図 周辺の遺跡 (1/2500) 長崎県遺跡地図諫早南部を一部改変



第2図 宗方村郷図



第3図 調査区位置図

群、杭列、石庖丁などが検出され、またプラント・オパール分析により 1-D 区 5 層が古墳時代前期の水田跡の可能性が指摘された。さらに東方 300 m に位置する「扇町」からも同様に縄文晩期終末の土器群や土師器、石庖丁、杭列などが検出されている。

このことにより、小字「扇町」から「釣ノ元」、「大坪」の南西に河川と思われる旧地形の痕跡を認めるものの、縄文時代晩期にはすでに干陸化し、後代条里制を施行するのに可能な状態になっていたことを示している。さらに条里界線を斜め北東に切る旧地形・旧河川跡は用水路として機能していたと推測される。宮崎館遺跡、小野宗方遺跡、小野曾屋遺跡、小野扇町遺跡など、縄文晩期以降の遺跡群は、水田耕作関連の遺跡群であり、後背地の舌状丘陵地にはその生活・埋葬関連の遺跡群が控えるものと思われる。

(秀島 貞康)

参考文献 諫早市教育委員会 「宮崎館遺跡等範囲確認調査概報」1987、1988

「宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書」1989、「小野宗方遺跡」1994

諫早市埋蔵文化財調査協議会 「小野曾屋遺跡」1995、「小野扇町遺跡」1996

### 3 調査の方法

調査は平成 16 年 8 月 23 日から約 2 ヶ月間の予定で開始された。

最初に調査区に 5m 間隔のグリッドを設定した。グリッドは真北方向を Y 軸とし、それに直行する東西方向を X 軸として、Y 軸にはアラビア数字、X 軸にはアルファベットを用いた。各グリッドは南西隅の杭の位置で呼称することにした。調査区の東側には幅 40cm の用水路が調査区に沿って流れしており、Y 軸 13 区の中央部分で調査区を横切り、調査区外に出ている。便宜的にこの用水路より北側の Y 軸 14 ~ 16 区部分を I 区、北半分の Y 軸 7 ~ 13 区までを II 区、南半分の Y 軸 1 ~ 6 区部分を III 区とした。出土遺物は原則として、トータルステーションによる 3 次元の遺物取り上げを行ったが、その他のものはグリッドと層位ごとに一括遺物として取り上げた。

9 月 8 日 重機による耕作土・床土の排土後、作業員による近現代の包含層の掘削を始めた。II 区では新しい床土層の下には、現代のアスファルトやコンクリートを含む盛土があり、下に古い水田耕作土、床層が 20cm 存在した。盛り土をさらに重機により掘削し、近世陶磁器を含む黒褐色粘質土と砂礫層、砂層と所々で異なった堆積状況になっていた。この付近は度々水害に見舞われており、宗方川上流からの土砂の堆積や宗方集落東側の金比羅山に切り込んだ夫婦谷からの土砂堆積と複雑堆積状況にあるものとみられた。III 区では近世遺物包含層の削平が終了する頃から杭頂部の一部が検出されはじめたため、これらを 1 号杭列と呼称し、その広がりを追った。結果、杭は調査区の東側に掘られた用水路と平行して帶状に検出された。出土遺物は近世陶磁器類をほとんど含んでおらず、中世舶載磁器や古代土器が主であることから近世以前にさかのぼるものと考えられた。

一方、II ~ III 区の境界付近の H · I - 6 · 7 区からも 1 号杭列とは異なる方向に杭が検出されはじめ、これは調査区を斜めに横切る 4 列の杭列になった。4 列の杭列を調査区西壁を観察すると南側の 1 列目と 2 列目との間には両脇の砂礫層とは異なる砂層の堆積が認められ、3 列

目と4列目との間にも同様の堆積した砂層がみられた。このことから、2本の溝状の遺構と考え、南側から1号溝、2号溝と呼称することにした。さらにG-8・9区にも杭列らしきものが南に向かって伸び始め、ついに2号溝の中にまで達した。この杭列を2号杭列とし、2号溝の掘り下げと平面図の作成、写真撮影を先行することにした。1号溝、2号溝とも掲載できる遺物は出土していないが、舶載陶磁器、国内陶器、土師器が出土している。また、1号杭列からは中世の大甕（第25図11）や青磁小皿（第25図17）が出土しており、2号杭列からは漆器椀（第26図5）が出土した。

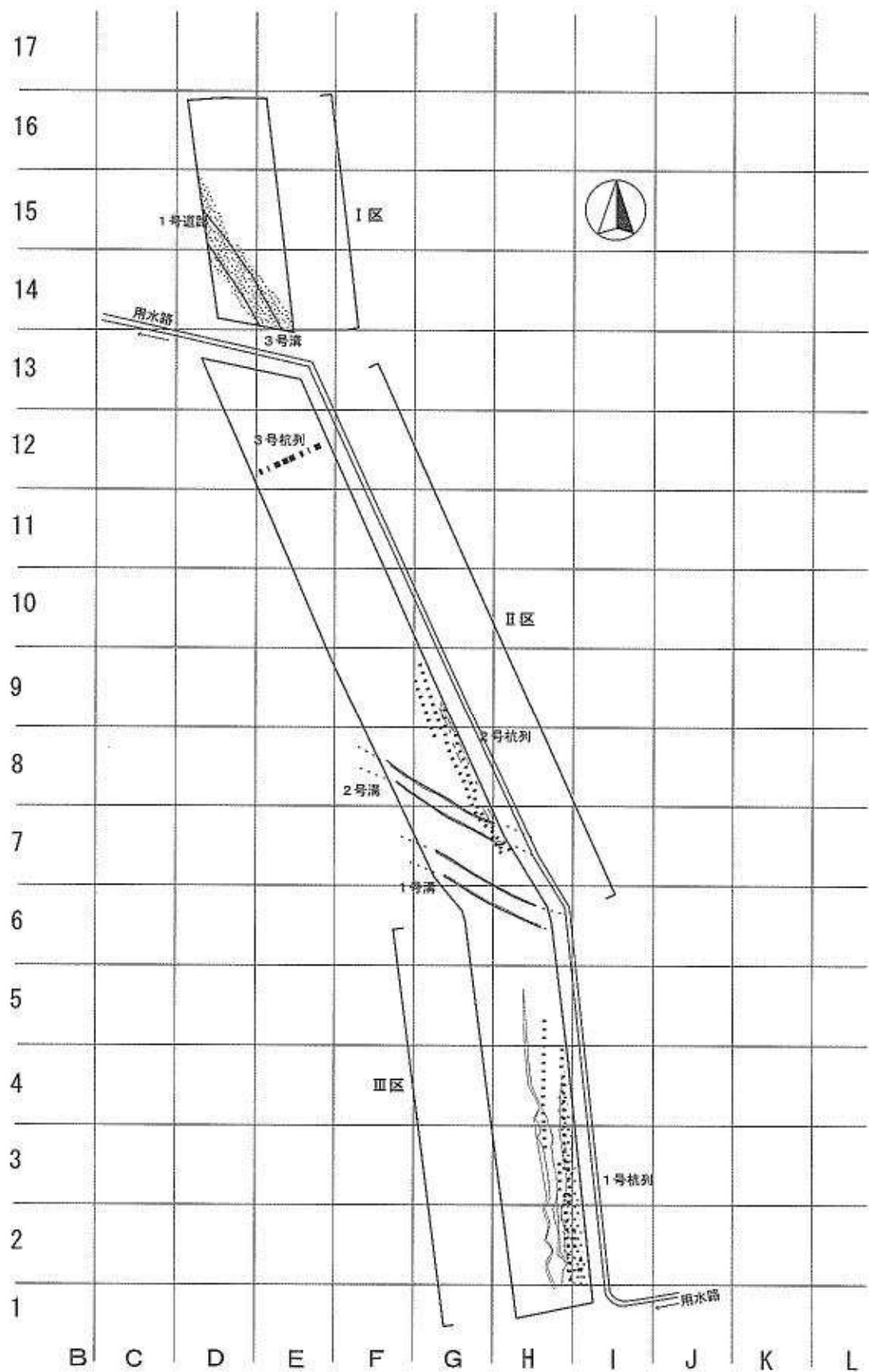
一方、I区からは床土層を剥ぎ終わってまもなく、地表から30cmで小砂礫を敷き詰めたような幅2m余りの平坦な硬化面が検出された。この硬化面には細かく破碎された舶載磁器、古代土器、フレークなどの遺物が含まれており、道路状遺構と考えられた。さらにこの道路の硬化面を剥ぎ取ると、直下から溝状遺構が検出された。溝は浅く、深さは20cmほどしかないものの、両側の一部には等間隔で細い杭が打ち込まれていた。当初は両側に等間隔で杭が打ち込まれていたものとみられ、杭の遺存状態がよくないために杭を検出できなかったものと考えられる。出土遺物は青磁碗（第25図19）がある。

杭は1号溝、2号溝、3号溝、1号杭列、2号杭列合わせて、740本余りで、個々の長さはあるが、その一部は下層の潟土層を抜き、さらに下層の砂礫層にまで達していた。このため杭の取り上げには時間を要すること、さらに下層の古代遺構の存在も十分に考えられることから、10月になり諫早市教育委員会、農村整備事務所と調査期間の延長について協議をはじめ、1ヶ月の調査期間の延長が了承された。

杭の平面実測を行う中、今年はとりわけ台風が何度も来襲し、特に大きな被害を出した21号台風は用水路の水を溢れさせ、検出して脆くなった杭を流失させた。これにより、欠番となつた杭は100本余に及び、杭一覧表に番号のみで他が記載されていないものはこの時に所在が不明になったものの一部である。

10月13日 杭の平面実測が終わり、リモコンヘリコプターによる空中撮影を行った。作業員を2つに分け杭の取り上げを行う一方、II区の北側から古代遺構の検索を始めた。黒褐色の粘質土の下には黒褐色砂礫層が部分的に堆積し、中から古代遺物が出土したもの遺構は検出できず、やがてE-12区では地表面から0.85mのところで潟土層と思われる青白色粘土層を検出した。潟土層はF-11区とF-9区以南、H-I-6区あたりで一端消失しH-4区あたりから調査区東半分に見られ、さらにH-2区あたりでまた消失している。この潟土層が検出されない部分は黒褐色の粘質土や砂質土で砂礫層が混在する複雑な土層分布になっており、どの層からも古代の遺物が出土した。しかし潟土層からは遺物が出土しないことから、潟土層を残し、遺物の出土する黒褐色砂礫層と粘質層を掘り下げると、ついに遺物が出土しない直径が50cm未満の小型の岩を含む灰褐色や青灰色砂礫層に達した。遺物を出土しないことから古代以前の土層と考えられたため、この土層を検出して、掘削作業を終了した。

11月22日 空中写真撮影及び全景写真撮影を行い、11月28日、調査区東壁の土層断面図を作成して、現場調査を終了した。  
(園村 雄敏)



第4図 グリッド・遺構配置図

## II 遺構

### 1 溝・道路

I 区から 1 条、II 区から 2 条、計 3 条の溝が検出された。いずれも溝の両端は調査区外に延びており、その全容は不明である。II 区の 1 号溝と 2 号溝はほぼ平行していて、溝の規模、杭の並び方に相似が見られる。年代もほぼ同時期と思われる。3 号溝は中世の道路の直下に存在する。3 条の溝に打ち込まれていた杭による  $^{14}\text{C}$  年代測定法によると、12 世紀～16 世紀代のものと判明した。詳しくは卷末に分析報告書を掲載したので、参照願いたい。またこれらの溝から出土した遺物も多くが中世所産であり、以上のことから溝は中世のものと思われる。

溝では一部で横木を確認したが、いずれも取り上げできないほど劣化しており、検出できたものも僅かであった。また、壁面でしがらみを確認できたものの、検出の際には確認できなかつたので、溝の一部で使用されていたと思われる。

1 号・2 号溝の南北に杭列が 2 条検出されているが、杭列が 12 世紀から幕末にかけて長期間にわたって機能したなかで、溝は先行して開削されたか、一時期重複して機能していたものと思われる。

杭の個別のデータは一覧表にして掲載してある。

#### (1) 1 号溝（第 5 図・写真 1）

II 区の H・I-6・7 グリッドで検出された。東西方向の溝でその両端は調査区外に延びており、全形は不明である。方位は N-63°-W である。検出した規模は、長さ 8 m、深さ 18 cm、検出標高は上面 3.59 m、下面 3.21 m となっている。溝の断面は、上面幅 100 cm、底面幅 88 cm で形状は逆台形である。覆土は黒褐色粘質土で、溝に伴う 50 本の杭を確認できた。杭頭の検出標高は 3.6 m～3.8 m 前後であるが、現在の耕作地の地表面が標高 4.2 m であり、40 cm～60 cm の落差がある。杭頭はほぼ同じ標高で検出されており、打ち込まれた当時の高さをほぼ保っていると思われるが、近現代の耕作により、あるいは度重なる土砂災害などにより杭の上部が失われた可能性もある。杭の先端の標高には、バラつきが見られる。杭は溝の両壁に約 30 cm のほぼ等間隔で打ち込まれていて、掘り下げ時に一部で横木を確認できた。杭は直径 3 cm～5 cm、長さは 30 cm～50 cm のものが多かったが、なかには長さ 80 cm を超えるものもあり、渕土層下の礫層まで深く埋め込まれていた。西壁の断面には一部に薄い砂層や植物遺体もみられることから、当時は水路で、水が緩く流れているものと思われる。2 号溝との関係やその性質については今後の調査を待ちたい。杭の年代測定では、13 世紀～15 世紀が測定されている。

出土遺物は、土師器の壺・甕・高壺、木製品（曲げ物）等がある。

#### (2) 2号溝（第6図・写真2）

II区のH・I-7・8グリッドで検出された。1号溝の南側に約1.8mの距離でほぼ平行していて、溝の規模や杭の並び方等でも相似が見られる。東西方向の溝でその両端は調査区外に延びており、全形は不明である。方位はN-59°-Wである。検出した規模は、長さ7.8m、深さ15cm、検出標高は上面3.66m、下面3.21mとなっている。溝の断面は、上面幅88cm、底面幅86cmで形状は逆台形である。覆土は黒褐色粘質土で酸化鉄を帶びていて、水路であったと考えられる。溝に伴う40本の杭を確認できた。杭頭の検出標高は3.6m～3.8m前後で、地表面から40cm～60cmの落差があることから、1号溝と同じく杭の上部は失われた可能性もある。杭の先端の標高には、バラつきが見られる。杭はやはり溝の両壁に約30cmのほぼ等間隔で打ち込まれていて、直径4cm～6cm、長さ40cm～60cmのものが多い。杭の半数以上が50cmを超える長さで湯土層下の疊層まで深く打ち込まれていた。他に調査区東壁付近の溝内に40数本の杭があったが、これはむしろ近接する2号杭列の杭の可能性が高いと思われたため、2号溝の説明では取り上げなかった。杭の年代測定では2本の杭で年代幅が12世紀～17世紀と大きくなっているが、出土遺物や1号溝との関連性から同時期と見て良いと思われる。

出土遺物は、土師器の壺・甕・高壺、白磁等がある。

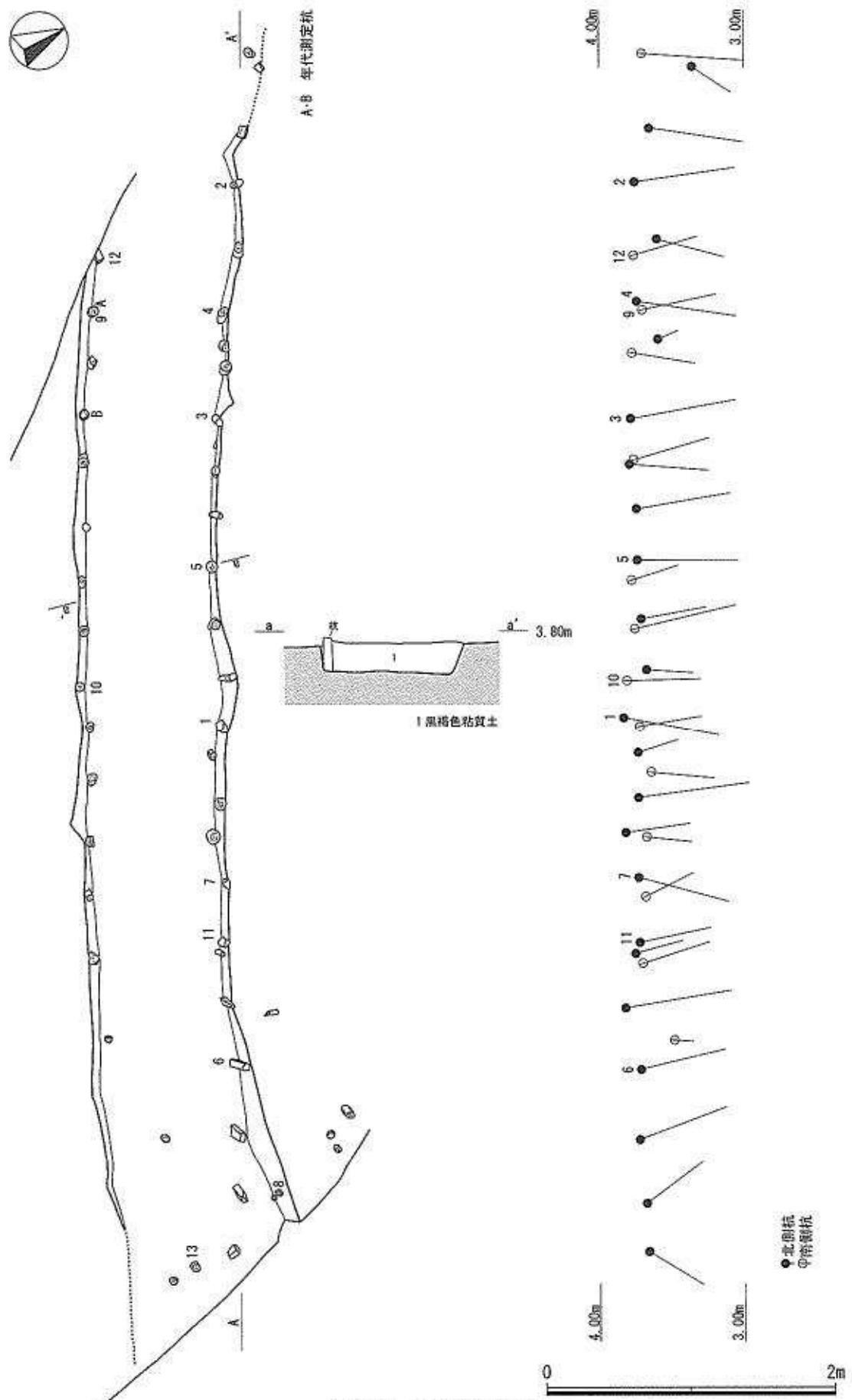
#### (3) 1号道路（第7図・写真8、9）

I区のE・F-14・15グリッドで検出された。東西方向の道路でその両端は調査区外に延びていて、全形は不明である。方位はN-40°-Wである。小礫を多量に含む茶褐色粘質土が硬くしまり硬化面となっていて、約1.5mの幅で検出された。中世の道路と考えられる。この直下に同じ方位で3号溝が走っている。

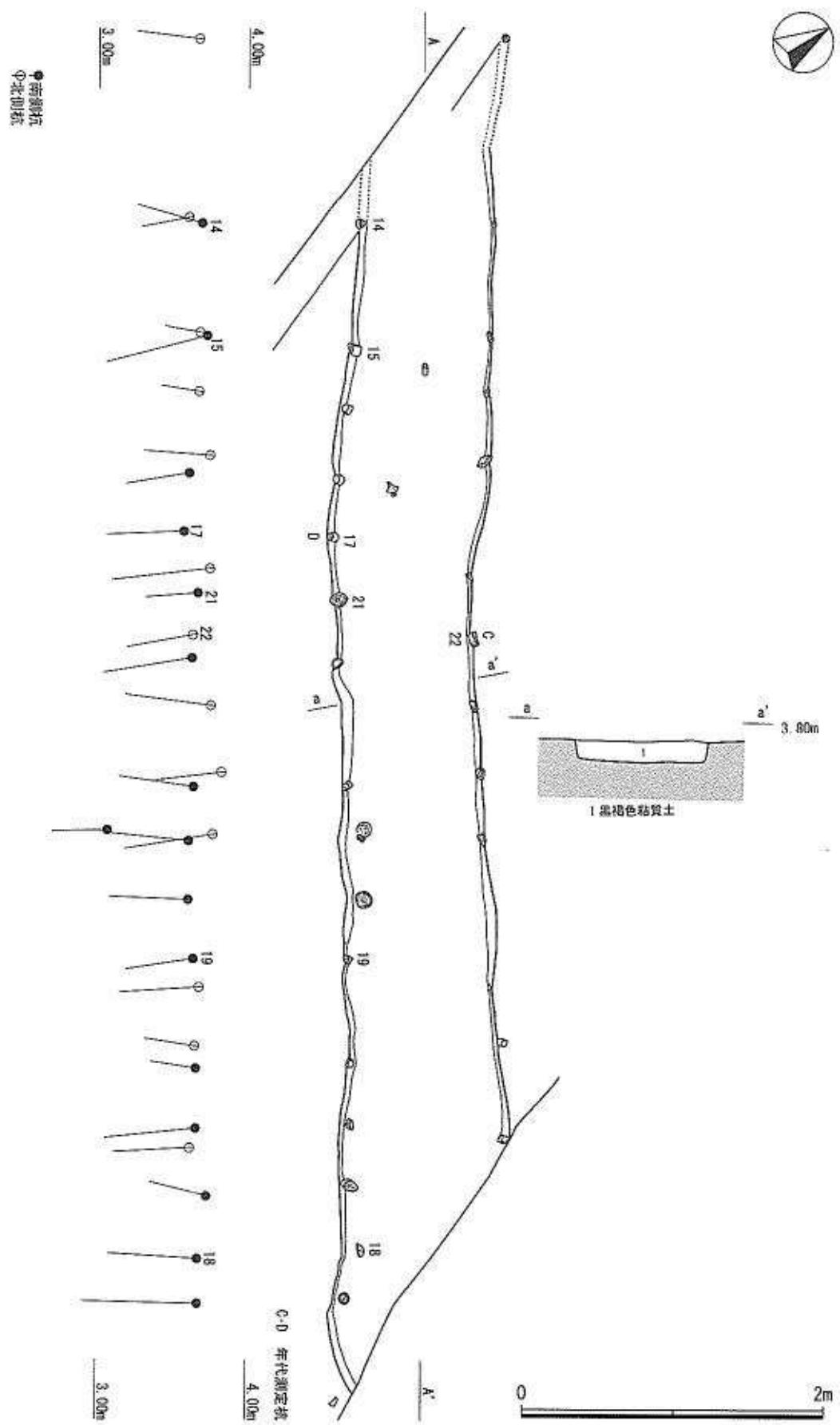
道路上面からの出土遺物は、土師器、須恵器、青磁、白磁、陶器等がある。

#### (4) 3号溝（第7図・写真10）

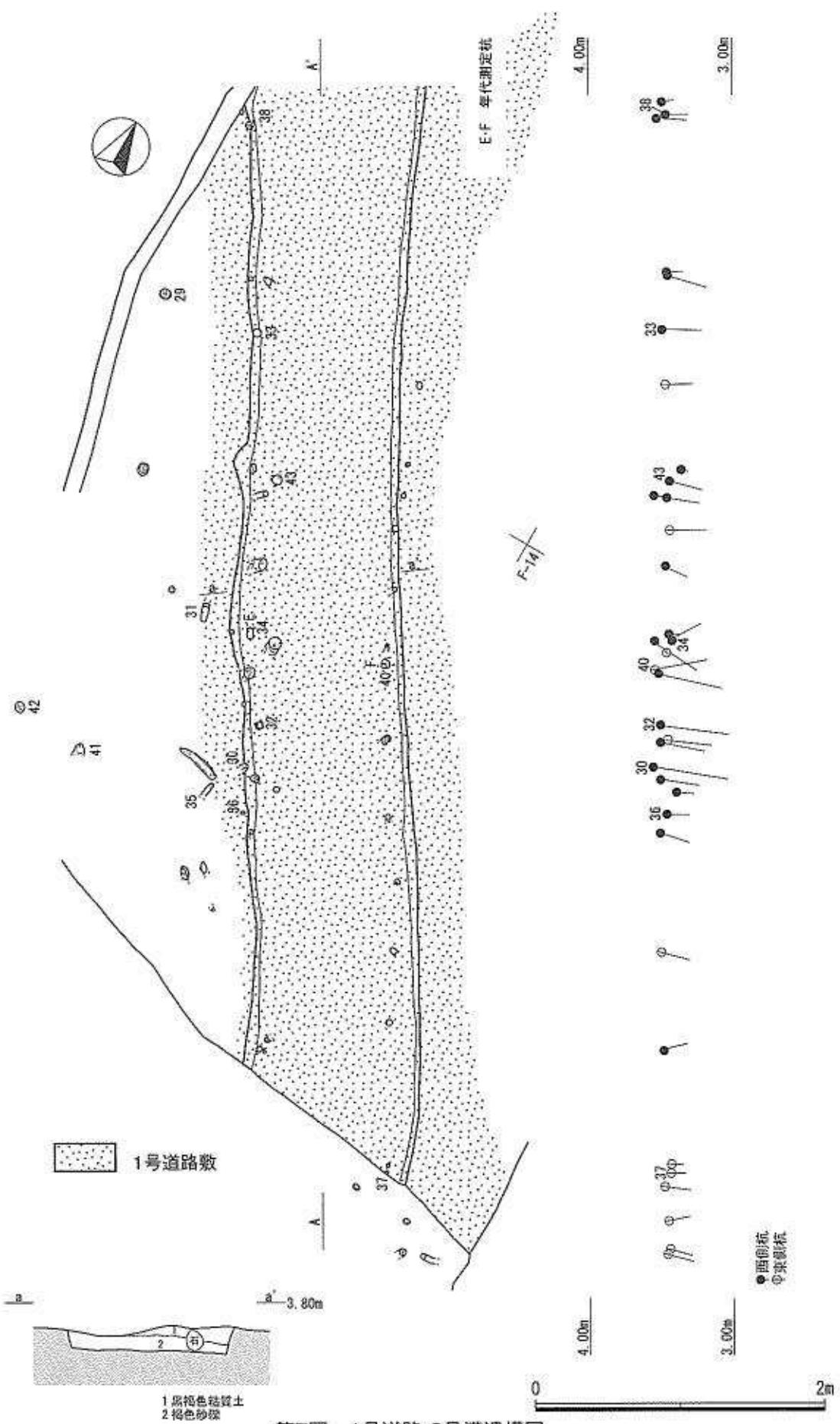
I区のE・F-14・15グリッドで検出された。東西方向の溝でその両端は調査区外に延びていて、全形は不明である。1号道路の直下から検出された。方位はN-40°-Wである。検出した規模は、長さ8.2m、深さ20cm、検出標高は上面3.68m、下面3.4mとなっている。溝の断面は、上面幅116cm、底面幅108cmで形状は逆台形である。覆土は黒褐色粘質土と褐色砂礫で、溝に伴う29本の杭を確認できた。溝の両端に等間隔に並ぶ杭を確認できたが、他の溝ほど規則的ではなく、杭自体も小さく劣化が進んでいた。掘り下げ時に一部で横木が確認されている。当時の溝の周囲はいわゆる低湿地で、土留めの横木を渡した溝を水路として利用していたと思われる。杭頭の検出標高は3.4m～3.6mであり、耕作地の地表面が標高3.8mであることから、杭の上部が失われた可能性が考えられる。杭は直径2cm～3cm、長さ10cm～30cmと小さいものが多く、1号・2号溝とは異なる。杭の年代測定では、12世紀～15世紀が測定されている。



第5図 1号溝遺構図



第6図 2号溝遺構図



出土遺物は、土師器、須恵器、陶器等がある。

## 2 杭列

II区に2条、III区に1条、計3条の杭列が検出された。1号杭列と2号杭列はそれぞれ両端が調査区外に延びているため詳細は不明だが、あるいは連続する杭列の可能性もある。1号・2号杭列がゆるやかに東へカーブしていることと、1号・2号溝の走行方向については、何らかの相関関係が窺われるが、今回の限られた調査範囲では明確にはできなかった。1号・2号杭列では杭列がそれぞれ何列か確認できるので、長期間にわたって何回かの改修を重ねて機能していたと思われる。明治時代に作成された郷図により、幕末までここに用水路が存在していたことがわかっているが、1号・2号杭列はこの用水路に伴う遺構と考えられる。あるいはまた、杭列の一部は郷境を示すものであった可能性もある。これらの杭列は、12世紀から幕末まで改修を重ねながら機能していたと思われる。

3号杭列は調査区をほぼ横断する形で検出された。その両端は調査区外に延びており、軟弱な地盤に細い杭が打ち込まれていて、その性質は不明である。時代は中世と思われる。

### (1) 1号杭列 (第8図・写真6、7)

III区のI-2~5グリッドで検出された。調査開始時に入れた試堀杭で杭らしきものを確認できたので、注意して掘り下げたところ杭列が出土した。調査区東壁に沿う形で検出されたが、南北方向の杭列でその両端はいずれも調査区外に延びていて全容は不明である。検出した杭列の全長は14mである。何回もの改修が重なっていて、そのなかで2列の杭列を確認できた。方位はおおよそN-5°-Wであるが、杭列は直線ではなくゆるやかにカーブしている。用水路に伴う杭列と考えられるが、掘り込み等は確認できなかった。1号杭列として取り上げた杭は252本を数える。杭頭の検出標高は3.7m~4.1mだが、耕作地の地表面の標高が4.2mなので、当時の土砂災害か現代の耕作により杭の上部は失われた可能性が高く、また倒れた杭も多く見られた。杭は直径3cm~5cm、長さ20cm~40cmのものが多いが、最長の杭は長さ105.8cmもあり、渕土層下の礫層まで深く打ち込まれていた。時代は12世紀~幕末と考えられる。

出土遺物は、縄文のフレーク・石核、古代の土師器・須恵器、中世の陶器等がある。

### (2) 2号杭列 (第9図・写真2、3)

II区のH-7~9グリッドで検出された。1号杭列と同じように調査区東壁に沿う形で検出された。南北方向の杭列でその両端は調査区外に延びているため、詳細は不明であるが、杭列がカーブして続くなれば1号杭列とつながる可能性もある。掘り込み等は特に確認できなかった。直線的でまばらな杭列2列と、ゆるやかにカーブする密集した杭列2列が確認できるが、この違いは性質が異なるものなのか、時期的なものなのかは不明である。方位はおおよそN-

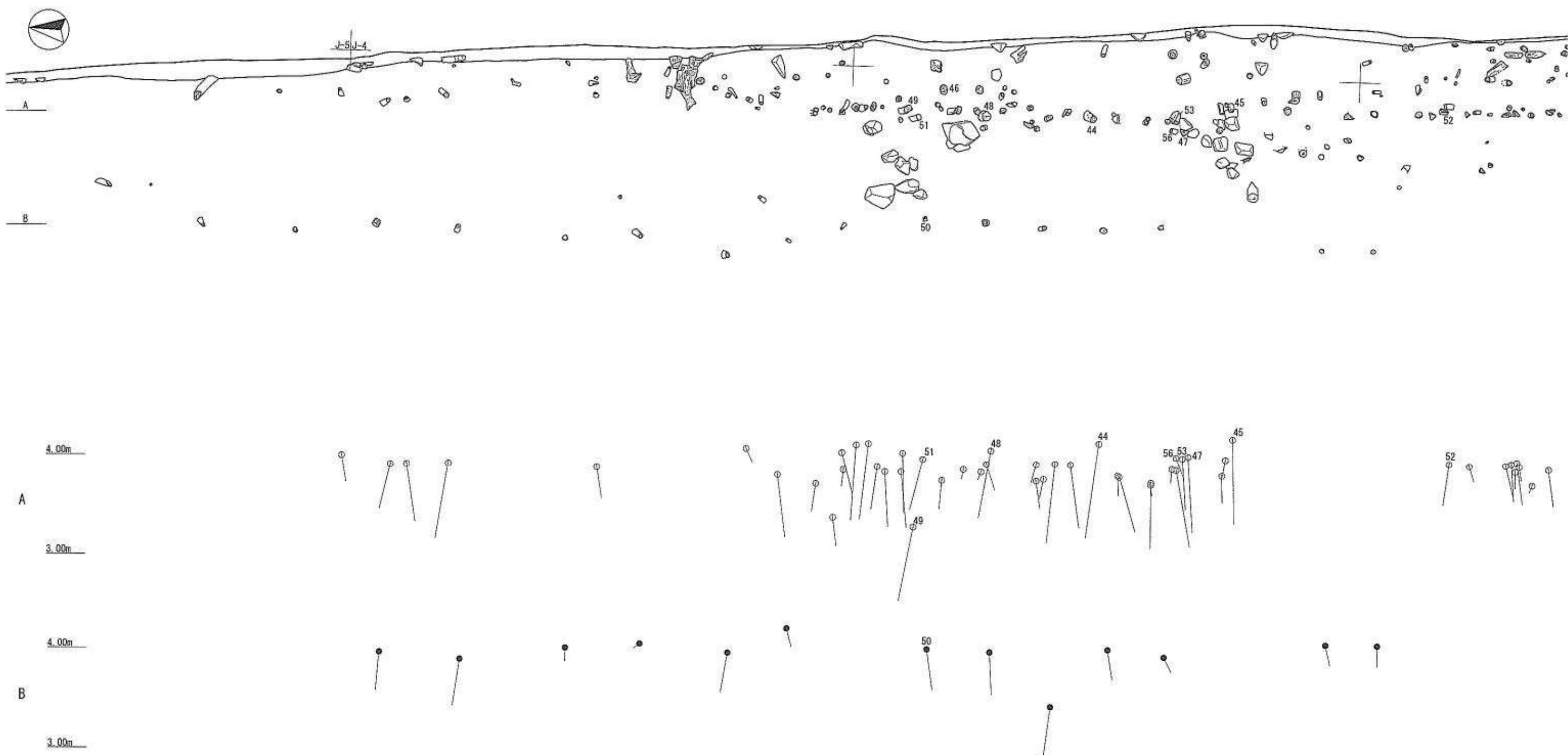
20° -Wである。検出した杭列の全長は20mである。その南側は2号溝内に密集する40数本の杭に統くが、杭位置や杭の標高からこれらの杭は2号杭列に属する可能性が高く、ここでは2号杭列に伴う杭として掲載している。これらは2号溝が機能しなくなった後に2号杭列が改修された際、打ち込まれた杭列と考えられる。2号杭列では今回の調査で最も長い杭を検出しているが、1号杭列と同様に杭頭の検出標高が3.5m～3.8mであり、当時の土砂災害か現代の耕作により杭上部が失われた可能性がある。杭は282本を数えた。杭の直径は3cm～5cm、長さ30cm～50cmのものが多く、1号杭列よりも若干長めである。そのためもあるのか、倒れた杭は1号杭列よりは少なかったように思われる。最長132.5cmの杭を検出している。長い杭は軟弱な潟土層下の疊層に深く打ち込まれていた。時代は12世紀～幕末と考えられる。

出土遺物は、土師器、須恵器、漆器椀、桃の種子等がある。

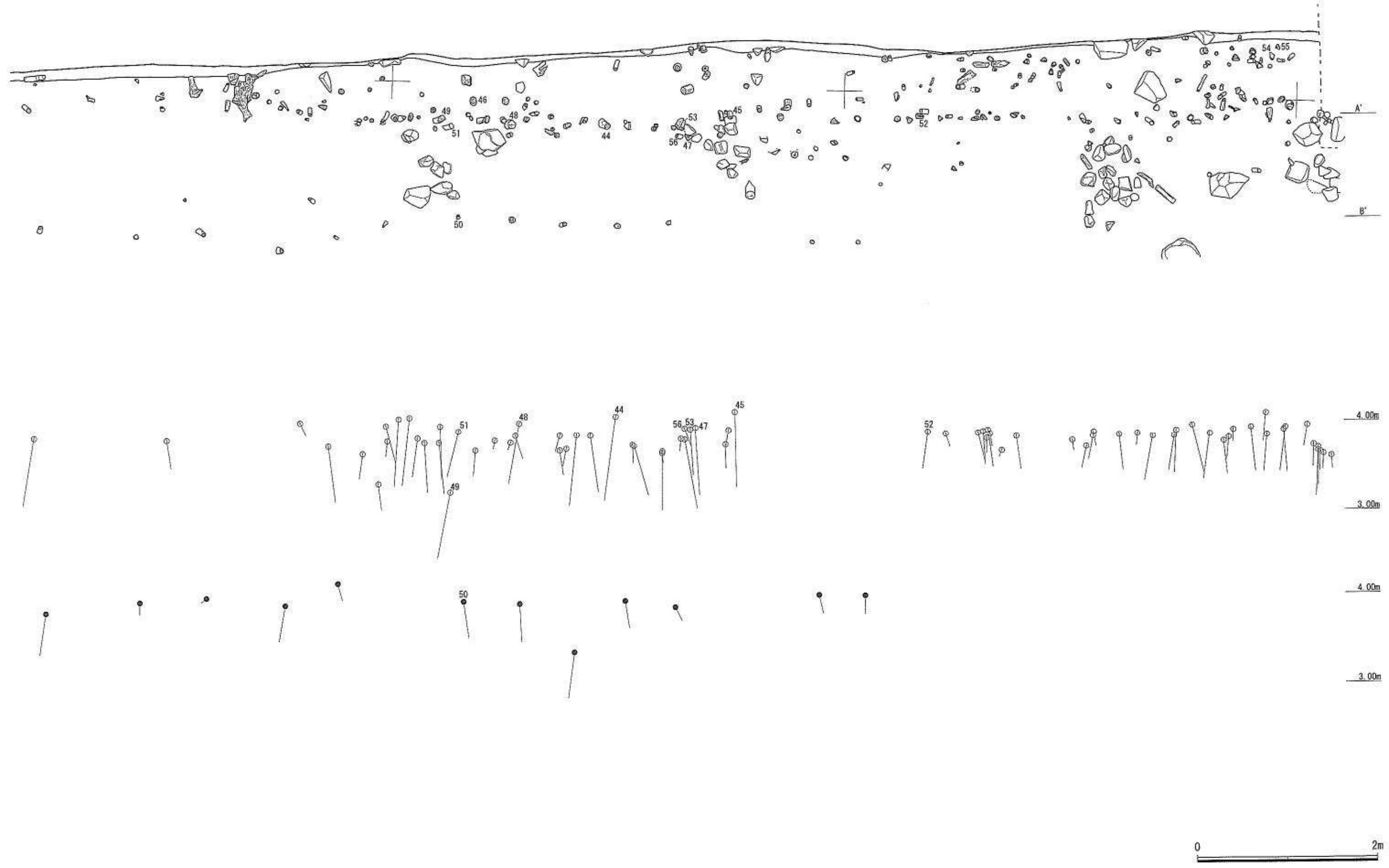
### (3) 3号杭列（第10図・写真4）

II区のF・G-11グリッドで検出された。調査区を横断する形で検出されている。東西方向の杭列でその両端は調査区外に統き、詳細は不明である。方位はN-71°-Eである。1号・2号杭列とは異なり、細く小さな杭が軟弱な潟土層に打ち込まれて不規則に並んでいる。杭の検出標高は3.4m～3.5mである。杭の総数は21本で、杭の直径3cm～4cm、長さ20cm～40cmのもの多かった。全体的に細くもろい杭が多く、取り上げできないものもあった。掘り込み等は特に確認できなかった。3号杭列に伴う遺物と断定できるものはなかったが、周辺の同じ標高からは土師器等が出土している。

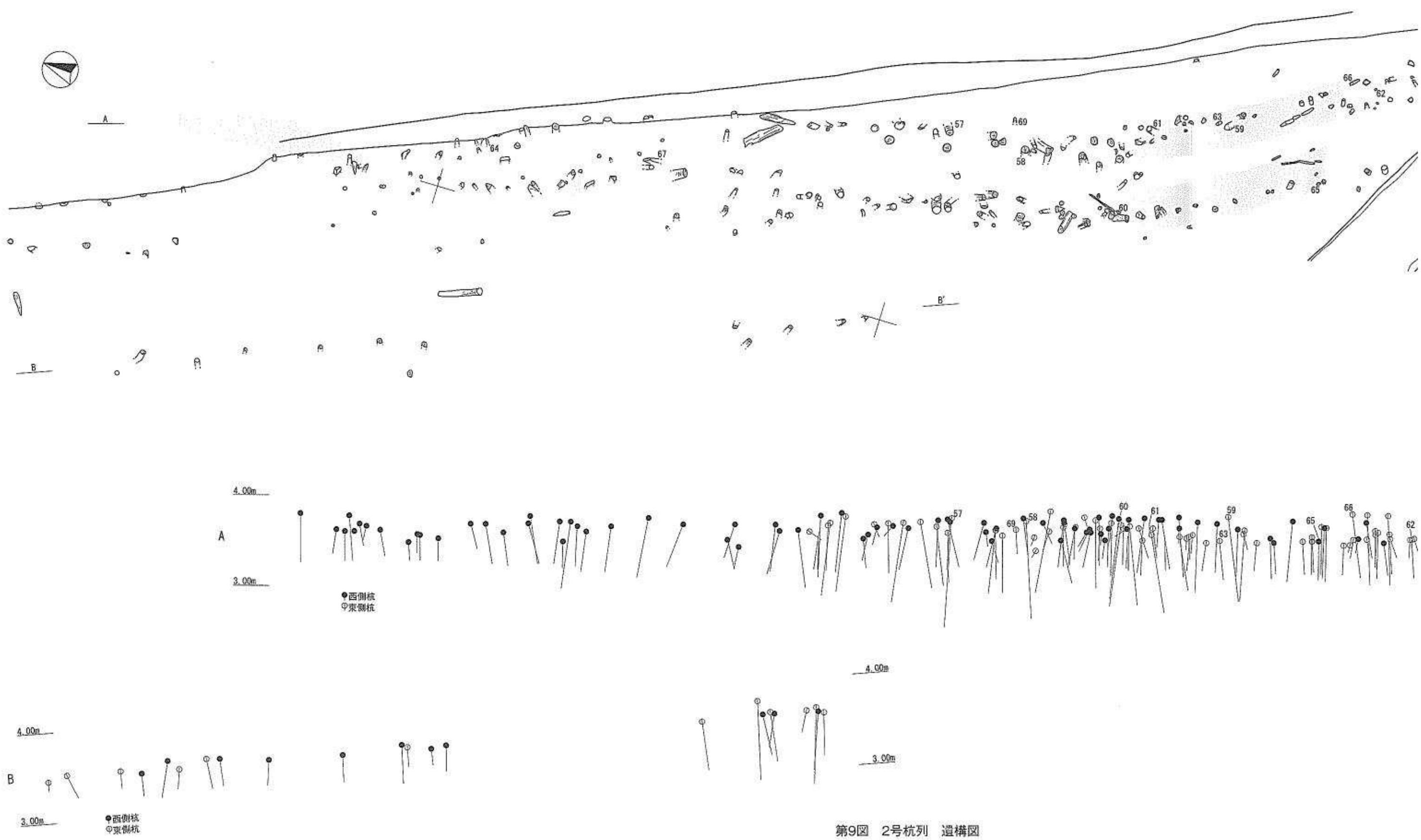
（長尾聰子）



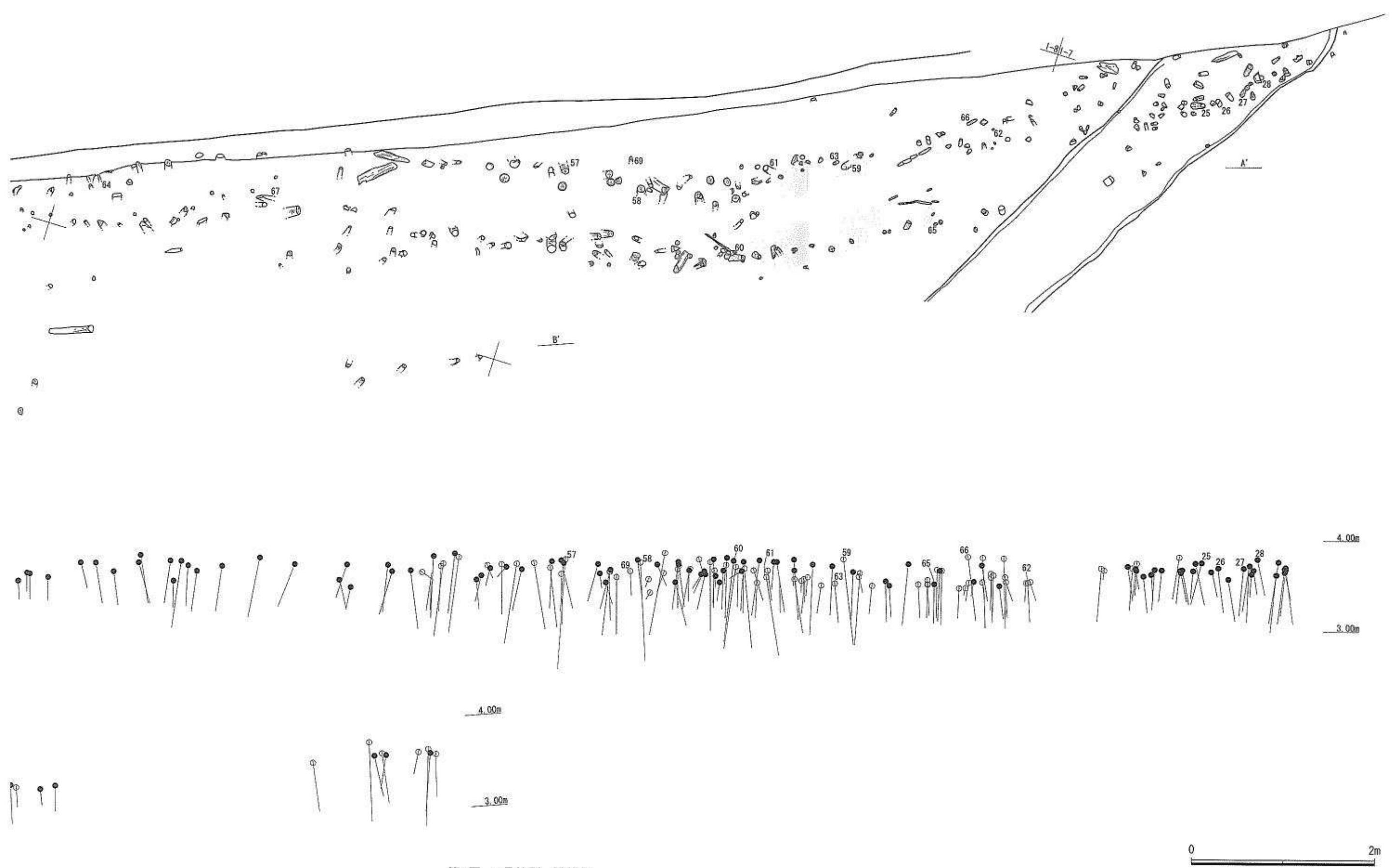
第8図 1号杭列遺構図



第8図 1号杭列遺構図

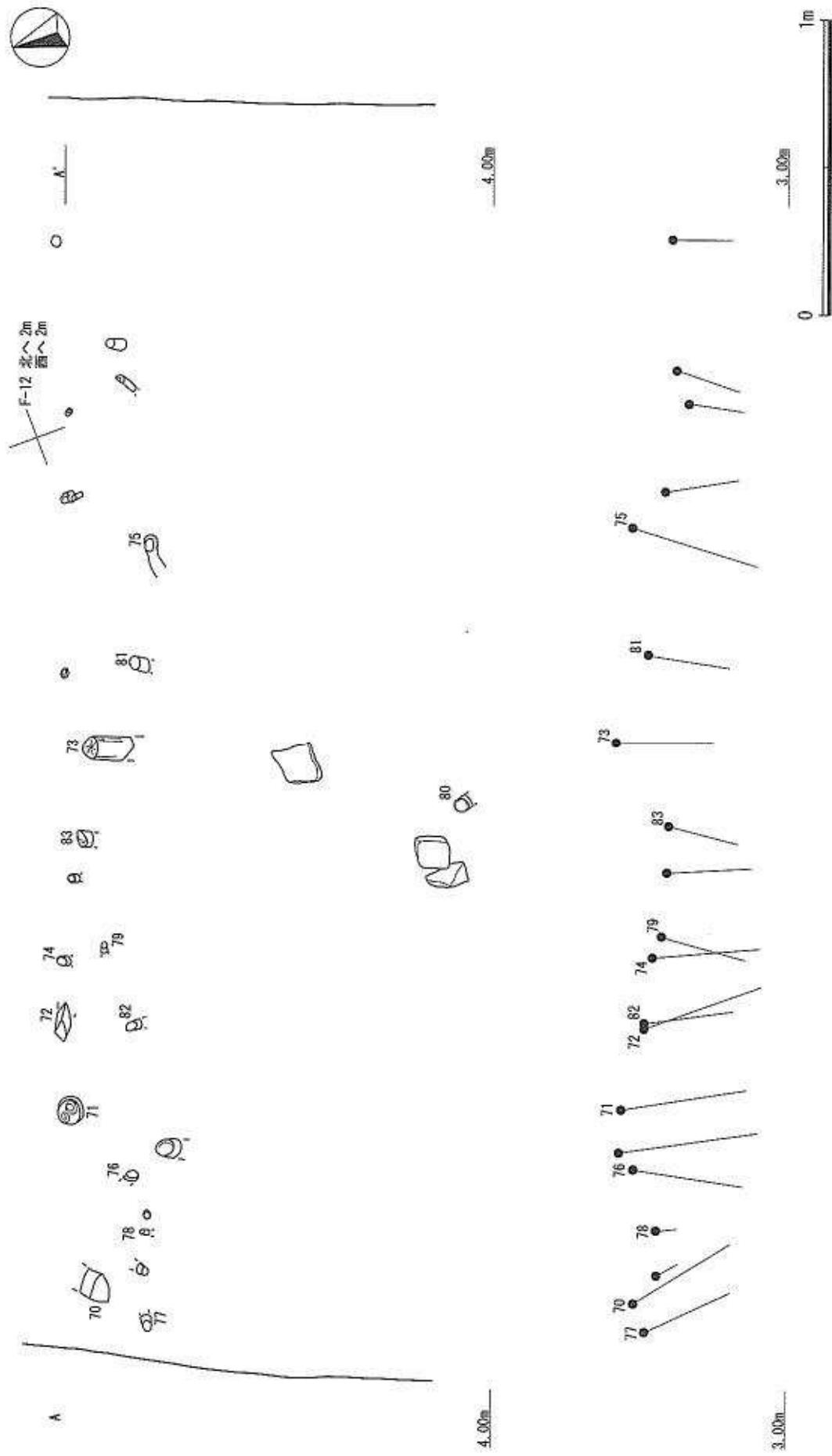


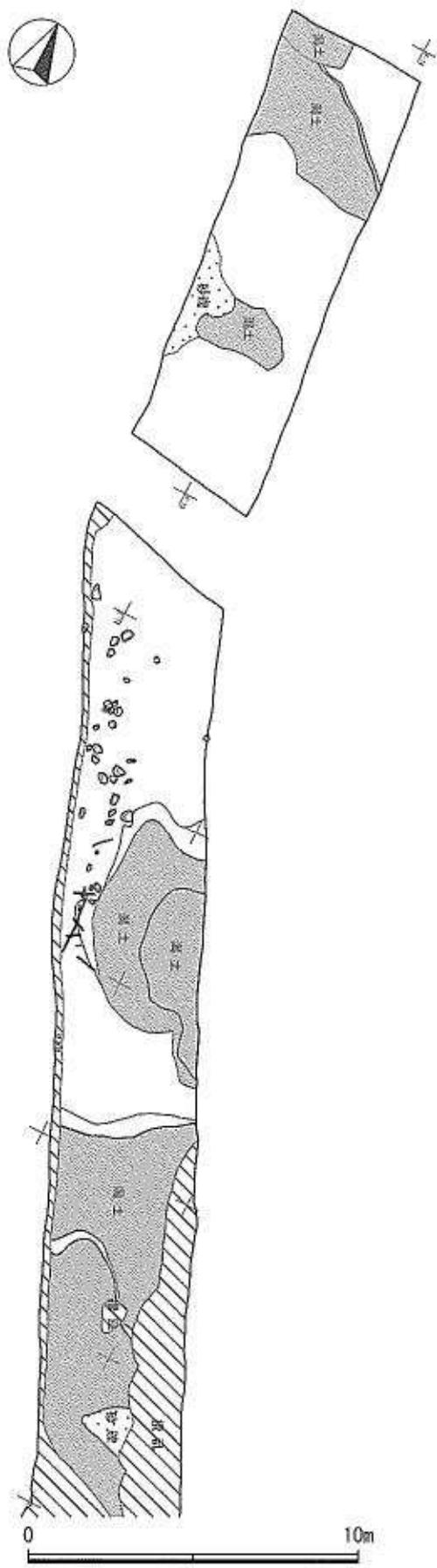
第9図 2号杭列 遺構図



第9図 2号杭列 遺構図

第10図 3号杭列 遷構図



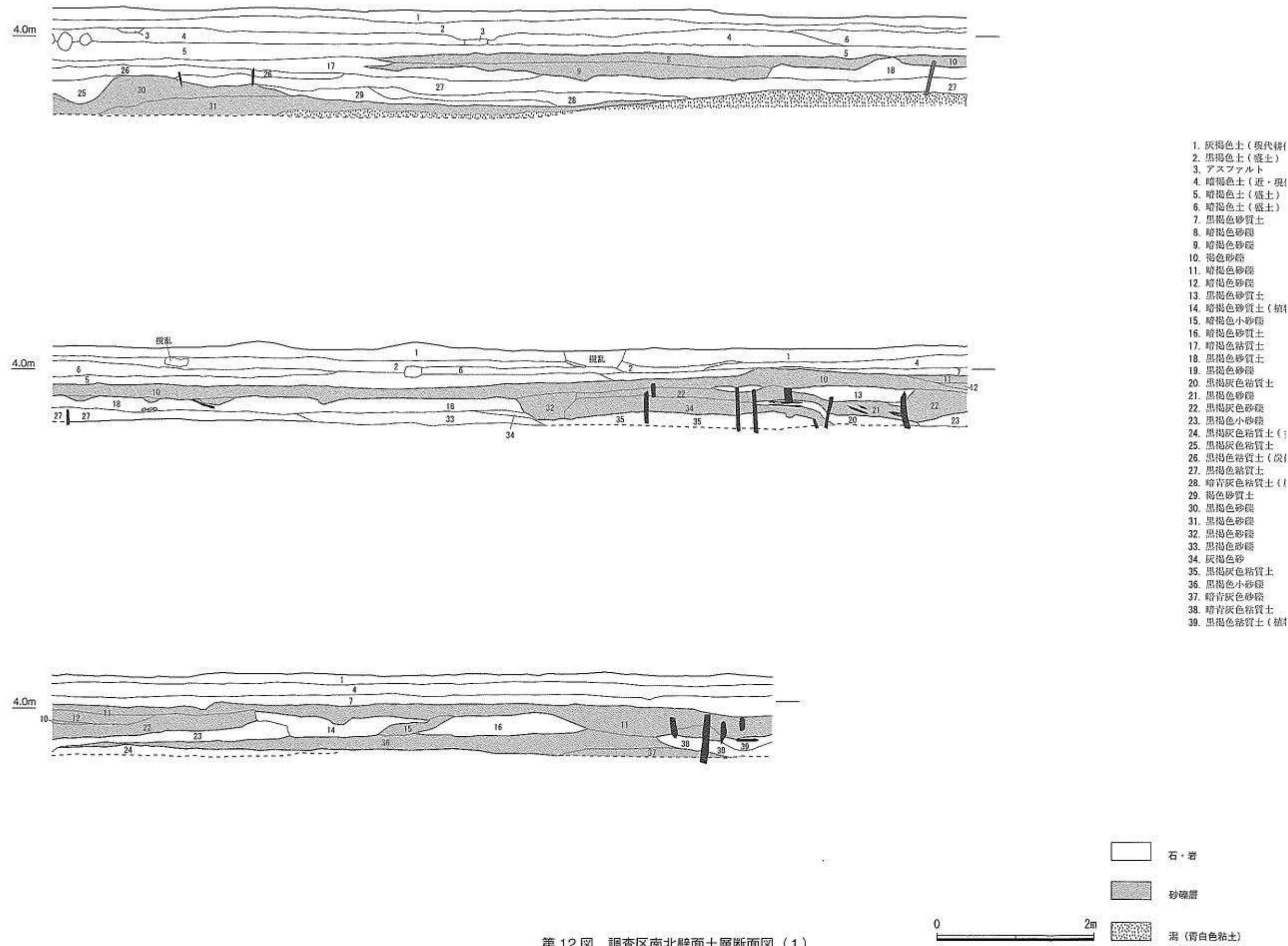


第11図 古代遺物包含層完掘図(1)

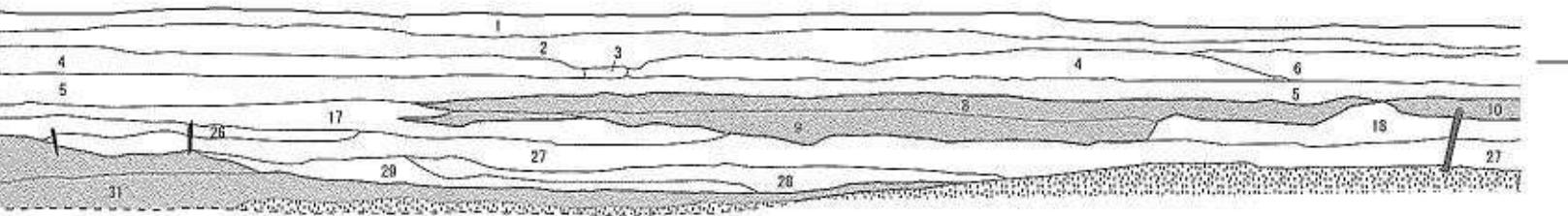
### 3 調査区の土層と遺物分布

掘削作業は潟土層（青白色有明粘土層）または角礫岩の基盤層を検出して終了する予定であった。潟土層の堆積年代が約9000年前とされており、潟土層以下には遺構の存在の可能性がないと考えられたからである。第11、14図は古代の遺物包含層の完掘図で、掘削作業終了時のものである。図の中で斜線部分は1、2号溝と1、2号杭列の杭を取り上げるために掘った部分である。この図のように潟土層は調査区の全面には検出されず、潟土層を検出したのはI区の一部、E,F-11区、Y軸10区～6区、3,4区の一部であった。潟土層でない部分は、潟土層を削ってできた小さな谷や凹んだ部分となっていて、そこに上流からの土砂が堆積していた。この谷部や凹部に積層していた土には近世の遺物は含んでいないが、中世と古代の遺物を含んでいる層と古代の遺物のみを含んでいる層がある。第12図は調査区の東壁土層断面図でE-13区からH-7区北半部まで、第13図は残りのH-7区南半分からI-2区部分の土層図である。グレーに塗ってある部分は土層中に含まれる砂礫が40%以上の砂礫層と砂層である。この40%というのは便宜的なもので、礫の大きさは様々であるがほとんどが河道や流路中にあった状況である。さて、第12図の土層断面図にみられる28層～31層の黒褐色砂礫層、黒褐色粘質土層、Ⅲ区の76層の灰黄褐色砂礫層がこの遺物包含層にあたる。そしてこれらの遺物包含層の下層部分には30cm～50cm大の川原石が散在しており、一時はかなり強い流れがこの部分を流れていたものと見られる。この下層部分からは中世の遺物は含まれず、古代や古墳時代の遺物のみが出土した。

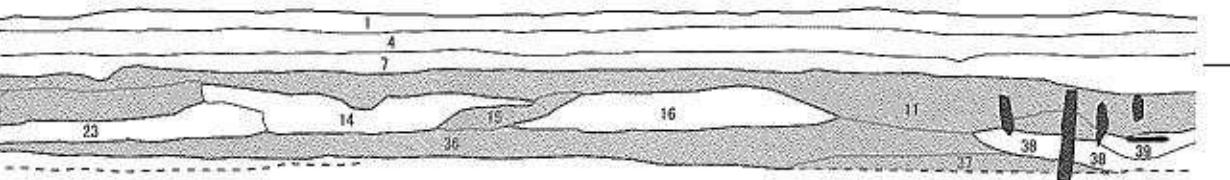
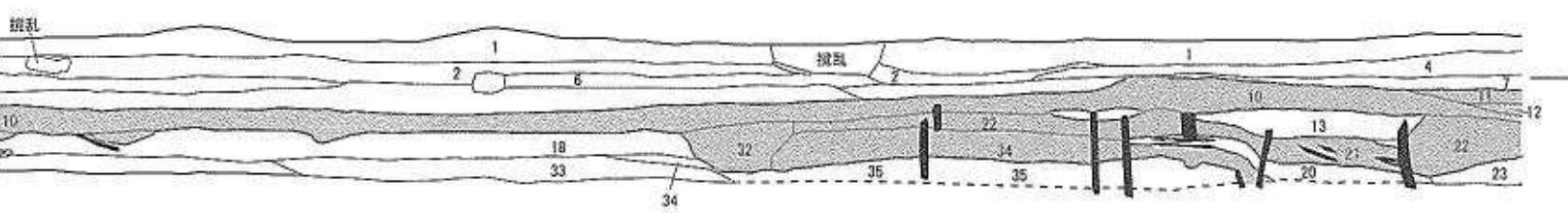
これらの遺物は年代的に一時期のものとは考え



第12図 調査区南北壁面土層断面図 (1)



1. 灰褐色土（現代耕作土）  
 2. 黒褐色土（底土）  
 3. アスファルト  
 4. 暗褐色土（近・現代の古い底土）  
 5. 暗褐色土（底土）  
 6. 暗褐色土（盛土）  
 7. 黒褐色砂質土  
 8. 暗褐色砂礫  
 9. 暗褐色砂礫  
 10. 暗褐色砂礫  
 11. 暗褐色砂礫  
 12. 暗褐色砂礫  
 13. 黑褐色砂質土  
 14. 暗褐色砂質土（植物遺体を含む）  
 15. 暗褐色小砂礫  
 16. 暗褐色砂質土  
 17. 暗褐色粘質土  
 18. 黑褐色砂質土  
 19. 黑褐色砂礫  
 20. 黑褐色粘質土  
 21. 黑褐色砂礫  
 22. 黑褐色砂礫  
 23. 黑褐色小砂礫  
 24. 黑褐色粘質土（多量の植物遺体を含む）  
 25. 黑褐色粘質土  
 26. 黑褐色粘質土（炭化物を含む）  
 27. 黑褐色粘質土  
 28. 暗青灰色粘質土（炭化物を含む）  
 29. 暗褐色砂礫  
 30. 黑褐色砂礫  
 31. 黑褐色砂礫  
 32. 黑褐色砂礫  
 33. 黑褐色砂礫  
 34. 灰褐色砂  
 35. 黑褐色粘質土  
 36. 黑褐色小砂礫  
 37. 暗青灰色砂礫  
 38. 暗青灰色粘質土  
 39. 黑褐色粘質土（植物遺体を含む）



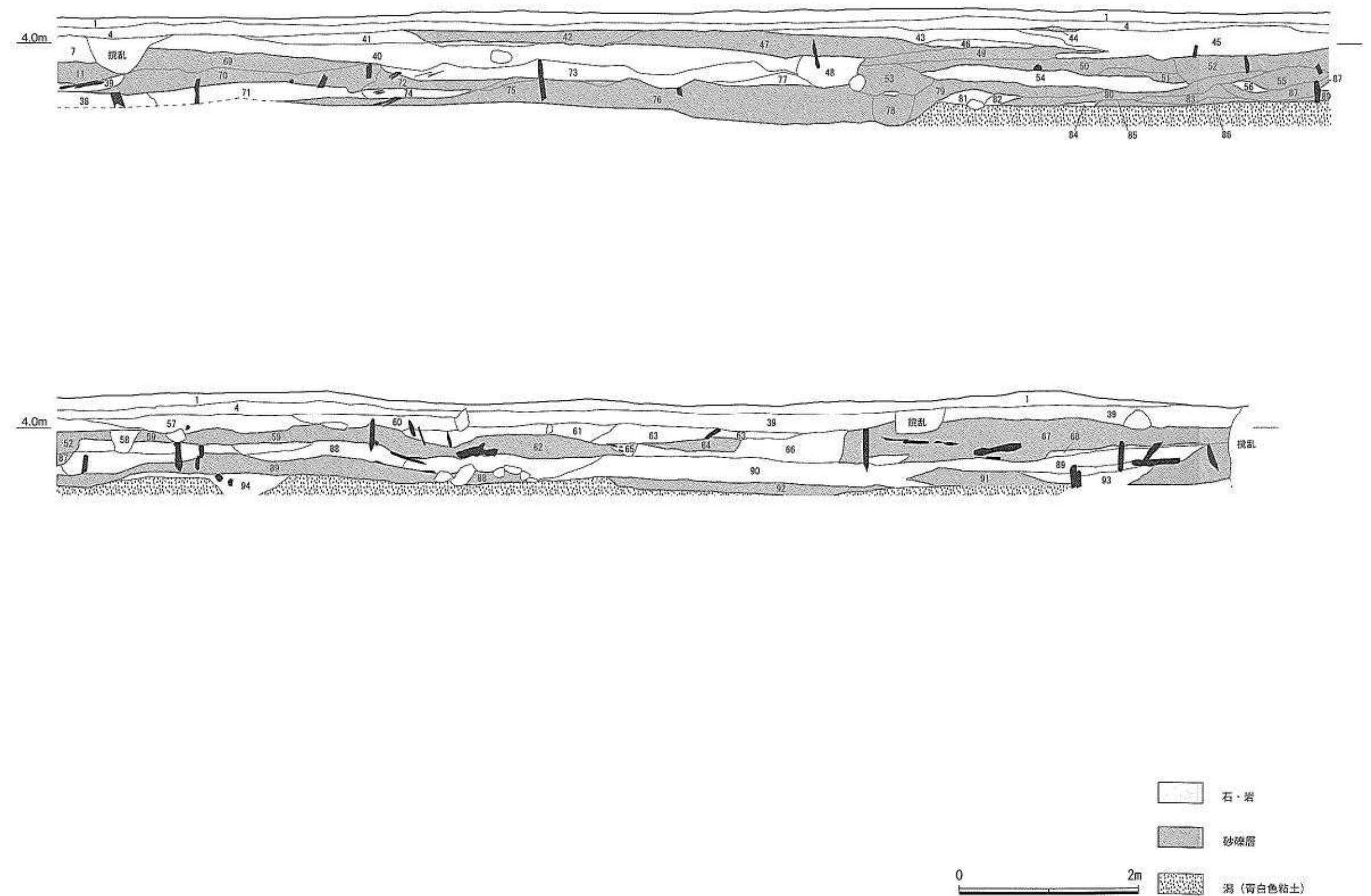
石・岩

砂礫層

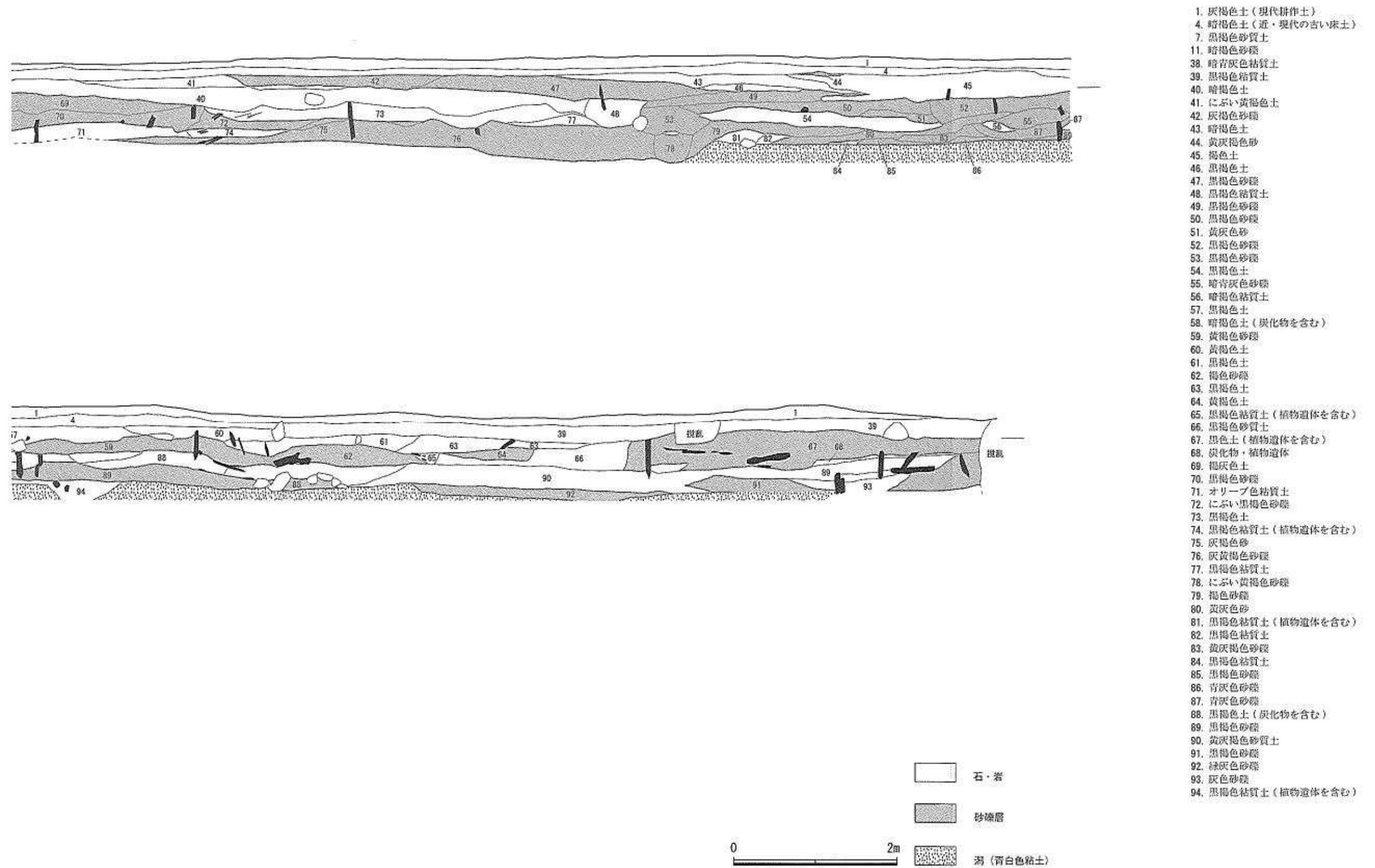
潟（青白色粘土）

0 2m

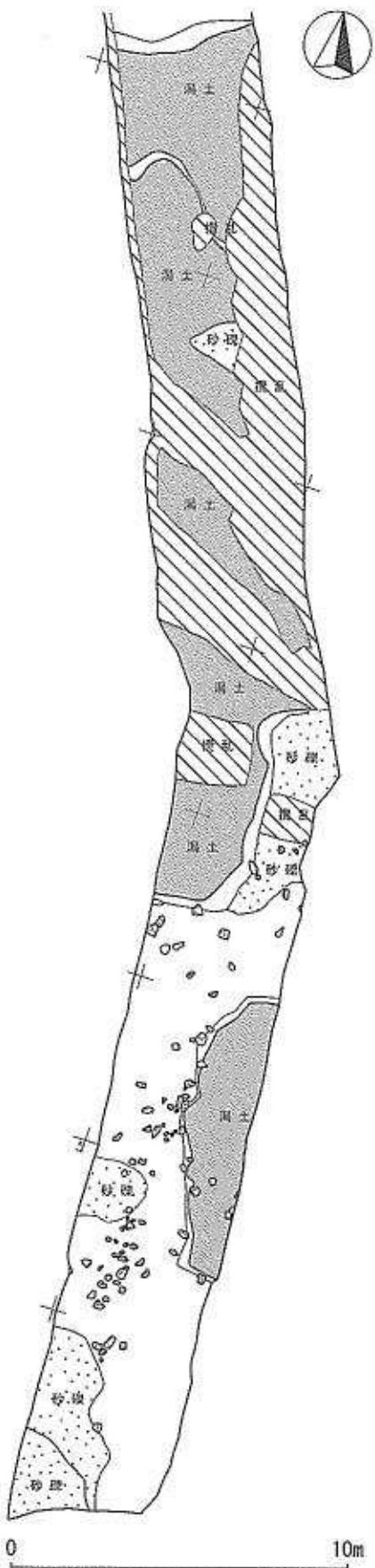
第12図 調査区南北壁面土層断面図（1）



第13図 調査区南北壁面土層断面図（2）



第13図 調査区南北壁面土層断面図（2）



第14図 古代遺物包含層完掘図(2)

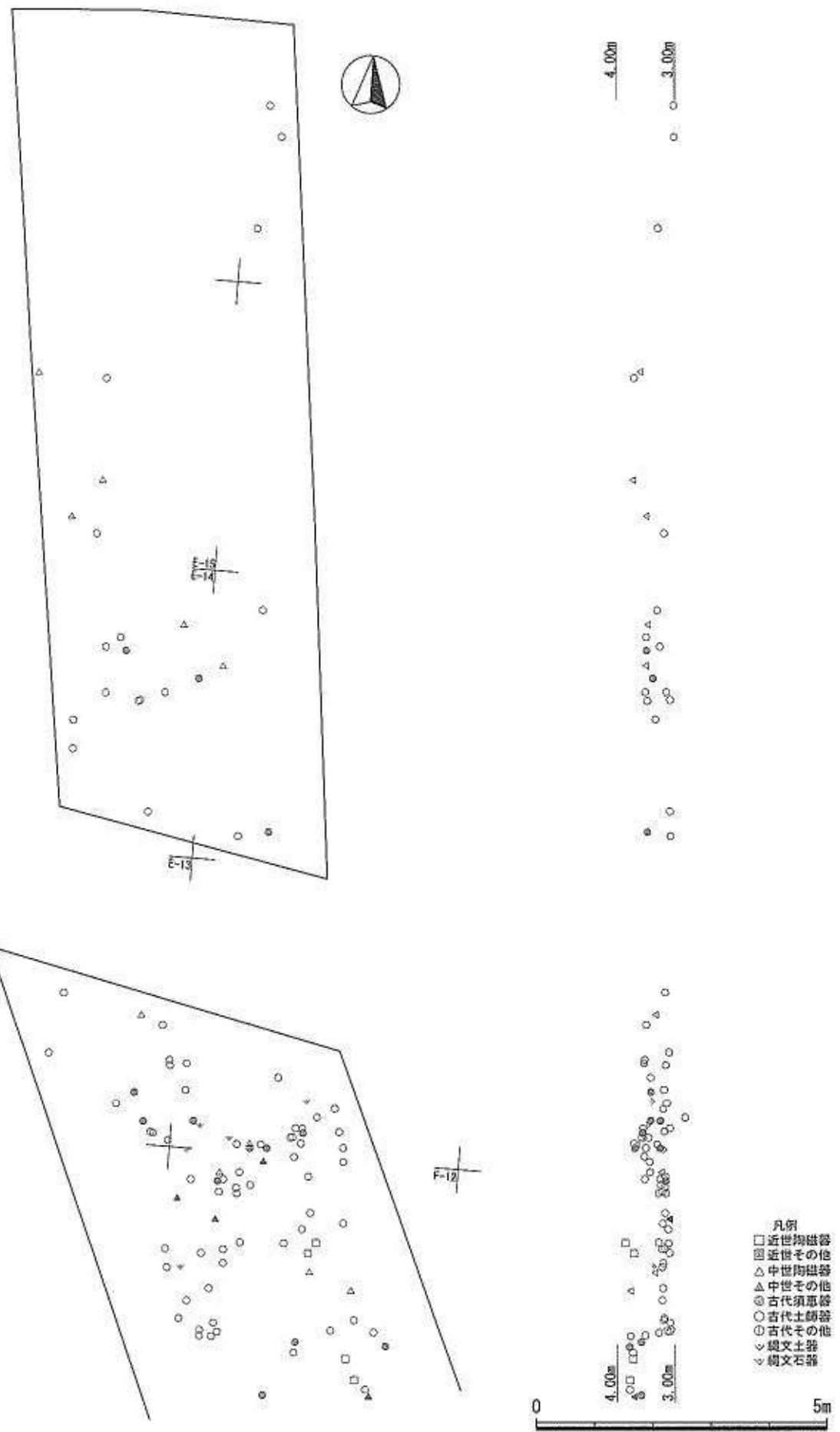
にくいことから、一ヵ所から運ばれてきたものではなく、少し広い範囲で一気に流されてきたものと見られる。

一方、第15図～第18図の遺物出土状況図を見てみると、全体としては近世の遺物は少なく、垂直分布ではほぼ上層に限られて出土している。標高3.7m前後を限界に下層部には出土していない。平面ではG-8区付近に遺物が比較的まとまって出土しているが遺構に伴うものではなく、盛り土に含まれていたものである。

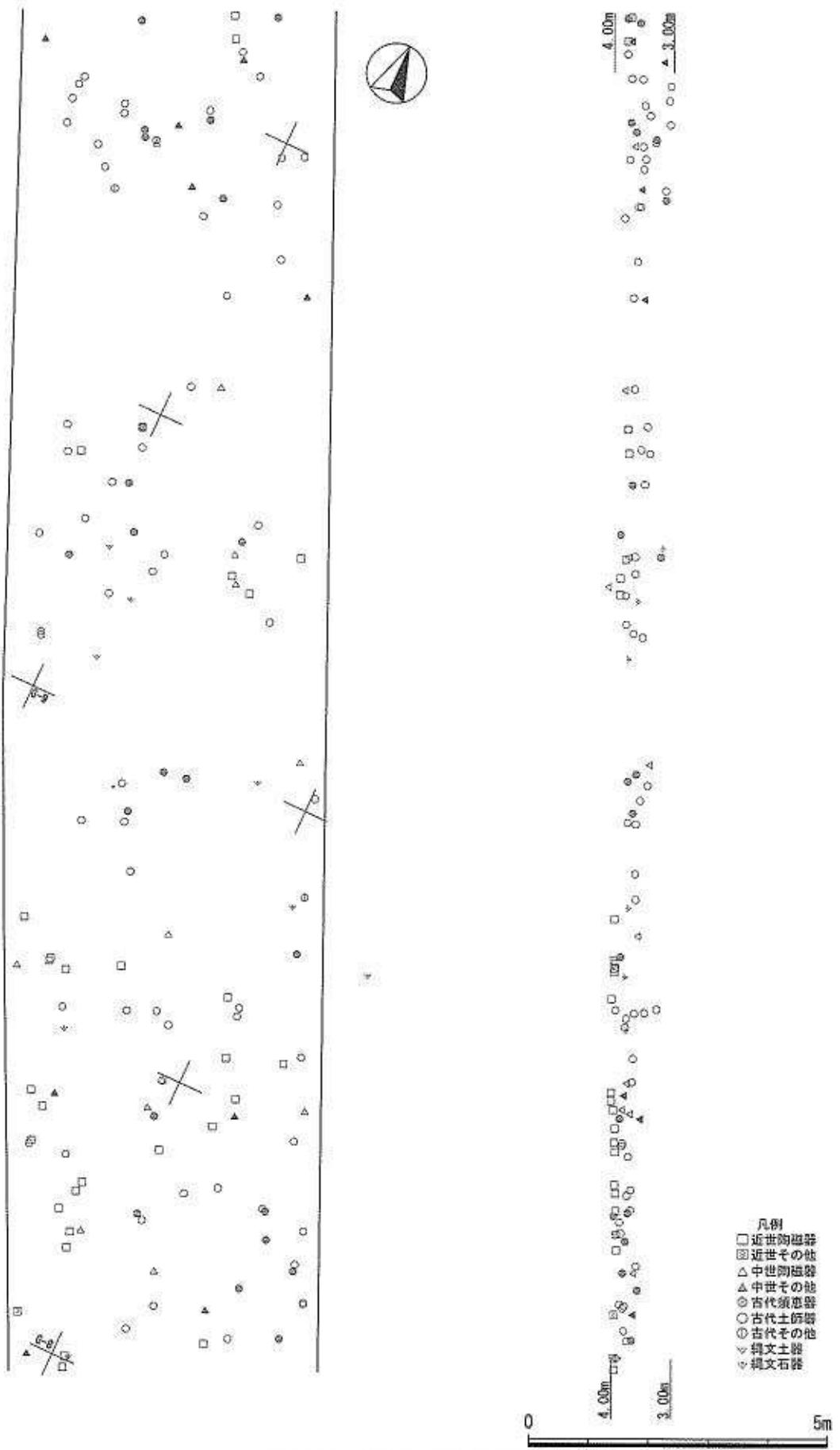
中世の遺物は上層から下層に至るまで幅広く出土していて、下層には先に述べた渴土の開折された部分にも一部及んでいる。木製品の多くがI-3区とH-11,12区の黒褐色粘質土からまとまって出土しており、蓮の種子もいっしょに出土していることから一時的沼地のような泥湿地になっていたものと思われる。

古代の遺物はI区を除いてほぼ全調査区から出土している。先にも述べたように出土分布には場所によって差が見られる。古代の遺物が集中して出土しているところはII区の北端の部分E-12, 13区と、III区のH-3～5区に見られる。この部分は渴土層の検出されない部分と重なっており、古代の遺物の多くが、流れ込みであることを裏付けている。

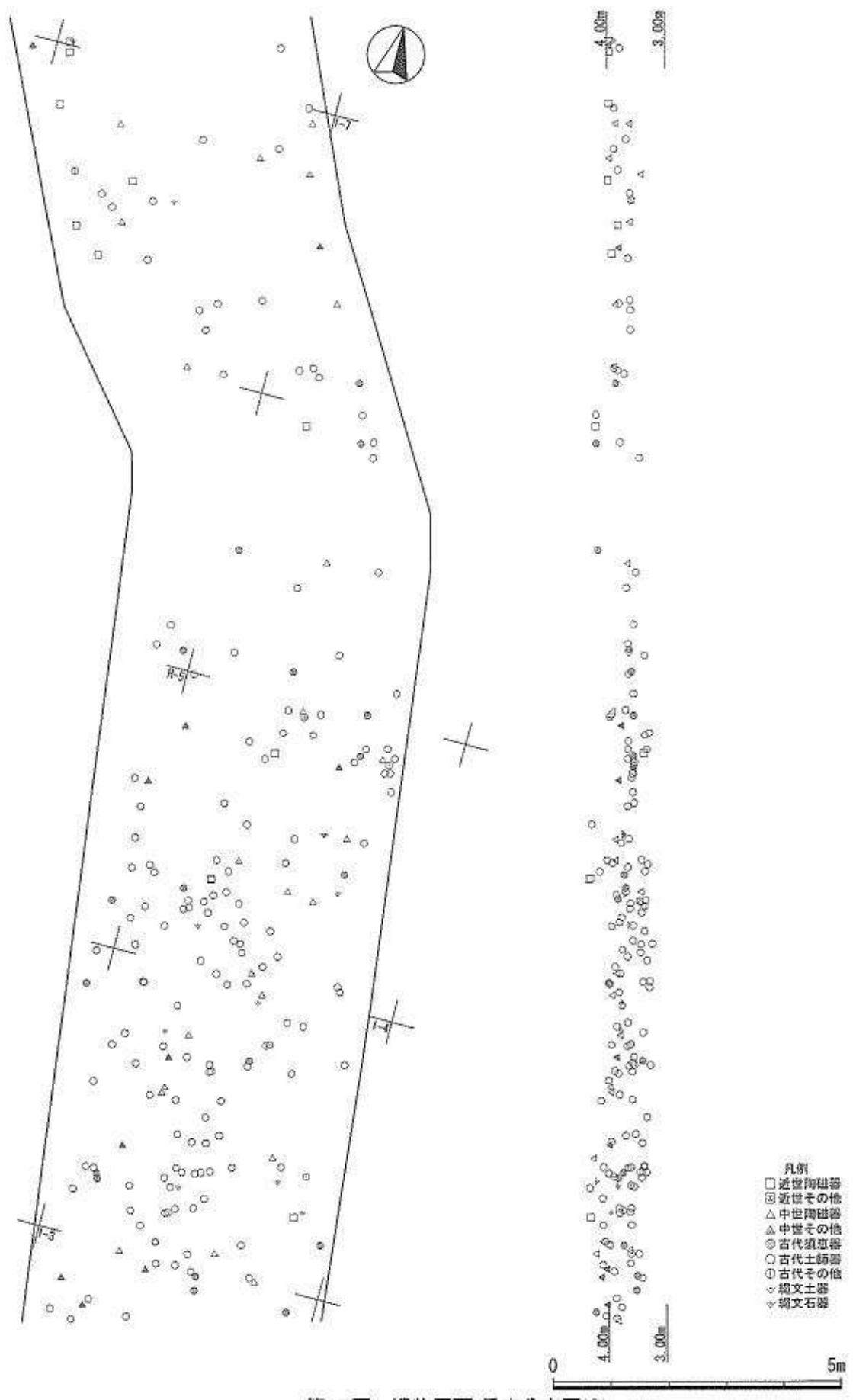
(園村)



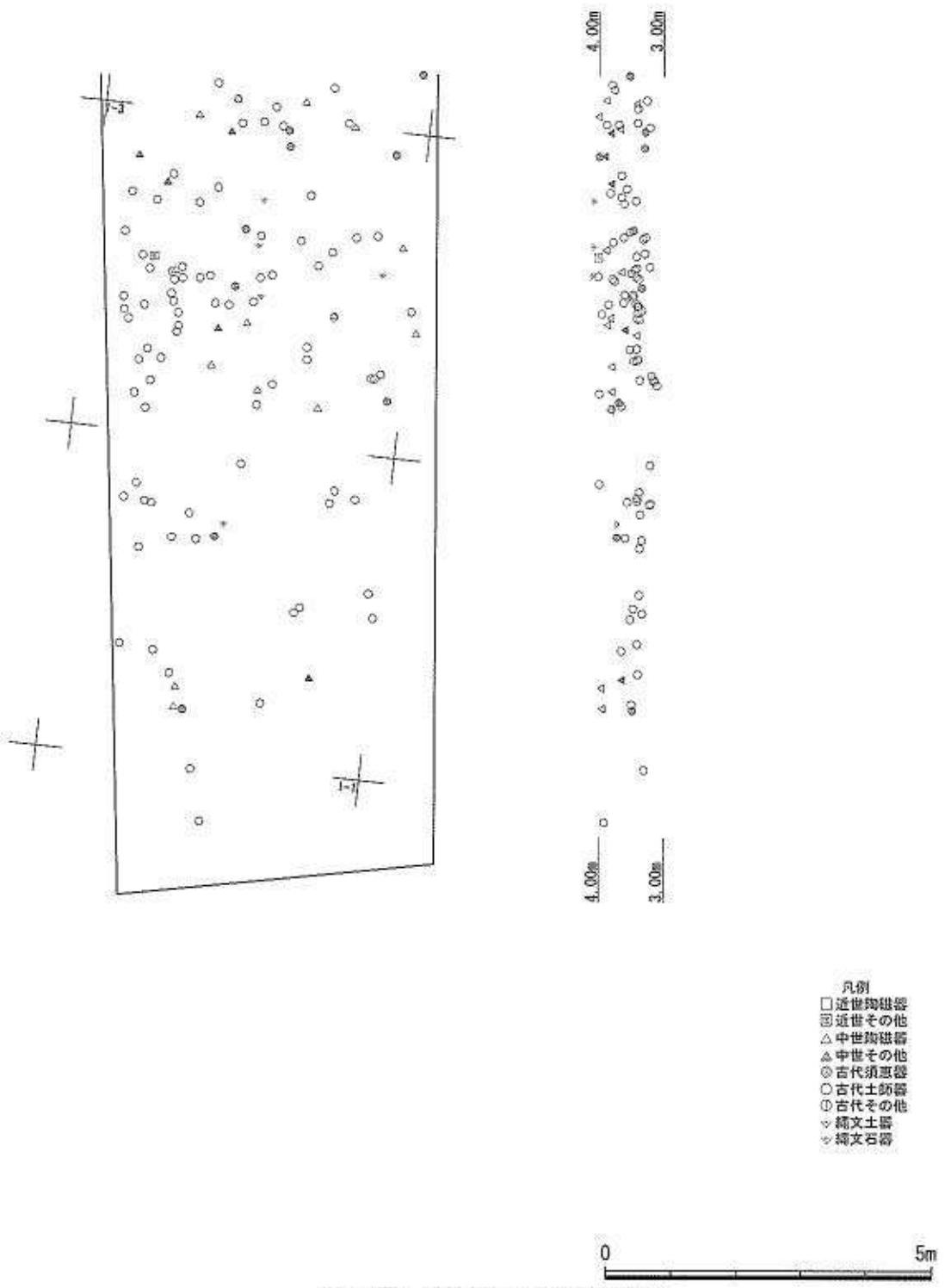
第15図 遺物平面・垂直分布図(1)



第16図 遺物平面・垂直分布図(2)



第17図 遺物平面・垂直分布図(3)



第18図 遺物平面・垂直分布図(4)

### III 遺 物

遺物の総量は 3430 点で、遺構に伴うものは多くはなく、そのほとんどが包含層からの出土である。大まかな時代に分けると縄文・弥生時代のものは縄文土器 6 点、弥生土器 3 点、石器・剥片 268 点で、土器と石器・剥片の量を比べると圧倒的に土器の量が少ない。古代のものは土師器が中心で土師器 2102 点、須恵器 214 点、施釉陶器 1 点である。古代のものの中には県内では出土例が少ない縁釉陶器や円面硯、特異的に出土した土師器高壙などが注意される。中世のものは国産陶器類 66 点、輸入磁器 80 点、輸入陶器 1 点、木製品 21 点である。このうち遺構に伴うものは少なく、5 点を図示した。また、木製品は主に中世包含層からの出土で、一部は古代にまで遡るものがあるかもしれない。近世のものは磁器 434 点、陶器 192 点、その他キセルや錢貨、瓦、ガラス製品など 102 点であった。

#### 1 縄文・弥生時代の遺物

この時期の土器はわずか 8 点が出土し、そのうち 7 点を図示した。いずれも小片のみで表面の摩耗が著しい。これらは何らかの遺構に伴っているものではない。隣接する小野宗方遺跡から同型式の土器がまとまって出土している。これらの土器は縄文時代前期の曾畠式土器とみられ、本遺跡出土のものもほぼ同時代のものと考えられる。

出土した土器は、後述する古墳時代以降の土器と同様に表面は磨耗している。これら 4 点は小野宗方遺跡でみられたような滑石粒を混入したものは見られなかった。

##### 縄文土器（第 19 図・写真 18）

図示した 4 点は、刺突文と沈線文を主文として組み合わせて幾何学的な文様を構成する曾畠式土器と考えられ、1 は左下りに斜行する沈線に水平と垂直の沈線を組み合わせた文様である。2 は横位に沈線を施したもの。3 は内外面の両面の最上位に 1 列の刺突文とその下位に 3 条の沈線を施す。4 は磨耗が著しく明瞭ではないが、横位の沈線を 3 ~ 4 条で 1 つのブロックとして配したものと思われる。

##### 弥生土器（第 19 図・写真 18）

図示した 3 点は、いずれも變形土器の胴部で、5, 6 は刻目を入れた 1 条の突帯を有するが、5 の突帯は鐶のように高くつくられ、焼成もよく焼きしめられている。7 は、幅の広い凸帯が 2 条巡っている。

##### 石器（第 20・21 図・写真 18）

出土した石器類は、剥片がほとんどで 268 点である。いずれも遺構に伴ったものではなく、土器同様流れ込みと考えられる。石器はほとんどが黒曜石であり、わずかに安山岩や流紋岩が使用されている。

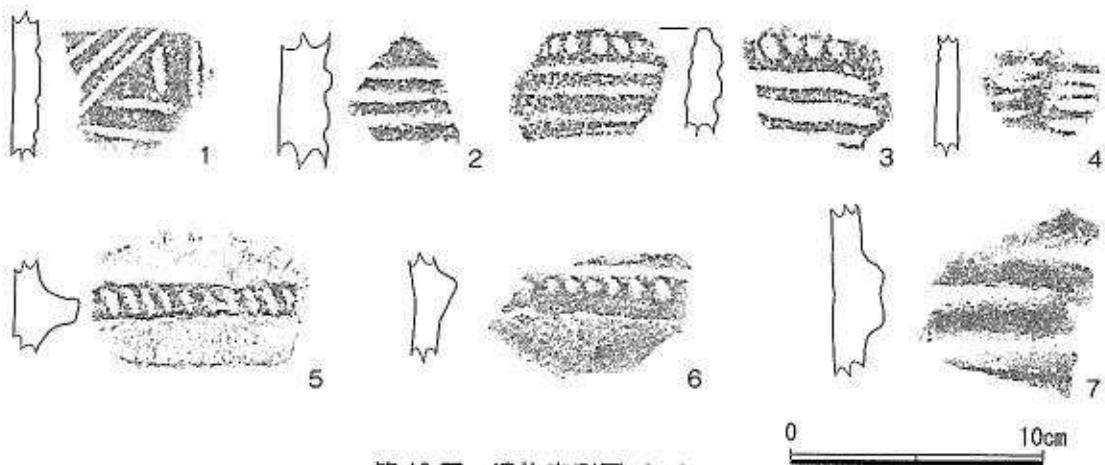
図示したものは、石鎌が 1 点、石槍 1 点、石匙 2 点、剥片 4 点である。1 は無茎の石鎌で、いわゆる凹基式である。先端を欠いている。基部の抉りが深く明確に脚部を作り出しており、

第1表 土器観察表（1）

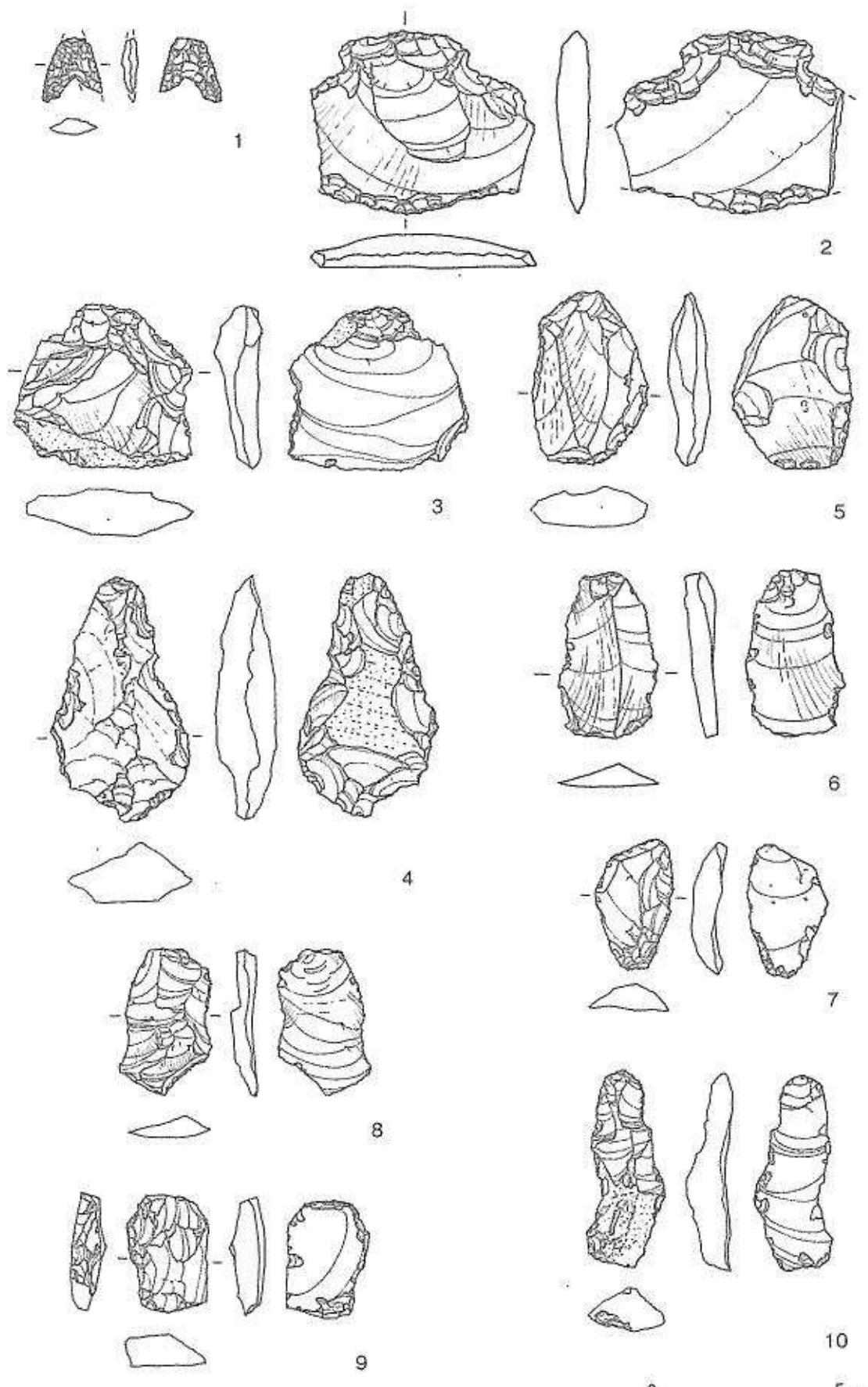
図	番号	グリッド	出土層位	器形	部位	色調	焼成	調整・施文	胎土	備考
19	1	I-5	黒褐色粘質土層	深鉢	胴	黄褐	良好	沈線	砂粒	曾畠式
	2	H-8	杭上層	深鉢	胴	黄橙	良好	沈線	滑石・砂粒	曾畠式
	3	F-10	江戸耕作土下層	深鉢	口	褐	良好	沈線・刺突	砂粒	曾畠式？
	4	I-5	杭上層	深鉢	胴	黄橙	良好	沈線	砂粒	
	5	I-5	黒褐色砂礫層	甕	胴	黄橙	良好	刻目突帯	砂粒	
	6	H-7	1.2号溝間砂礫層	甕	胴	黄褐	良好	刻目突帯	砂粒	
	7	H-7	杭上層	甕	胴	黄褐	良好		角閃・砂粒	

第2表 石器観察表

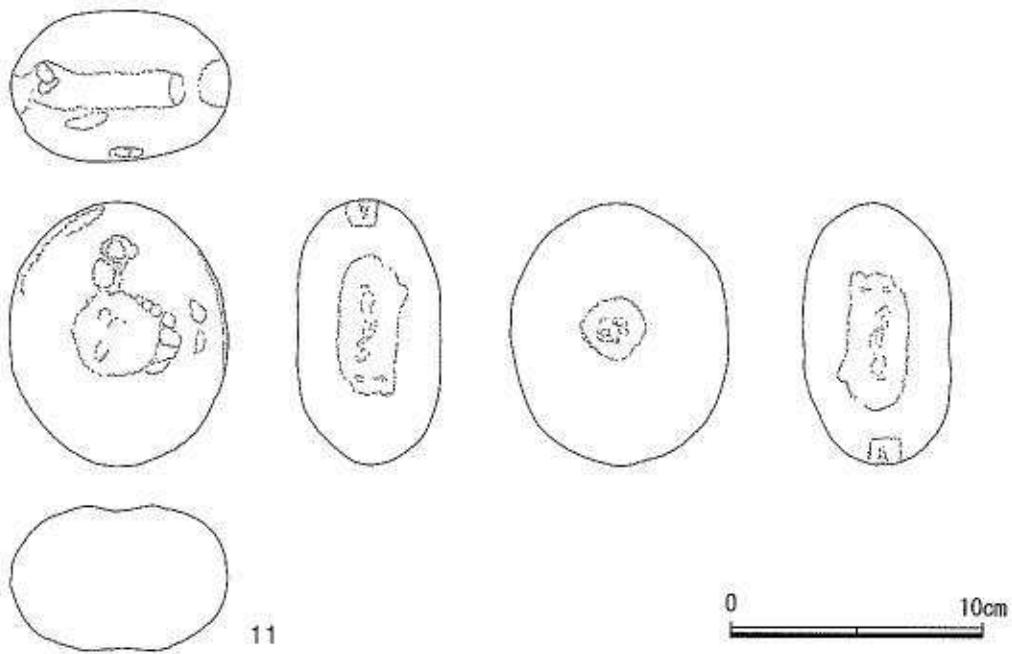
図	番号	機種	グリッド	出土層位	標高(m)	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)
20	1	石鎌	F-13,14	黒褐色粘質土 (中世包含層)	—	黒曜石	15.6	15.2	4	0.2
	2	石匙	I-4	砂礫層	3.675	安山岩	41.6	51.3	7.2	17
	3	石匙(未製品)	G-2,3	砂礫層	—	黒曜石	40.4	43.7	11.7	16
	4	石槍(未製品)	I-4	杭上層	3.848	黒曜石	61.8	35	14.8	24
	5	調整剥片	—	1号杭列覆土	—	安山岩	43.3	29	10.2	15
	6	調整剥片	H-8	杭上層	3.767	黒曜石	33.5	20	8.2	4
	7	調整剥片	—	3号溝覆土	—	黒曜石	30.3	20.7	8.8	6
	8	剥片	F-13,14	谷砂礫層	—	黒曜石	37.7	23.4	6.3	4
	9	剥片	H-8	杭上層	3.767	黒曜石	50.1	19.6	11.1	2
	10	石刀	H-4,5	砂礫層	—	黒曜石	30.9	18.3	5.3	7



第19図 遺物実測図（1）



第20図 遺物実測図(2)



第21図 遺物実測図(3)

側線はやや外湾している。2・3石匙はいずれも横型の石匙で両者とも未製品である。3は下方にわずかに自然面が残り両側歯を作り出す際に放棄したものとみられる。2はつまみ部を潰して作り出しているが幅広く浅い。表裏両面の刃部を調整している。4. 石槍も未製品と見られる。11は磨石でよく磨かれている。画面の中央に浅い窪みがあり、周囲には敲打痕が断続的に巡る。磨石と敲石の両方に用いられている。

## 2 古代の遺物

ここで取り上げた土器も、これらの遺物が本来帰属する遺構には伴わずに出土したもので、遺物分布のところで述べたように土石流もしくは、旧河川によって運ばれて来たものとみられる。出土層位は現代耕作土から最下層の渦上面にいたるまでまんべんなく出土した。各々の遺物には程度の差があるものの、いずれも表面は磨耗しており、土師器にはそれが特に顕著にみられ、ほとんどの表面の整形は不明である。また、土師器の高壇もしくは器台と見られるものがやはり近世の耕作土中から流路底面の砂礫層に至るまで出土している。土師器の甕や壺に比べて個体数が多く、2次的に焼けているものが相当量出土している。

### 土器 (第22図・写真19)

1. 須恵器器台の一部とみられる。脚の一部には、高さ22cmあまりの方形とみられる透しが開いているが、両辺は欠いており、形は不明である。脚表面には、幅2.4cmで非常に細い櫛書き波状文を施しており、その下に2本の凸線をめぐらしている。天井部は指などで丁寧に調整されているが、壇底部の厚さは薄くわずか4mmしかない。上面には焼成時の降灰による自然釉が付着しており、当初は円面鏡とも見ていた。2. 魚の体部の上半分である。外面は2本の沈線間約1.5cmの間に細い櫛書き波状文が5本一条施されている。体下半部上部はヘラ削り後、ヘラナデによって丁寧に調整されている。体中央部に直径10mmほどの穿孔がある。胎土は精良緻密で不純物を含まない。この他にも魚と思われる別個体の破片が2点出土している。3～

9は須恵器蓋である。3～6, 8は口縁部のみの出土で頂部は不明。5は浅い反りのあるもので、口径は大きいものではない。小破片であるがだいたい7世紀代後半のものであろう。7は当初壊か椀になるものとみられたが、頂部が緩やかに突出するつまみのつかない蓋と考えた。内上面はヘラナデで不規則に調整し外面は摩耗によりよくわからない。9. 環状紐の蓋である。胎土は不純物を含まず精良なものである。10須恵器模倣の土師器である。内外面はヘラ磨きを施してあるようで、煤状のものが付着しており、黒色処理をしたものと考えられる。体部の張り出しから口縁の立ち上がりまではシャープに作られており焼成も良好で、器厚も薄くできている。細かな調整は不明。11も同様に模倣品と思われるが、器厚が厚く焼成も軟質でできはそれほどよくない。12,13は須恵器壊身で両方とも小ぶりのもの。胎土は灰白色の精良なもの。14は土師器の壊で胎土は赤橙色の軟質で軽い。15～17土師器甕で、小型の甕口縁と底部である。甕は古代の包含層の最下部から比較的大きな破片が出土したものの全体を復元できるものはなかった。これらのものは体部の一部に刷毛目を残しており、古墳時代のものとみられる。15は口縁の最上部をつまむように16, 17では内面に刷毛目痕が残っている。また、17は外面上に朱が付着する。18は円面鏡で脚の一部に幅1.2cmの方形と思われる透しがある。脚はかなり裾広がりを呈している。海の部分に墨痕は残っているが、中央部には若干凹部があり平滑である。19. 緑釉陶器碗の高台部である。褐灰白色の軟質な胎土と内底面に輪状の沈線がめぐることから、近江京都産のものと思われる。釉調は外面は淡黄緑色の部分と濃緑色の部分が混在しているが、内底面は濃緑色の釉薬が掛けられており、緑釉綠彩の可能性がある。20～26これらの土器は、回転を利用して成形されるが、土師器のように酸化炎焼成された土器群で、これらのもの一群は黒色処理を行っている。いずれも貼り付け高台である。ここでは、とりあえず須恵器の表示をしてある。20、23等精緻なつくりで焼成も堅く焼けているものがある反面、26は軟質で泥っぽい粗雑なつくりの一群である。また、精緻なつくりのものには胎土にカクセン石粒を多量に含むものと全く含まないものがある。一方軟質なものには、21のように内面に煤を付着させるもの（黒色処理）と26のように外面に施したものがあり、さらに両面に施したものもみられる。

#### 高壊類（第23図・写真20）

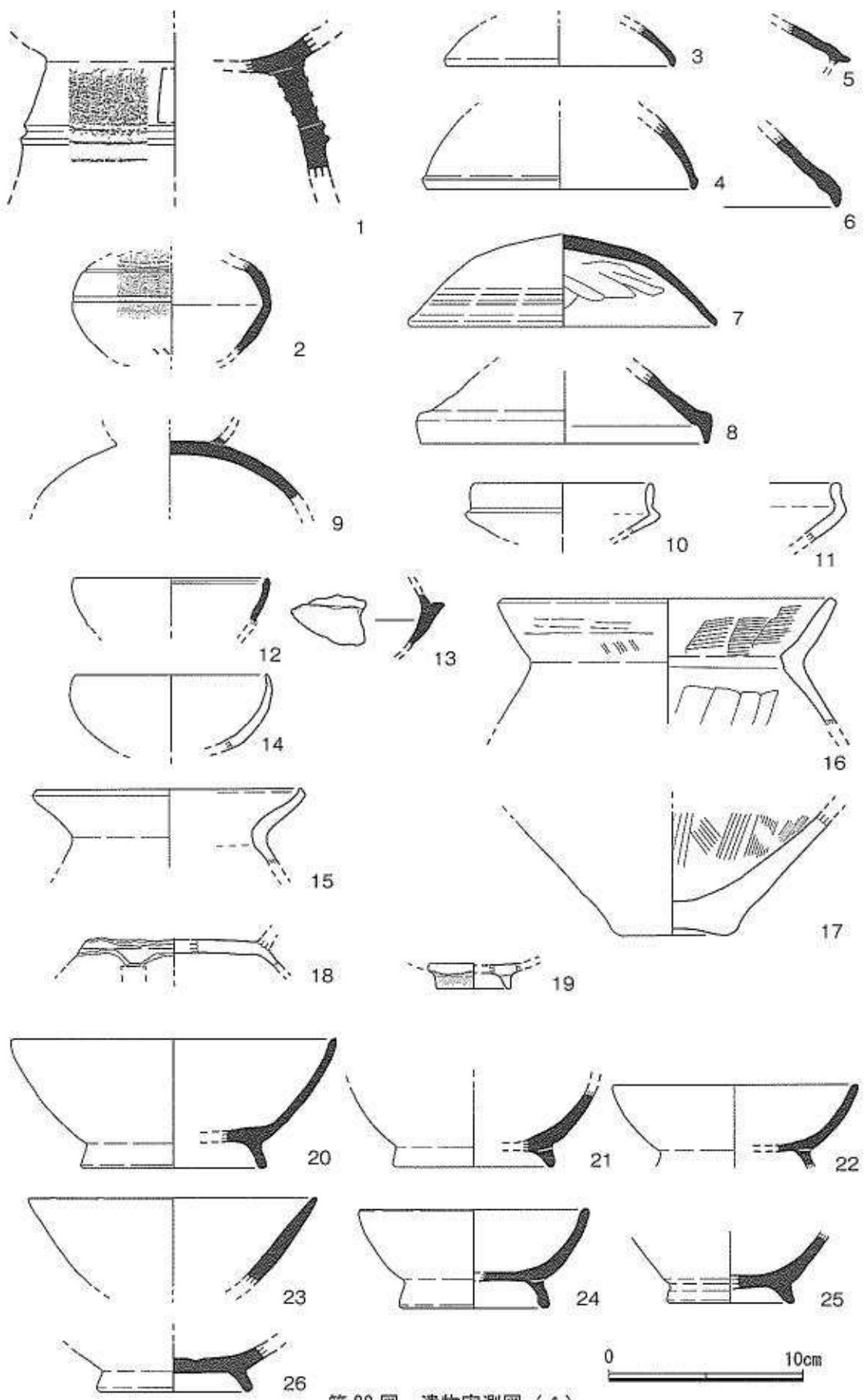
高壊もしくは器台と思われるものがおよそ70点出土している。この中から比較的残りのいいものを選んで掲載したが、壊部や脚底部の周縁を復元するものは少なかった。これは脚部の比較的丈夫な部分が認識されやすいためと思われる。脚部についてはその形状から大きく3つに分けられた。a類は脚がラッパ状に緩やかに広がっていくもの（第23図1～8）、b類は脚の上部が棒状になって壊部につながるもの（第23図9、10、12～19）、c類は脚の高いもの（第23図20～23）である。脚が高いものは一般的に古い時期のものとされるが、これらの先後関係は不明である。

参考文献：長崎県教育委員会 1999「稗田原遺跡Ⅲ」

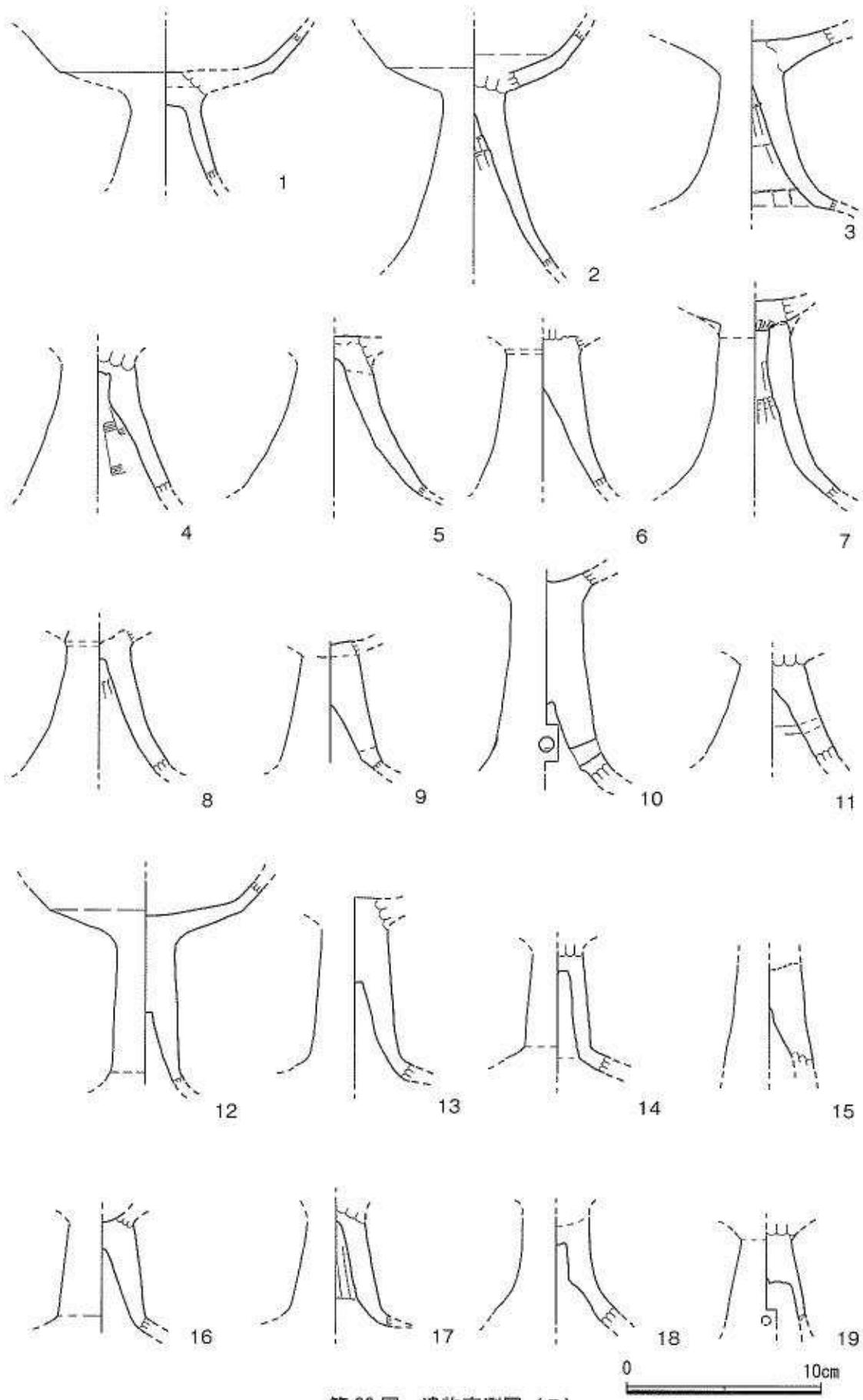
長崎県国見町頭音委員会 2004「十園遺跡」国見町文化財調査報告書（概報）第4集

第3表 土器観察表（2）

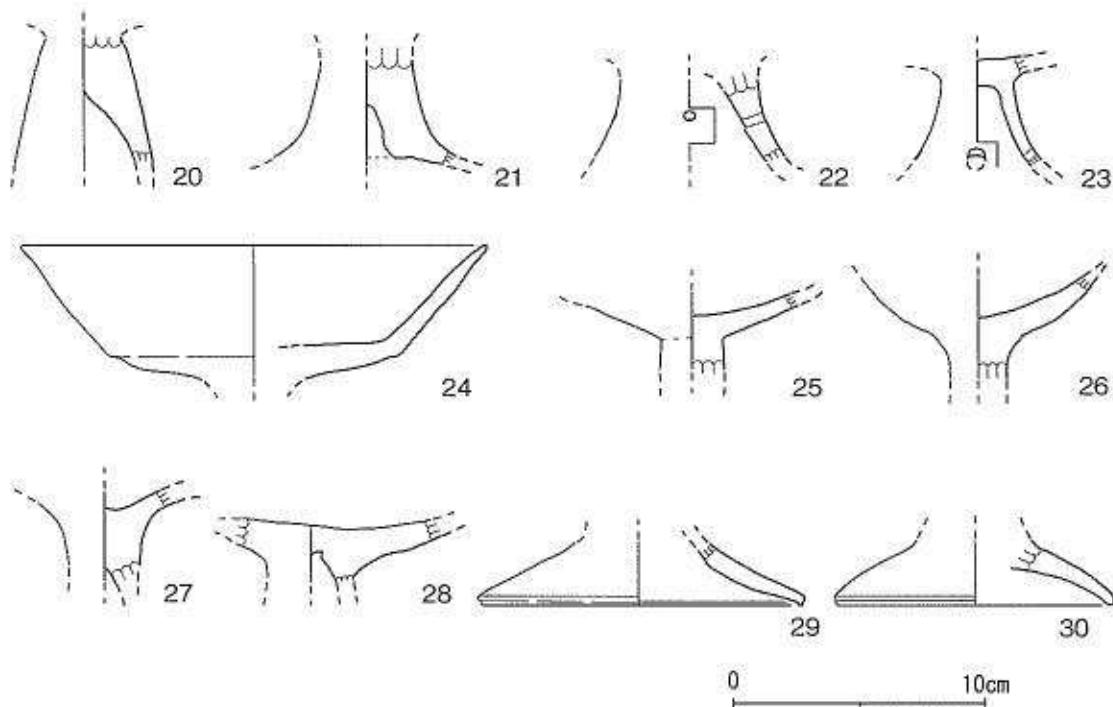
調	番号	グリット	出土地	器種	部位	色調	焼成	調整	胎土	備考
22	1	F-14	3号溝	須恵器蓋台又は規	胴	灰	良好	ロクロ	白色微粒子	
	2	I-2	黒褐色砂疊	須恵器蓋	胴	灰	良好	ロクロ	白色・黑色微粒子	
	3	F-13	黒褐色粘質土	須恵器蓋	口		不良	ロクロ	金雲母	
	4	F-13	黒褐色粘質土	須恵器蓋	口		不良	ロクロ	白色微粒子	
	5	F-12	江戸耕作土下	須恵器蓋	口	灰	良好		白色微粒子	
	6	H-6	黒褐色粘質土	須恵器蓋	口		良好	ロクロ	白色微粒子・砂粒	
	7	I-3	黒褐色砂疊	須恵器蓋	口	灰黄	不良	ロクロ	白色微粒子	
	8	I-3	黒褐色粘質砂疊	土師器蓋	口	灰黄	やや不良	ロクロ	白色微粒子	
	9	F-13	黒褐色粘質土	蓋	胴	灰白	不良	ロクロ	白色微粒子・砂粒	
	10	H-7	杭上	土師器坏	胴	褐灰	良好			
	11	F-11	江戸耕作土下	土師器坏	胴	橙	良好		砂粒	
	12	H-9	江戸耕作土下	須恵器坏	口		良好	ロクロ	白色微粒子	
	13	H-9	江戸耕作土下	須恵器坏	口	灰	良好	ロクロ	白色・黑色微粒子	
	14	I-5	杭上	土師器坏	口	明赤褐	軟質		細砂粒	
	15	I-5	黒褐色砂疊	甕	口	暗灰黄	良好		白色粒子・砂粒	
	16	I-2	黒褐色砂疊	甕	口	黄褐	良好		砂粒	
	17	I-7	杭撲出土	土師器甕	底	明赤褐	良好		角閃石・砂粒	
	18	I-4	1号杭列覆土	須恵器円面鏡	体	灰	良好	ロクロ	白色・黑色微粒子	
	19	I-5	黒褐色粘質土	錫釉陶器塊	底	深綠・淡黃綠	良好	ロクロ	白色微粒子	
	20	H-8	2号杭列覆土	高台付塊	全	明褐灰	良好			
	21	I-6	黒褐色砂疊	高台付塊	胴	橙			細砂粒	
	22	H-8	杭上	高台付塊	口	灰黄褐	良好		細砂粒	
	23	I-5	黒褐色砂疊	土師器坏	口	黄褐	良好		細砂粒	
	24	F-11	黒褐色粘質土	高台付塊	全	灰褐			細砂粒	
	25	I-3	黒褐色砂疊	高台付塊	底	橙	二次焼成		砂粒	
	26	I-4	黒褐色砂疊	高台付塊	底	黄			細砂粒	
23	1	H-7	杭上	高坏	脚	明褐	良好		砂粒	
	2	E-14	灰褐色砂疊	高坏	脚	明赤褐	良好・二次焼成		砂粒	
	3	I-5	黒褐色砂疊	高坏	脚	黄褐	良好		砂粒	
	4	F-12	谷砂疊	高坏	脚	黄褐	やや不良		砂粒	
	5	I-5	黒褐色砂疊	高坏	脚	褐	良好		砂粒	
	6	E-13	谷砂疊	高坏	脚	赤褐	良好		砂粒	
	7	I-3	黒褐色砂疊	高坏	脚	黄	良好		白色粒子	
	8	I-4	黒褐色砂疊	高坏	脚	明赤褐	やや不良		砂粒	
	9	H-8	杭上	高坏	脚	灰黄	やや不良		白色粒子・砂粒	
	10	I-3	黒褐色砂疊	高坏	脚	褐灰	良好		砂粒	
	11	I-6	黒褐色砂疊	高坏	脚	赤褐	二次焼成		砂粒	
	12	I-5	江戸耕作土下	高坏	脚	橙	良好・軟質		細砂粒	
	13	I-3	黒褐色砂疊	高坏	脚	黄橙	やや不良		細砂粒	
	14	I-5	黒褐色砂疊	高坏	脚	灰黄褐	良好		白色粒子	
	15	I-3	江戸耕作土下	高坏	脚	褐	良好		砂粒	
	16	I-3	黒褐色砂疊	高坏	脚	灰黄	良好		砂粒	
	17	I-4	黒褐色砂疊	高坏	脚	灰黄	良好		砂粒・細砂	
	18	I-3	杭撲出土	高坏	脚	明褐	良好		白色粒子・砂粒	
	19	I-2	黒褐色砂疊	高坏	脚	黄褐			砂粒	
24	20	I-3	黒褐色粘質砂疊	高坏	脚	黄褐			細砂粒	
	21	H-7	1号溝覆土	高坏	脚	橙	良好		砂粒	
	22	H-4	2号杭列覆土	高坏	脚	赤褐	良好		砂粒	
	23	F-12	谷灰褐色砂疊	高坏	脚	褐	良好		白色粒子・砂粒	
	24	F-10	湖土	高坏	环	橙			砂粒	
	25	I-3	黒褐色砂疊	高坏	环	灰白	良好		砂粒	
	26	I-5	1号杭列覆土	高坏	环	黄褐	やや不良		白色粒子	
	27	I-4	黒褐色粘質砂疊	高坏	脚	黄橙	良好		角閃石・砂粒	



第22図 遺物実測図(4)



第23図 遺物実測図(5)



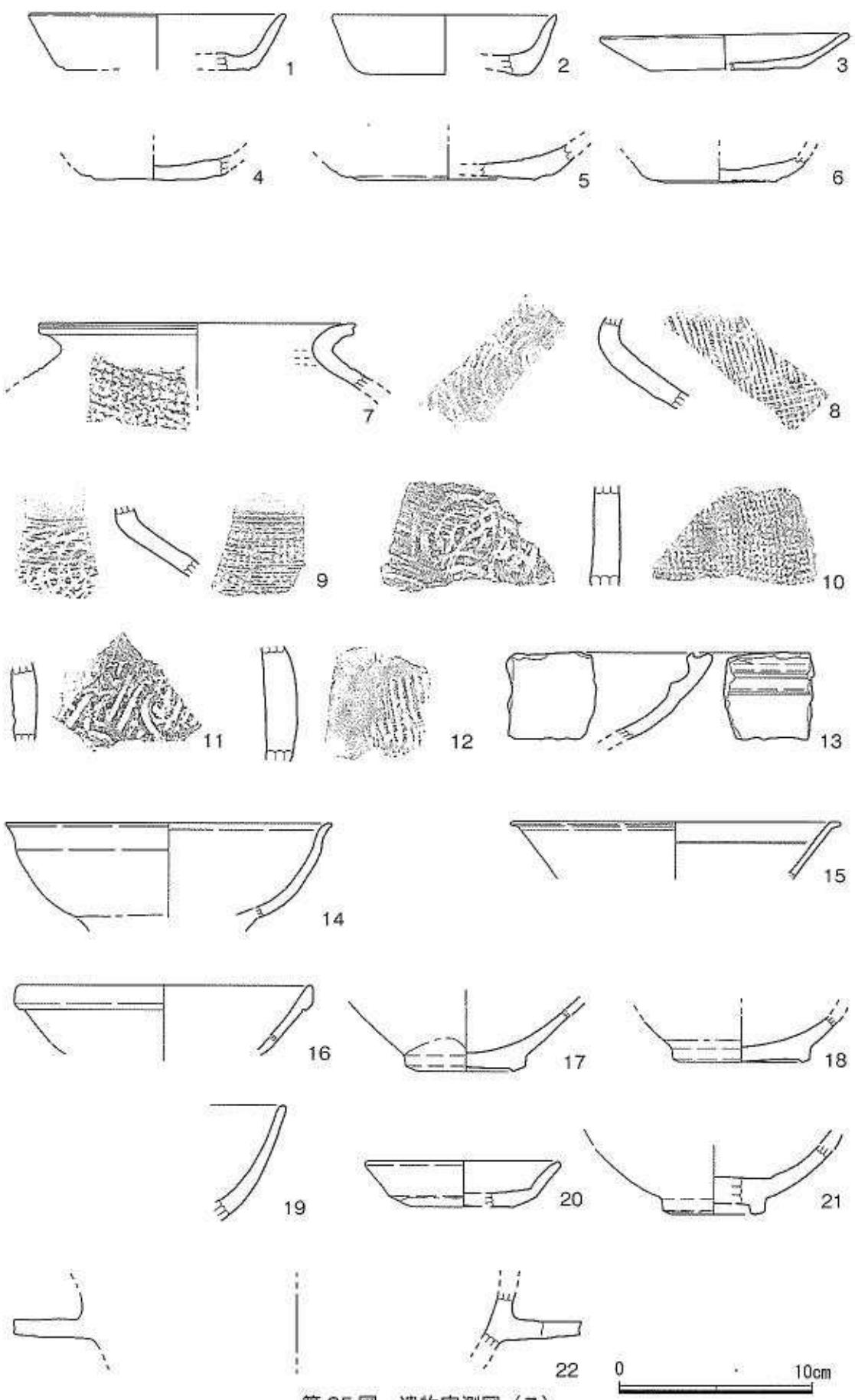
第24図 遺物実測図(6)

### 3 中世の遺物

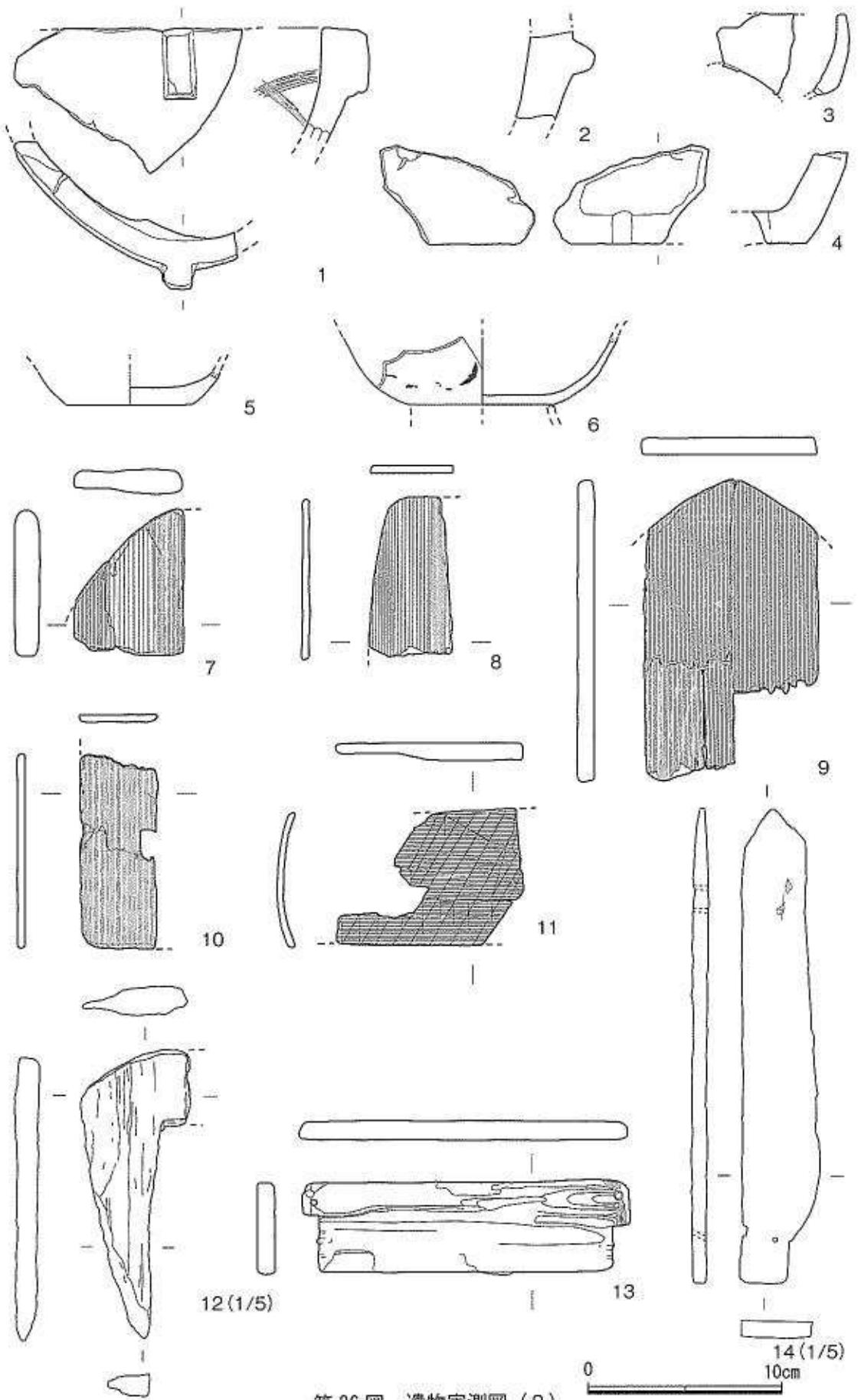
この時期の遺物として掲載したものは土器類と木製品がある。土器類はいわゆる「かわらけ」といわれるような酸化炎焼成の土器類と常滑、渥美をはじめとする国産陶器、青磁、白磁などの輸入陶磁器である。酸化炎焼成の土器は第25図1, 2, 4~6などのカクセン石を含む在地のものとカクセン石を含まない県外の製品とに分かれる。1, 2は糸切り離し後調整を行わないもので、焼成も酸化炎で橙色もしくは明褐色を呈しており、3はカクセン石を含まない在地の製品でないものである。成形は薄く胎土も良好なもので焼成も堅く焼き締まっている。4~6は体・口縁部は不明だが底部は回転糸切り後、周辺部をナデ消しており、中心部には平行したわら状の圧痕があるがこれは乾燥の際に置かれた。7は頸部直前まで叩き目が残る樺万丈大窯産の甕、8は不明。10は常滑産の大甕。11、12は渥美産の大甕で外面は変形の格子、内面には当て具の圧痕がみられる。

13~21は輸入陶磁器で、13は13世紀の中国産の陶器捏鉢で製品として輸入されたものでなく他の香辛料などを入れた容器として搬入されたもの。14~18は白磁、いずれも12世紀後半から13世紀のものである。15は端反りの碗、16は玉縁口縁の碗、17, 18は白磁碗の底部のみであるが、いずれも浅い削りだし高台で、高台部まで施釉している。19は竜泉窯系の青磁で鎧蓮弁文碗、20は同安窯系の青磁櫛引文の小皿。22は羽釜の鐸の部分、鐸は3本の粘土紐で成形されたようで、鐸中央部に縫ぎ目と思われるものが残る。鐸の口唇部は人差し指と親指のつまみで調整しており、爪の挽き痕がみられる。

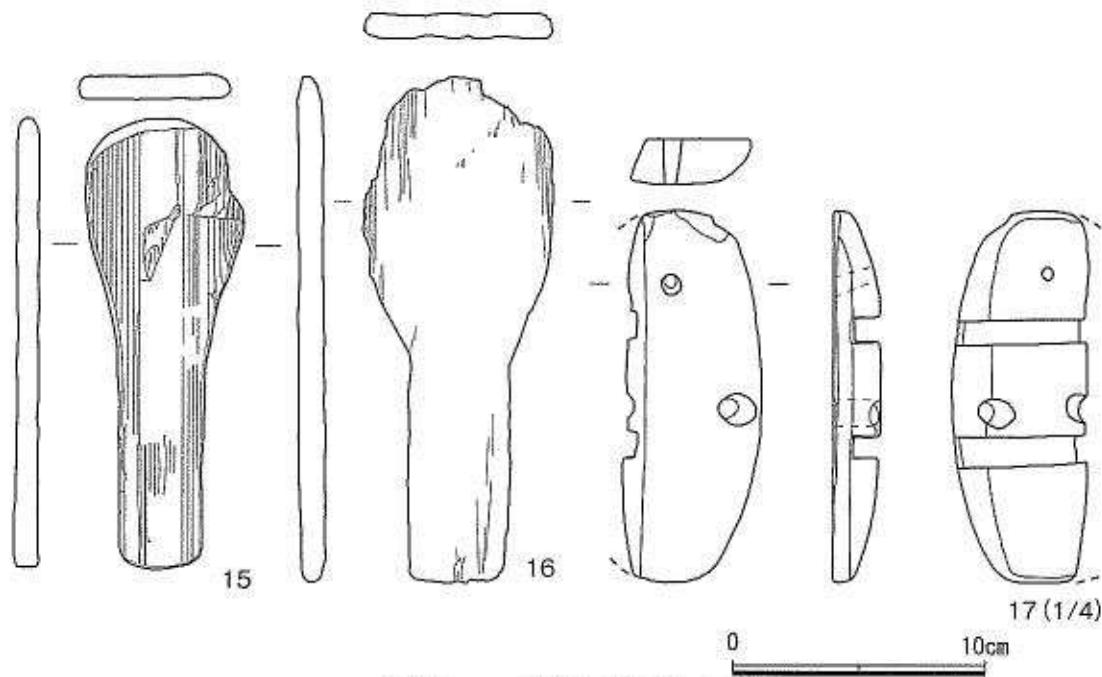
石製品は第26図1~4は滑石製石鍋で1は外面上部に長方形の握手が付き、鍋上縁の形が隅丸長方形になるタイプである。内面に線刻が見られるが意味不明。2は表面の摩耗が著しく、1のように一部に握手がついているのか、鐸状に周囲を巡るものかは不明。3は鍋と言



第25図 遺物実測図(7)



第26図 遺物実測図(8)

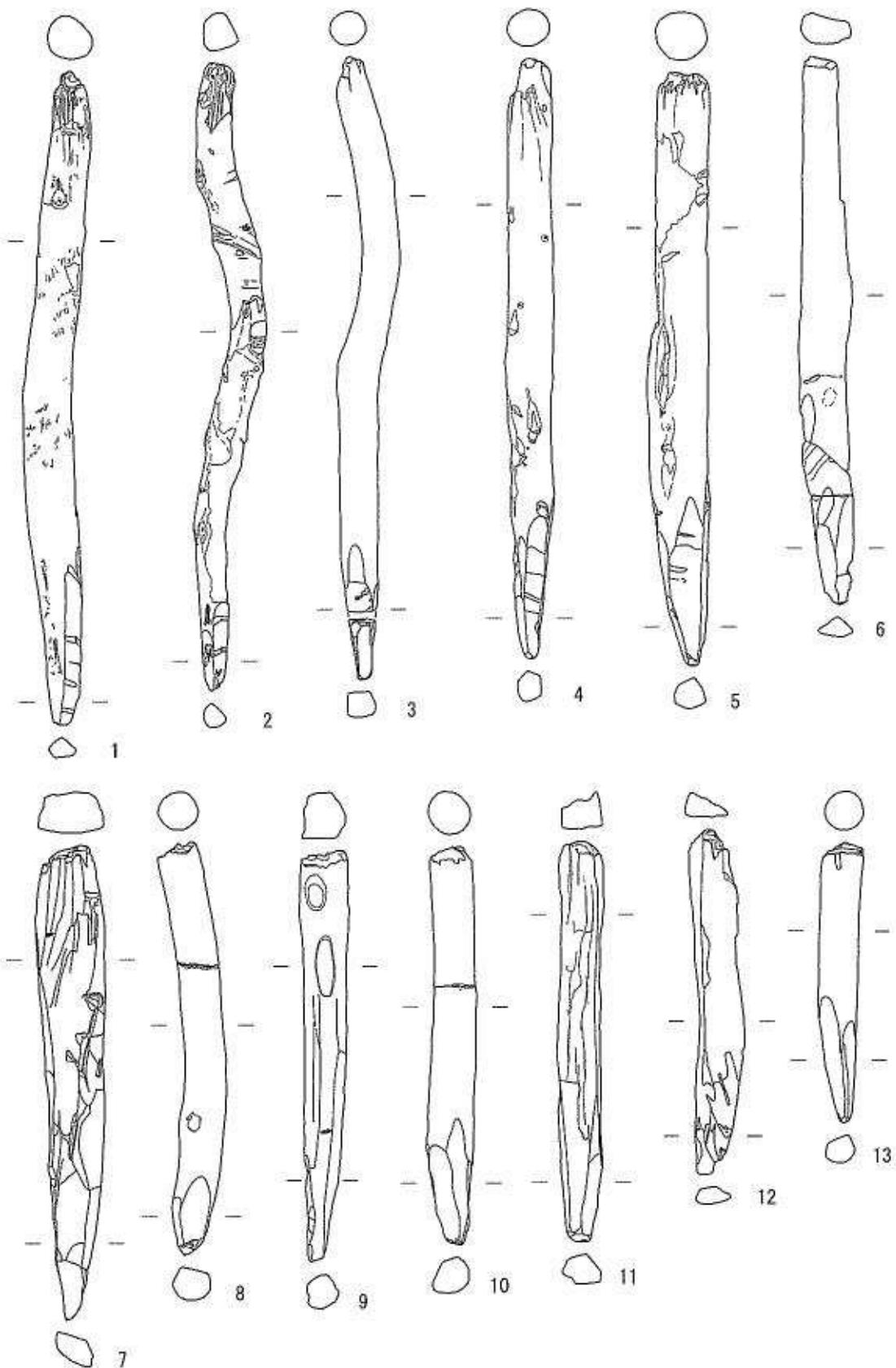


第27図 遺物実測図 (9)

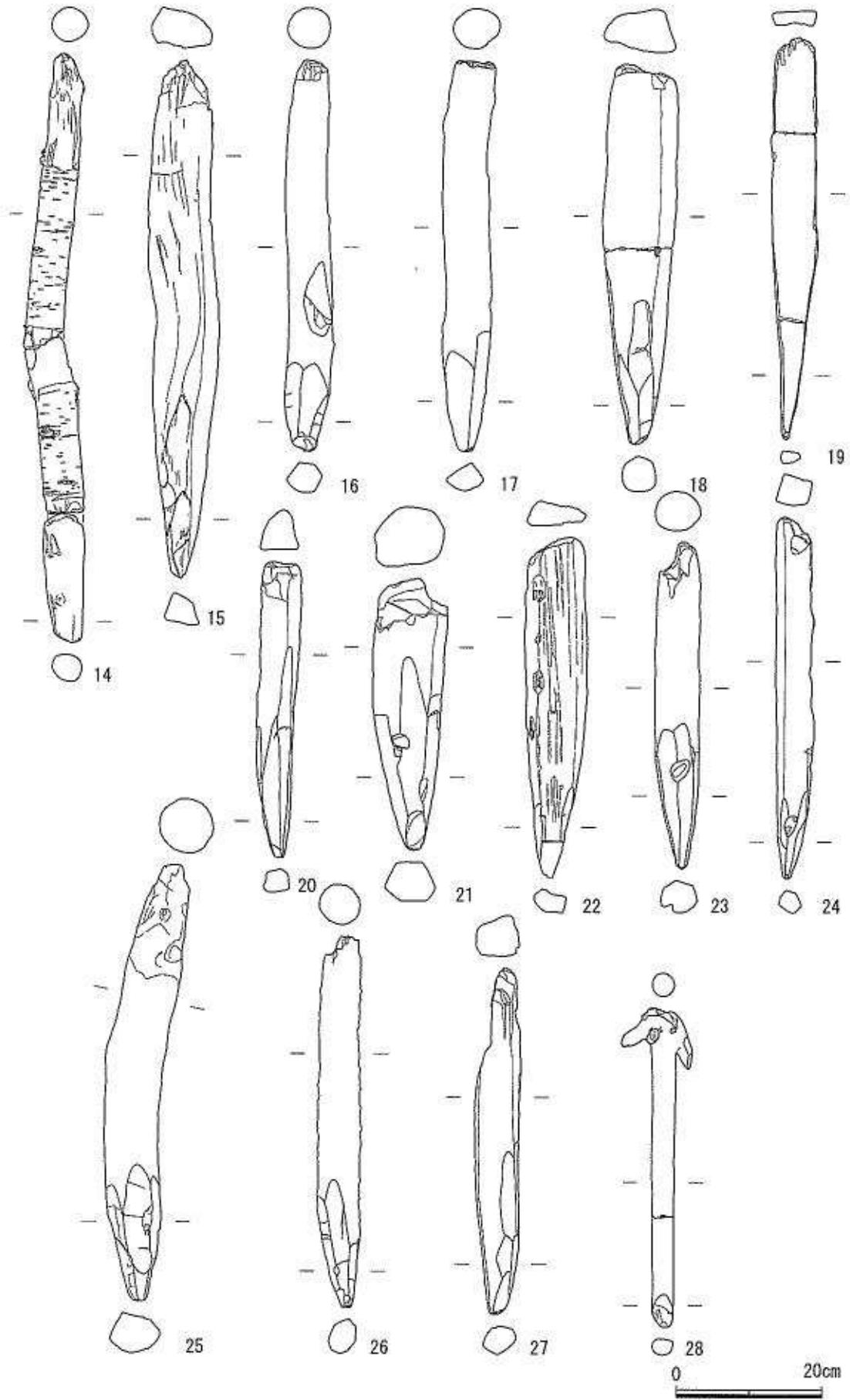
うよりは碗のように器厚が薄いが、外面に厚く煤が付着している。4は石鍋の転用品と見られる。底面と側面に直径8mmの穿孔がある。この穿孔の内面の一部にも煤が付着する。転用用途は不明である。木製品では5, 6は漆器椀で両者とも漆はほとんど剥脱している、5は無高台のやや小ぶりのもので、無紋である。6は高台が欠落しており、器外面に文様のような痕跡が見える。7～10は箱物の底板と見られるが、7, 8は桶のような湾曲部が見られる特殊な形、11は曲げ物側板で内面には側板側辺に垂直する浅い切り込みと斜行する切り込みが見られる。12は鍔の一部で半分以上を欠損。先端部はあまり使用されずに廃棄されたようで鋭利である。13は手箱の側板で側辺部と上部に木釘を打ち込んでいる。14は用途不明品で鋭角に切り出された一端と握手状に切り出され、1cmの切り込みを入れた非対称の形で、用途不明。3カ所に釘穴と思われる孔が見られる。15, 16はしゃもじ。17下駄鼻緒が2本つくタイプで、底はよく使われている。

第4表 木製品観察表

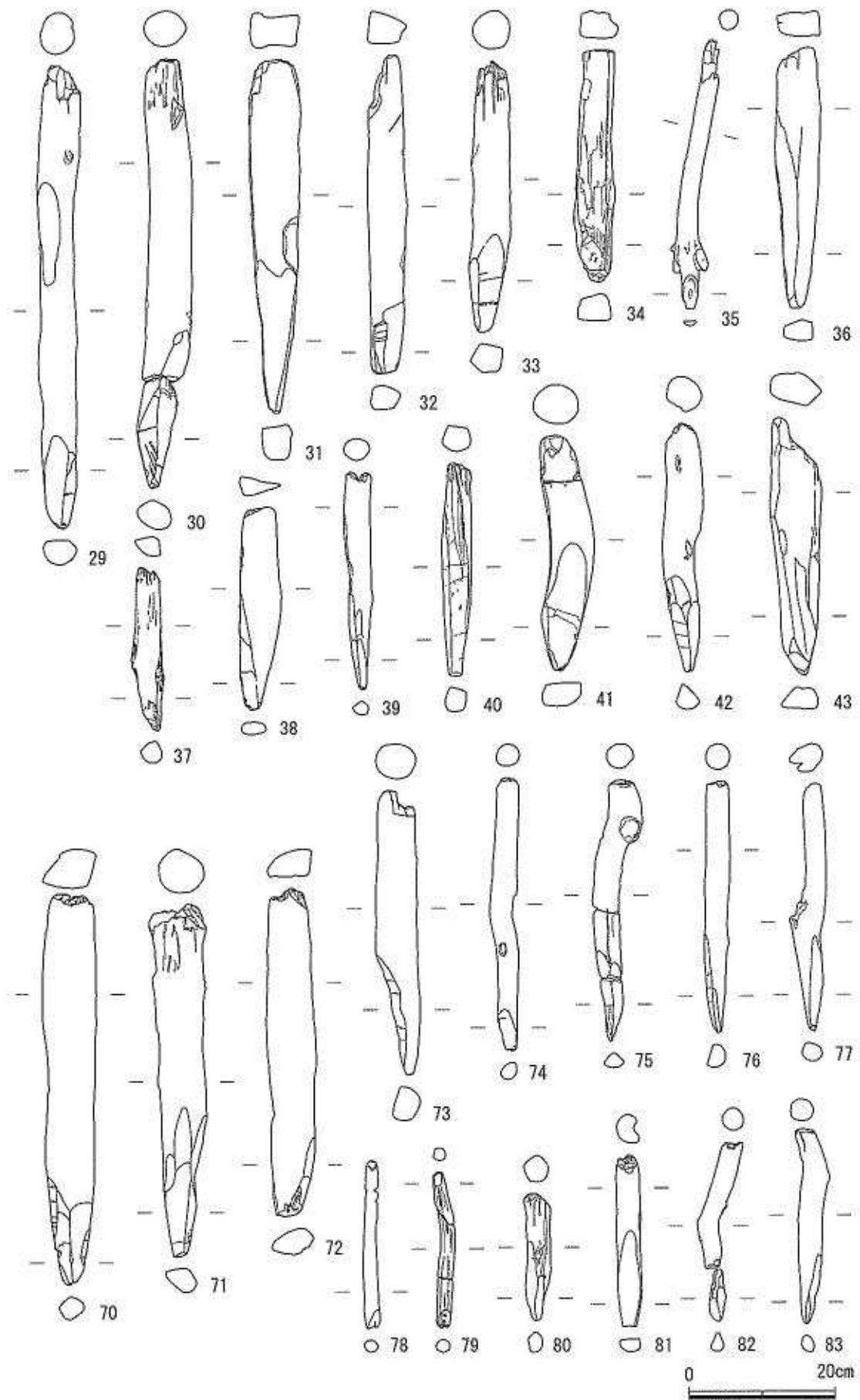
図	番号	製品名	部位	グリット	出土層位	底(cm)	口(cm)	高(cm)
26	5	漆器椀	底	H-8	2号杭列覆土	6.4	—	(1.7)
	6	漆器椀	底	I-4	黒褐色粘質土	7.4	—	(3.6)
	番号	製品名	部位	グリット	出土層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)
	7	曲物	底	F-11	黒褐色粘質土	7.5	5.6	1.3
	8	木製品		I-5	黒褐色粘質土	9.8	3.9	0.4
	9	桶	底	I-3	黒褐色粘質砂礫	14.9	9.0	0.9
	10	曲物	底	H-8	江戸耕作土下	8.1	3.3	0.4
	11	木製品		F-12	杭上	8.5	6.9	0.9
	12	鍔		I-5	黒褐色粘質土	24.3	6.4	1.8
	13	木製品		F-12	杭上	17.0	4.7	1.0
27	14	木製品		H-8	杭上	40.8	6.0	1.3
	15	しゃもじ		I-3	黒褐色粘質砂礫	17.9	6.2	1.0
	16	しゃもじ		F-12	杭上	19.9	4.0	0.9
	17	下駄		I-2	黒褐色砂礫	19.7	7.2	2.3



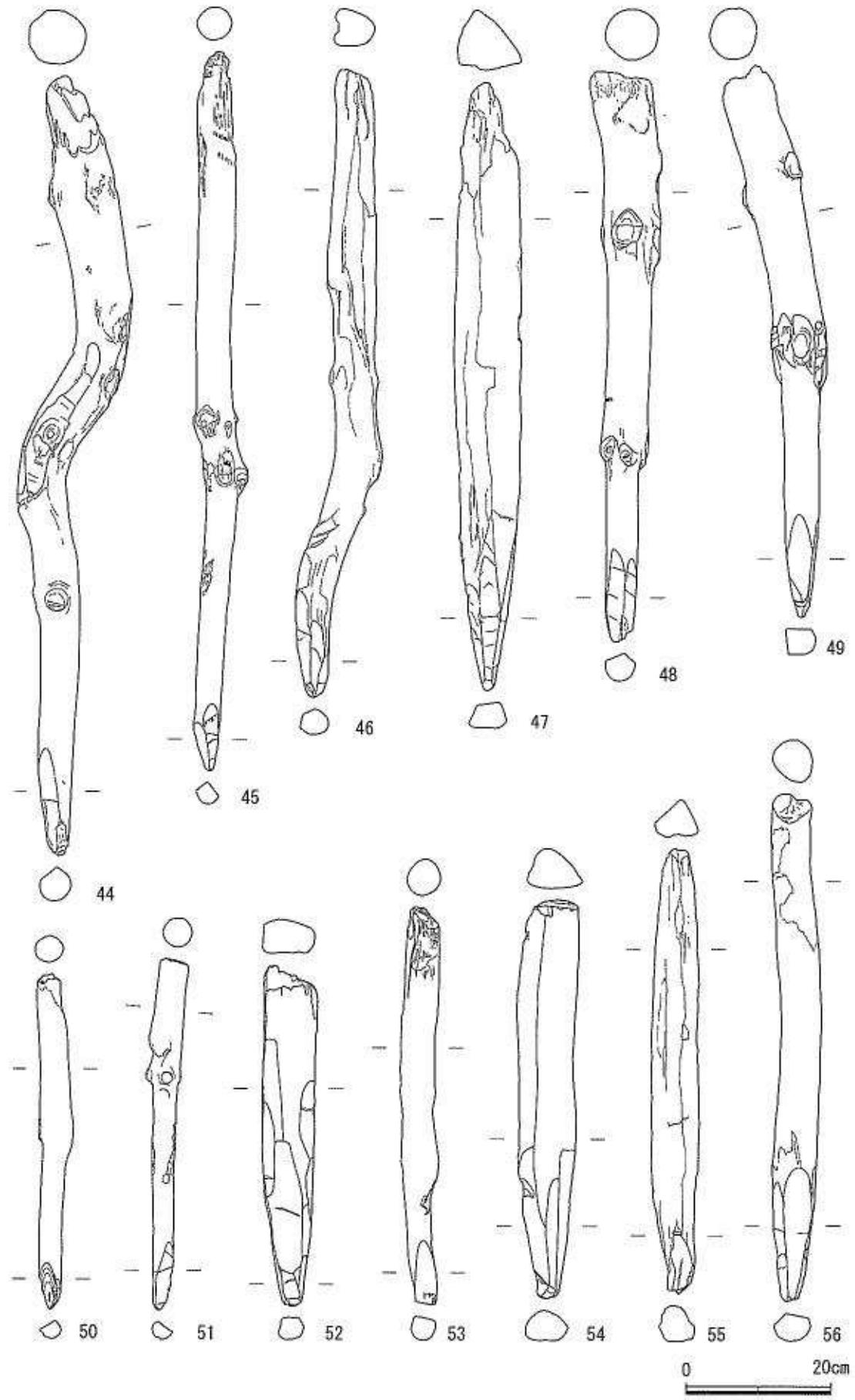
第28図 遺物実測図 (10) 1号溝



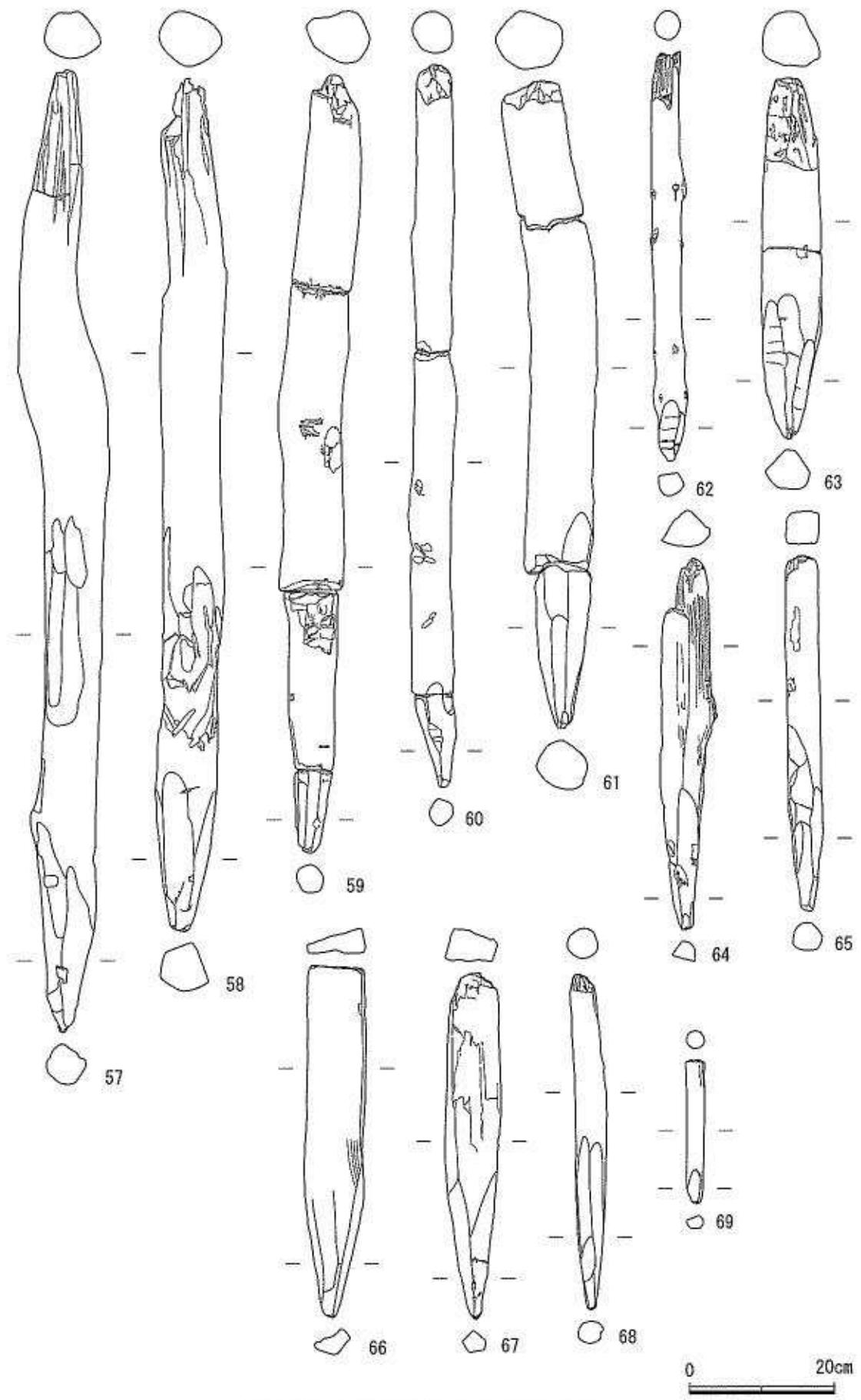
第29図 遺物実測図 (11) 2号溝 (14~24)・2号杭列 (25~28)



第30図 遺物実測図 (12) 3号溝 (29~43)・3号杭列 (70~83)



第31図 遺物実測図(13) 1号杭列



第32図 遺物実測図(14)2号杭列







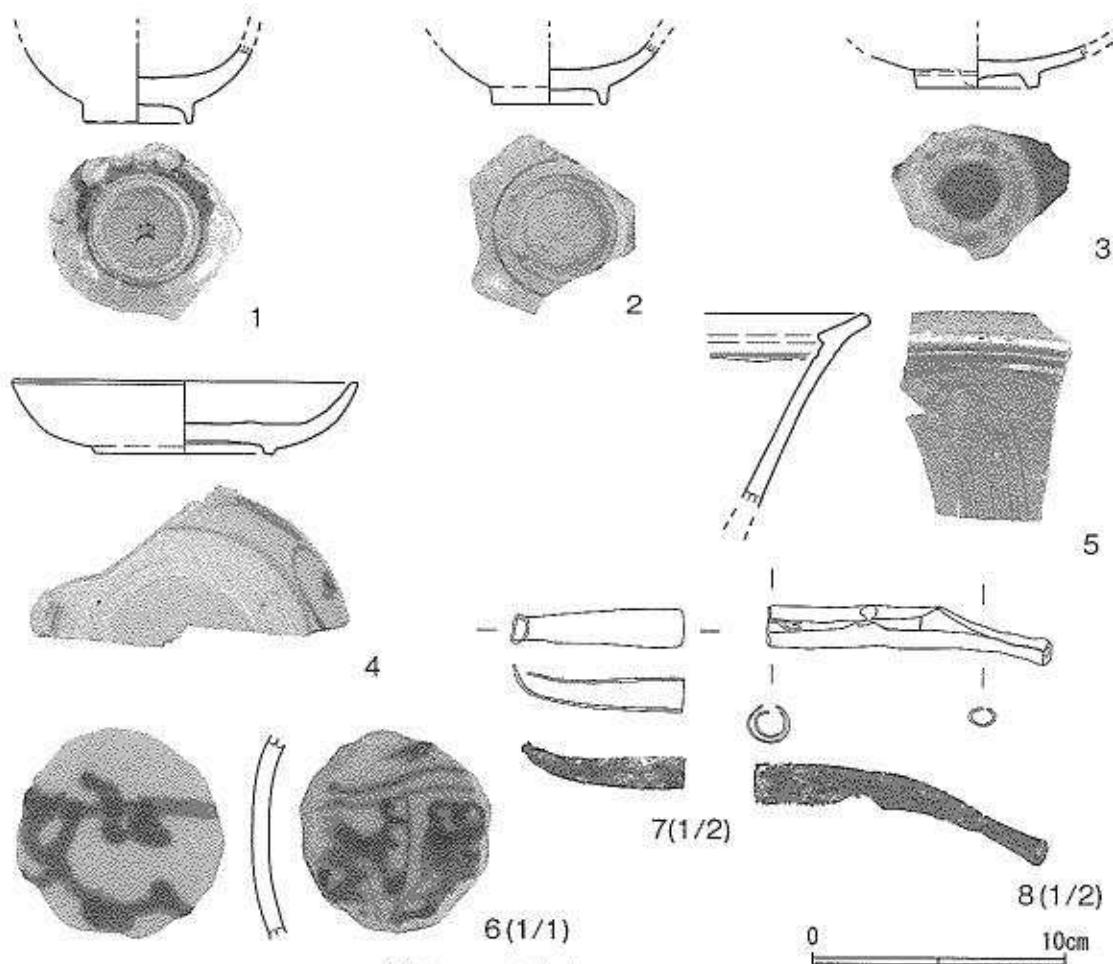


#### 4 近世の遺物

出土点数は728点である。ほとんどが陶磁器類で、内訳は磁器類が434点、陶器類は192点、キセル2点である。

陶磁器類で全体がわかるものではなく、すべて破片である。その中から比較的大きなものを5点掲載した。1は長与産のくらわんか茶碗で高台部に長与産の特徴である緑釉の一重の網目文がめぐり、また絵文様全体も緑がかる。底径4.3cm。18世紀のもの。2は波佐美産のくらわんか茶碗で、高台部のみ。高台の底径は4.5cm。3は18世紀初め内野山窯で作られた緑釉陶器の碗で、緑釉は深みのある半透明なもの。素地は均一な細砂が多く含まれる。見込みに釉剥ぎを施す。釉剥ぎ部には4カ所にトチノ痕が残る。底径は4.9cm。4は長与産の染め付け小皿で、口径(13.8)cm、底径7.0cm、高さ2.8cmを計る。見込みには蛇の目の釉剥ぎで、中に細砂が付着する。畳付けにも同じような細砂が付着する。5は斐屋窯産すり鉢。6皿か碗の破片を利用したおはじきで周囲の整形は粗い。7銅製のキセル雁首。火床の接合部がはずれている。長さは残存部で4.5cm。8は銅製のキセル吸い口。中央部で折れ曲がり接合がはずれ、火床を欠いている。長さ7.3cm。

(園村)



第33図 遺物実測図(15)・写真

0 10cm

## 5 杭考察

今回の調査では、1～3号溝・1～3号杭列の6遺構で多数の杭が検出された。そのなかで番号取り上げを行った杭の総数は695本にのぼった。内訳は、1号溝で50本、2号溝で40本、3号溝で50本、1号杭列で252本、2号杭列で282本、3号杭列で21本の杭が出土している。

遺構はいずれもその両端が調査区外に続いている、全体像は不明だが、簡単に遺構ごとに比較しておきたい。

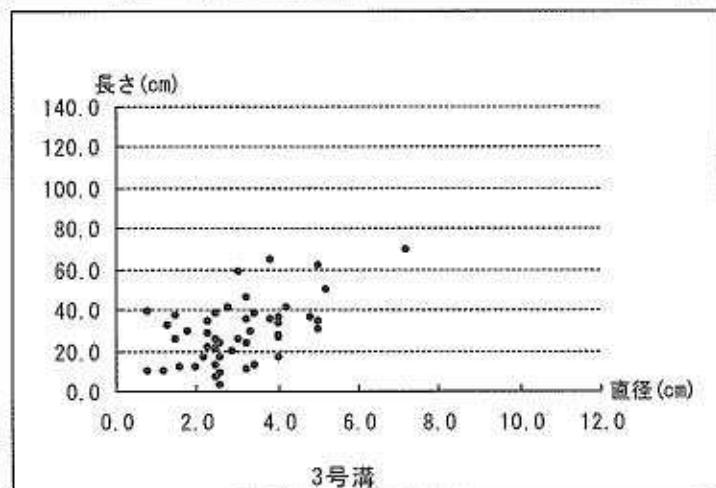
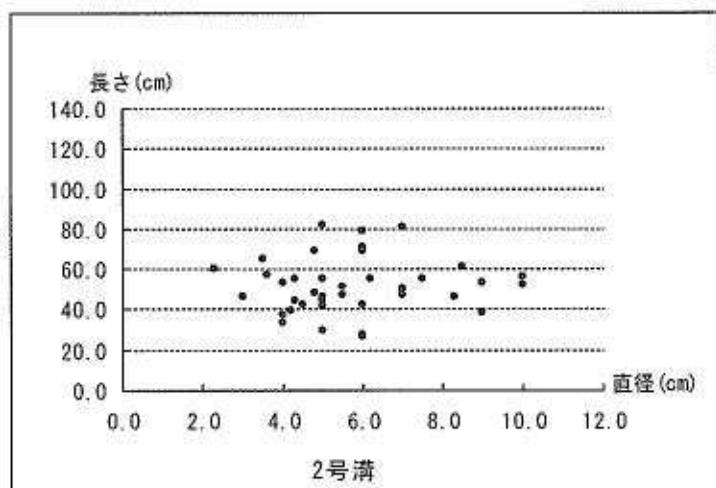
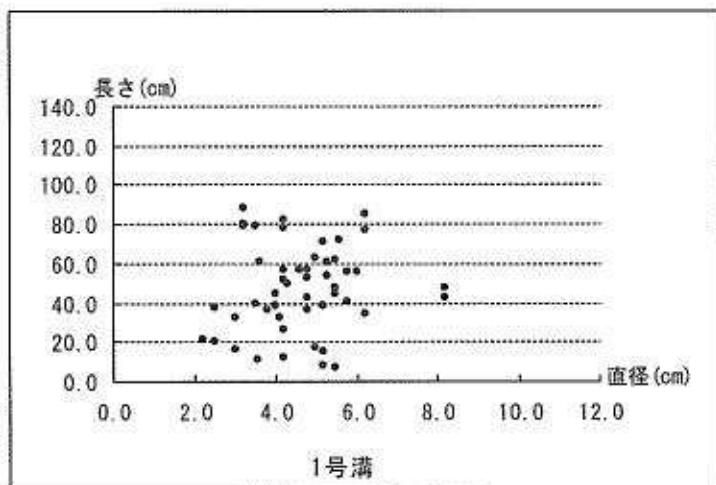
杭の個別のデータについては、観察表に掲載してある。

また、遺構ごとに杭の長さと直径を軸にして散布図に図化してみた。

全遺構の杭に共通している点は、まず自然木を適当な長さに切って先端に加工を施して尖らせた杭が多く、これらは488本を数える。

幹の太いものは4分割、あるいは6分割に削木加工したうえで、先端を尖らせて杭として利用している。先端加工は、比較的丁寧にされているものが多かった。

そのうえで先端を焼いて黒く変色しているものが全体の27%あったが、これは折れた杭も総数に数えたことを考えると、実際は半数近くの杭が先端を焼き処理加工されたと思われる。目的は防腐処理であろう。



杭の材質はさまざまで、桜、櫻、松、百日紅等周辺の山で調達可能な雜木類だった。

その多くは手頃な太さ、長さの杭に加工してあったが、実測図に示したように、なかにはかなり湾曲した幹を長い杭として加工して、利用している場合もあった。これらの杭は潟土層下の礫層まで深く打ち込んでおり、構築する際にはかなりの労力であったと考えられる。

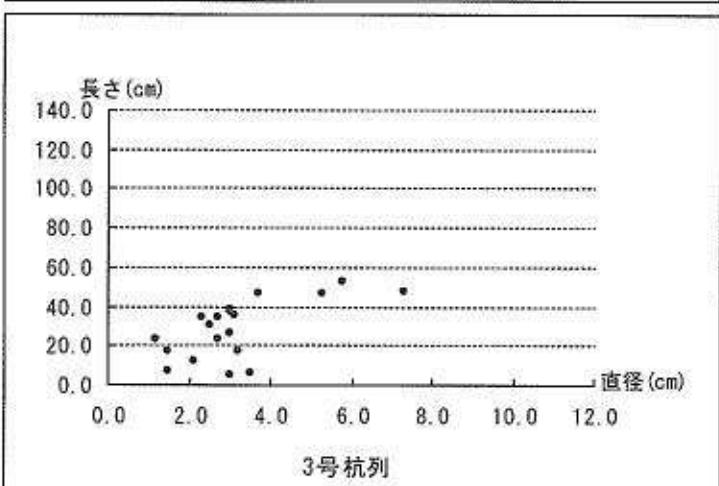
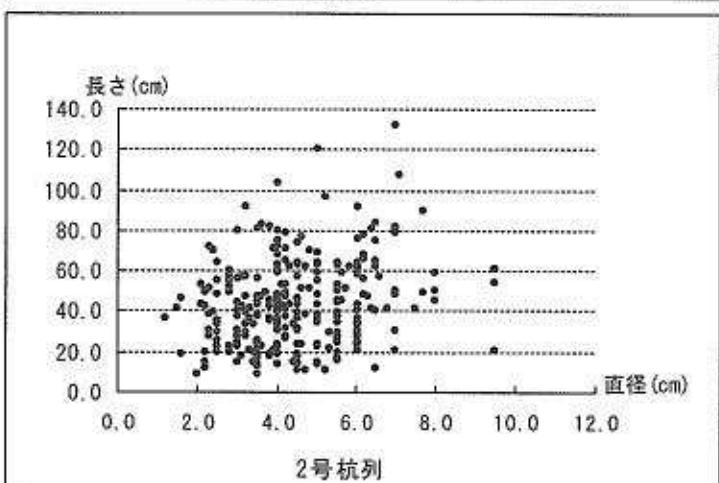
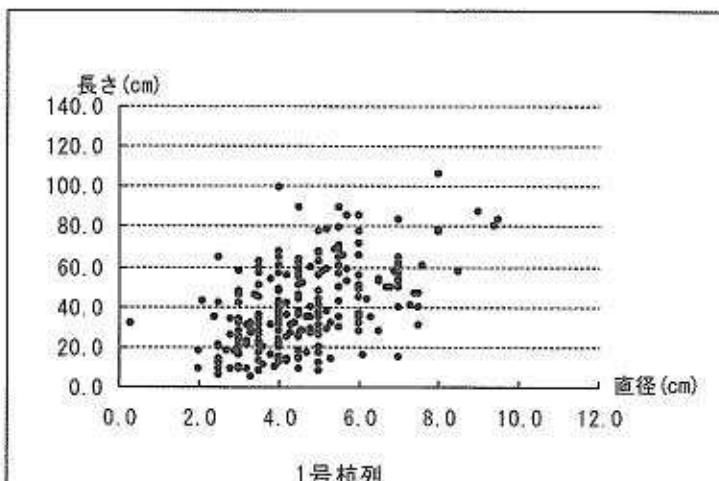
反対に、細くて短い杭も使用されており、これらは目印のような別の役割を持っていたかもしれない。

1号・2号溝では遺構本文で述べた通り相似が見られるが、2号溝の杭のほうが若干太めであることがわかる。

2号溝では長さ20cm以下の杭は使用されていないが、

1号溝では1/5の9本も使われている。逆に長さは、両溝とも80cmを上限としていたようである。これは、1号・2号溝の打ち込み深度とこの付近の潟土層の厚さに関係があるものと考えられる。

3号溝は1号・2号溝とは杭の大きさが異なることが、一見してわかる。細くて短い杭が多く、そのなかで長い杭のほとんどは溝外で検出されている。溝内では、長い杭は溝の西側に片寄って配置されていた。これは、3号溝の下層には潟土層が存在せず、小砂礫層が続いているために、40cm以下の長さの杭が多く使われていたものと考えられる。杭の劣化は3号溝と3号杭列で最も進んでいた。



1号・2号杭列は、12世紀から幕末にかけて長期間にわたって機能していた用水路に伴う杭列と考えられるが、ここでは最も杭数が多く出土していて、また太く長い杭が使用されている。これらは渕土層下の礫層に深く打ち込まれていて、取り上げの際にかなりの労力を要した。長い杭は、杭列がカーブする部分に集中して打ち込まれていることが多く、用水路の強度を考慮した上での杭の配置が窺われる。

また、1号・2号杭列双方で、カーブする杭列の西側に直線的にまばらに配置された杭列が見られる。ここでは長めの杭はほとんど見られない。これらが用水路に付随するものか、あるいは他の機能を持つ杭列かは、現時点では不明である。

3号杭列は、他の杭列とは性質が異なるが、詳細は不明である。軟弱な渕土層に細く短い杭がほぼ直線的に並んでいて、あるいは何かを区画する目印的なものとも考えられるが、現時点ではよくわからない。

当時、地表面下の渕土層が軟弱だったため、強度を確保する場合には、長い杭を必要とした。湾曲した幹さえ杭として利用していたことから、材料調達はごく近い地域で行われたと思われる。1号・2号杭列は、現在の耕作地の区画にはほぼ沿った形で検出されている。杭の長さで言えば、渕土層下の礫層には届かない40～50cmの杭がどの遺構でも最も多く見られた。要所に長い杭を打ち込み、その周囲に最も加工しやすく、打ち込みやすい手ごろな杭を並べていることから、用水路や溝の水流は比較的穏やかなものだったと思われる。

諫早市の古代・中世についてはまだ資料も少なく、よくわかっていない点が多い。今回の調査は用水路のための限られた面積での調査だったのでデータとしては不十分だが、今後の調査が進めば徐々に解明されていくと思われる。

(長尾)

## IV まとめ

前章までにおいて今回検出された遺構、遺物の概要を述べたが、本章でまとめを行い今次の調査の総括としたい。

調査では検出遺構として、杭列3条、ミゾ3本、道路状遺構1本が確認された。

1号・2号杭列は2列一対で北走或いは北西走している。連続する可能性が指摘されている。

3号杭列は1・2号と異なり、東西走している。

1・2号ミゾは2列一対の杭で構成され、杭間が芯心でともに約30cm(1尺)、ミゾ幅が1号で約100cm(3.3尺)、2号で88cm(2.9尺)である。1・2号ミゾは北西から南東走し、相対する内側の杭間の幅は約230cm(7.6尺)を測る。覆土はともに黒褐色粘質土であり、ミゾ間の覆土は砂礫層が堆積している。両方に側溝を持つ道路と考えておきたい。3号は道路状遺構の下から確認され2列一対の杭で構成されている。

道路状遺構はミゾの機能廃止後、埋土が行わされて道路として機能させている。

以上の遺構の性格・機能を考えるために、明治6年施行の地租改正以前から使用されていた字図を参考としたい。第34図が国土調査以前に使用されていた旧公図・字図である。第35図の遺構配置図と比較するとアオミゾ(用水路)の位置が変わっていることに気づく。もとは284番地に西接して北走していたものを、ある時点で東側に付け替えたのである。このことから1・2号杭列は付け替える以前のアオミゾの痕跡であり、元来は西に折れることなく北走して3号ミゾに連接していたものと考えられる。また284番地に隣接する286番地外とは段差がついており、地形的な造作がこの接線で行われていたことが分かる。284番地に西接するアオミゾが北端まで伸びて西に折れるように造作したとき、3号ミゾは機能を停止し、道路として機能するように施工されたようである。すなわち284番地も隣接する286番地外との段差によって道路状の土地として確保されたようであり、さらに3号ミゾを廃止して284番地の道路と一体感を持たせるように工夫されたようである。

ではいつの時期にこのような造作が行われたのであろうか。

今回確認された杭列及び道路状遺構は字図記載の水路及び道路状の痕跡とよく一致するのであり、古記録に記載された永野・宗方の中分線との近接を示唆する遺構の可能性がある。

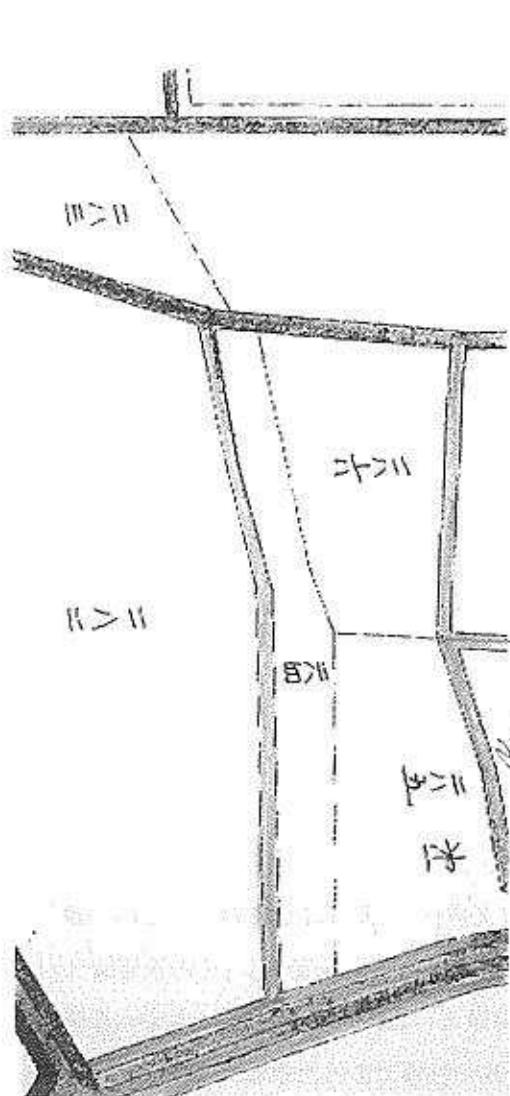
文永8(1271)年「関東裁許状案」(『宗像大社文書』)によれば永野村は、その一部である浦福地が正治2(1200)年江大郎大夫高宗の所領であったところを相伝し、その後建暦3(1213)年閏9月に宗像大宮司氏国に沽却したとする。嘉禄3(1227)年、氏国は舍弟兵衛尉氏経に譲与している。その後、浦福地を含む筑前宗像神社の社領であった永野村を、大宮司であった氏経が一族の氏業と氏郷に分与した。ところが両者間に所領争いが生じ、執権職から裁断を受けた。この記載は文永元(1264)年5月10日「関東裁許状案」(『宗像大社文書』)に出てくるものであるが、文中弘長2(1262)年4月17日の諸文にあるとする「両方境引朱筆於絵図畢」の記載と一致するものが、今次検出の杭列で構成されたミゾ及び道路状遺構ではないかと

考えられるのである。またこの文書には正元2(1260)年時の中分のことにも触れ、「東方氏業分として田地36町1段2杖」を分与したとしている。その広さは時代は降るが「天保3(1832)年12月諫早私領田畠石高帳」に記載した宗方村の面積36町7段5畝1部と両者間の面積が小異であることも、これらの遺跡群が中分線の基準であった蓋然性が高いといえる。

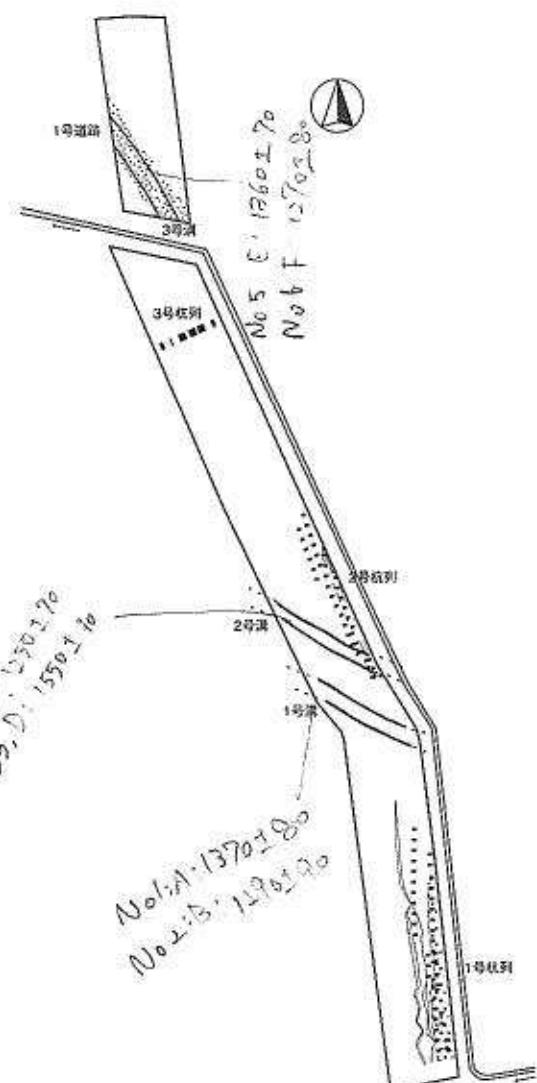
また、2号ミゾの杭で行った放射性炭素年代測定も、ほぼ時期的に似通った数値を提供しており、上述のことを支持するといえよう。

今次調査のうち3号杭列、1・2号ミゾの性格・機能までは十分に闡明化することができなかったが、遺構の広がりは捕捉可能であり、今後の調査により明らかにしていきたい。

参考文献：宗像大社文書編纂委員会『宗像大社文書第二巻』1999



第34図 旧公園・字図



第35図 遺構配置図

# 加速器分析研究所放射性炭素年代測定結果報告書

2005年1月27日

2004年12月13日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

表示したBP年代は、1950年から何年前かの年数で、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値(記号>)として表示してあります。また試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、Modernと表示してあります。

表示した同位体比は標準値からのずれをパーミルで表した値です。 $\delta_{14}\text{C}$ の値は、放射線の測定で求めた試料炭素中の $^{14}\text{C}$ 濃度Aと現在の炭素の標準の濃度A(std)を用いて、 $\delta_{14}\text{C} = [(A - A(\text{std}) / A(\text{std})) \times 1000]$ によって算出された値です。 $\delta_{13}\text{C}$ の値は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ / $^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値です。

$\Delta_{14}\text{C}$ は試料炭素が $\delta_{13}\text{C} = -25.0$ パーミルであったときの $^{14}\text{C}$ 濃度を計算した値です。この濃度を用いて、(貝殻など海洋起源の試料を除き)表記のBP年代値が算出されています。したがって、表記の年代値は同位体効果による測定誤差を補正した年代値となっています。

## 記

Code No.	試料	BP 年代と炭素の同位体比
I A A - 635	杭 from 長崎県諫早市宗方町 No.1 (杭 A)	$580 \pm 80$ $1370 \pm 20$ $\delta_{14}\text{C} = -74.3 \pm 9.5$ $\delta_{13}\text{C} = -27.4$ $\Delta_{14}\text{C} = -69.9 \pm 9.5$
I A A - 636	杭 from 長崎県諫早市宗方町 No.2 (杭 B)	$660 \pm 90$ $1290 \pm 10$ $\delta_{14}\text{C} = -84.2 \pm 10.4$ $\delta_{13}\text{C} = -27.9$ $\Delta_{14}\text{C} = -78.9 \pm 10.4$

IAA-637	杭 from 長崎県諫早市宗方町 No.3 (杭 D)	$400 \pm 90$ $\delta_{14}\text{C} = -52.2 \pm 10.6$ $\delta_{13}\text{C} = -26.4$ $\Delta_{14}\text{C} = -49.5 \pm 10.6$
IAA-638	杭 from 長崎県諫早市宗方町 No.4 (杭 C)	$700 \pm 70$ $\delta_{14}\text{C} = -87.2 \pm 7.8$ $\delta_{13}\text{C} = -26.6$ $\Delta_{14}\text{C} = -84.3 \pm 7.8$
IAA-639	杭 from 長崎県諫早市宗方町 No.5 (杭 E)	$590 \pm 70$ $\delta_{14}\text{C} = -76.9 \pm 7.7$ $\delta_{13}\text{C} = -28.2$ $\Delta_{14}\text{C} = -71.0 \pm 7.7$
IAA-640	杭 from 長崎県諫早市宗方町 No.6 (杭 F)	$680 \pm 80$ $\delta_{14}\text{C} = -85.2 \pm 8.7$ $\delta_{13}\text{C} = -26.9$ $\Delta_{14}\text{C} = -81.8 \pm 8.7$

以上

株加速器分析研究所 白河分析センター

〒 961-0835

福島県白河市白坂字一里段 6-270

TEL 0248-21-1055 (代)

FAX 0248-21-1057

木越 邦彦

## あとがき

遺跡が所在する諫早市は長崎市の東にあって、近年都市化が著しく進行しているところである。今までの静かな田園地帯にも開発の波が押し寄せてきているところであるが、諫早市は東に諫早湾、西に大村湾、南に橘湾に面する交通の要所であって、奈良時代にはこの地域にすでに条里が敷かれており、古くから開けていた地域であった。調査地はこの中でも諫早庄として中世古文書の中で語られる数少ない場所である。

調査は農業排水路の建設という農業基盤を整備する事業の一環として行われたもので、排水路は幅5m、長さ80mにわたって造られることから、調査範囲はこの細長い部分となり、水田地帯に細長いトレンチを入れた状況で実施された。

調査は度重なる台風の来襲の中、絶えず湧水する中で行われ、その結果12～13世紀の青磁や白磁とともに杭が列をなして延々と確認されたのである。これらの杭の1本1本は枝打ちや先を鋭利に加工しており、杭列は一列ではなく列がわからないほどいく重にも繰り返され同一場所に打ち込まれている。また、この杭列と交叉するように2条の溝が出土し、この溝にも杭が等間隔で打たれている。このことは文書にみる「・・山野者付東限永野河中心可被領・・」云々で、所領を永野と宗方とに分けたとする裁定ではないかと考えていいのではないだろうか。

また、古代においても遺構こそ検出されていないが、多くの遺物が出土した。目を引くものに円面鏡や綠釉陶器がある。本遺跡の北西に位置する現在の諫早市船越地区付近にあったと推定されている駅路は、東彼杵から船越駅を通り島原半島山田駅に至るルートが想定されている。出土した遺物はそれに関係するものであろう。また、これに先立つ古墳時代の特異的に出土した多くの焼けた高盤類や磯や器台など祭にかかわる土器は、その背後に多くの人々の暮らしの模様を示すものである。

この地域の調査は緒についたばかりであるが、さらなる地道な周辺地域における調査の積み重ねによって、諫早地方の歴史が明らかになることを願っている。

最後に今回の調査にご協力いただき便宜を払って頂いた諫早市宗方町の住民の方々や関係者各位に対して、無事に当初の目的を果たしたことをご報告し、感謝の意を表しお礼を申し上げる次第である。

国際航業株式会社

九州文化財研究所長

森 醇一郎



# 図版





写真1 1号溝（北西から）



写真2 2号溝・2号杭列（南から）



写真3 2号杭列（南から）



写真4 3号杭列（北から）



写真5 1号溝（南から）



写真6 1号杭列検出状況(南から)



写真7 1号杭列杭出土状況（西から）



写真8 1号道路（西から）



写真9 1号道路（北西から）



写真10 3号溝（南東から）



写真 11 I区完掘状況（南東から）



写真 12 II区完掘状況（北から）

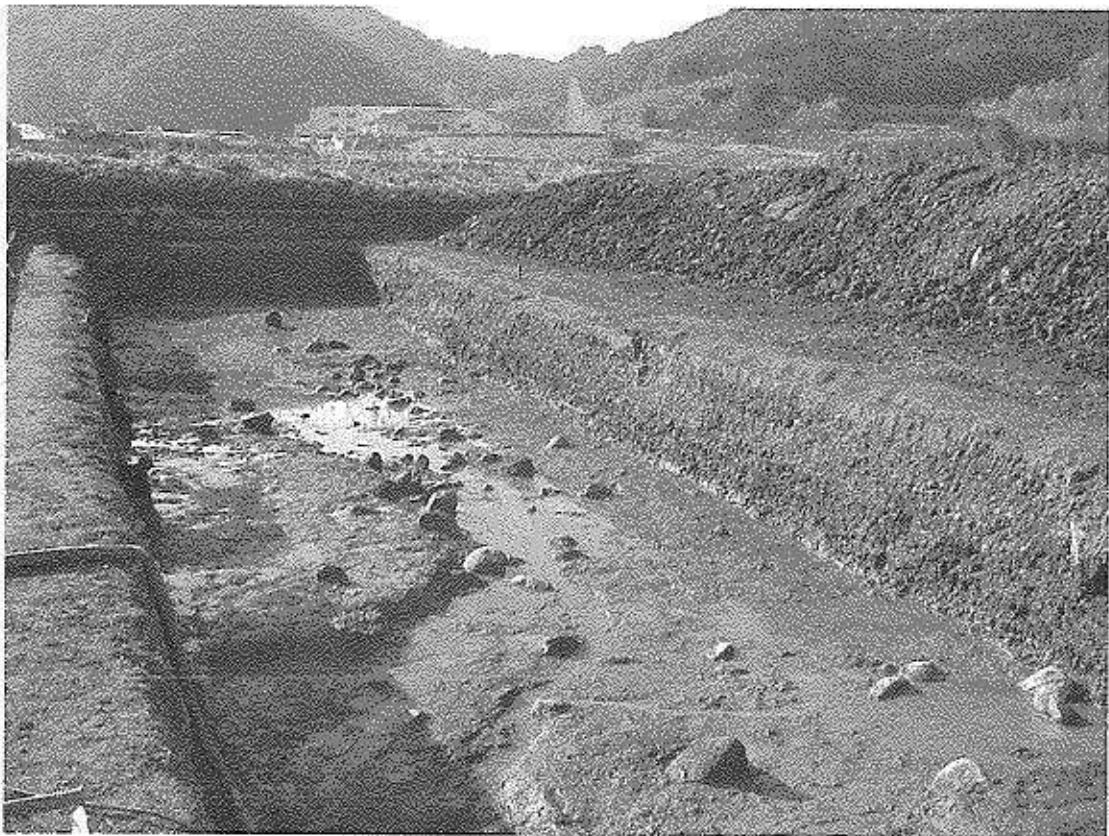


写真 13 Ⅲ区完掘状況（北東から）



写真 14 土器 2-7、23-7 出土状況

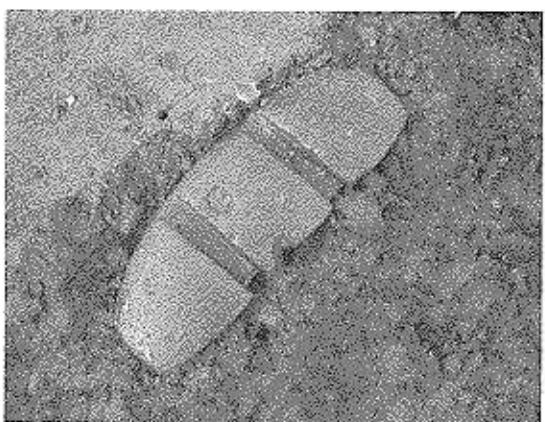


写真 16 下駄 27-17 出土状況

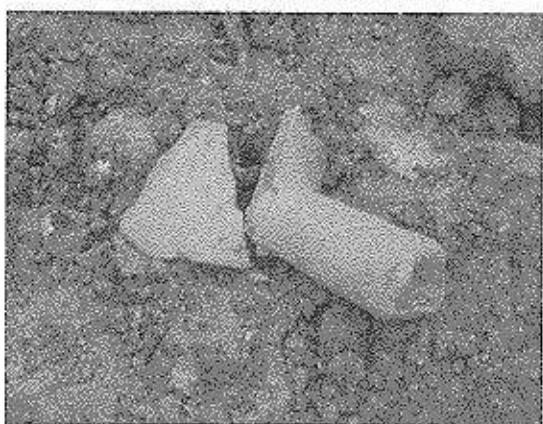


写真 15 土器 23-12 出土状況



写真 17 杭出土状況（2号杭列）

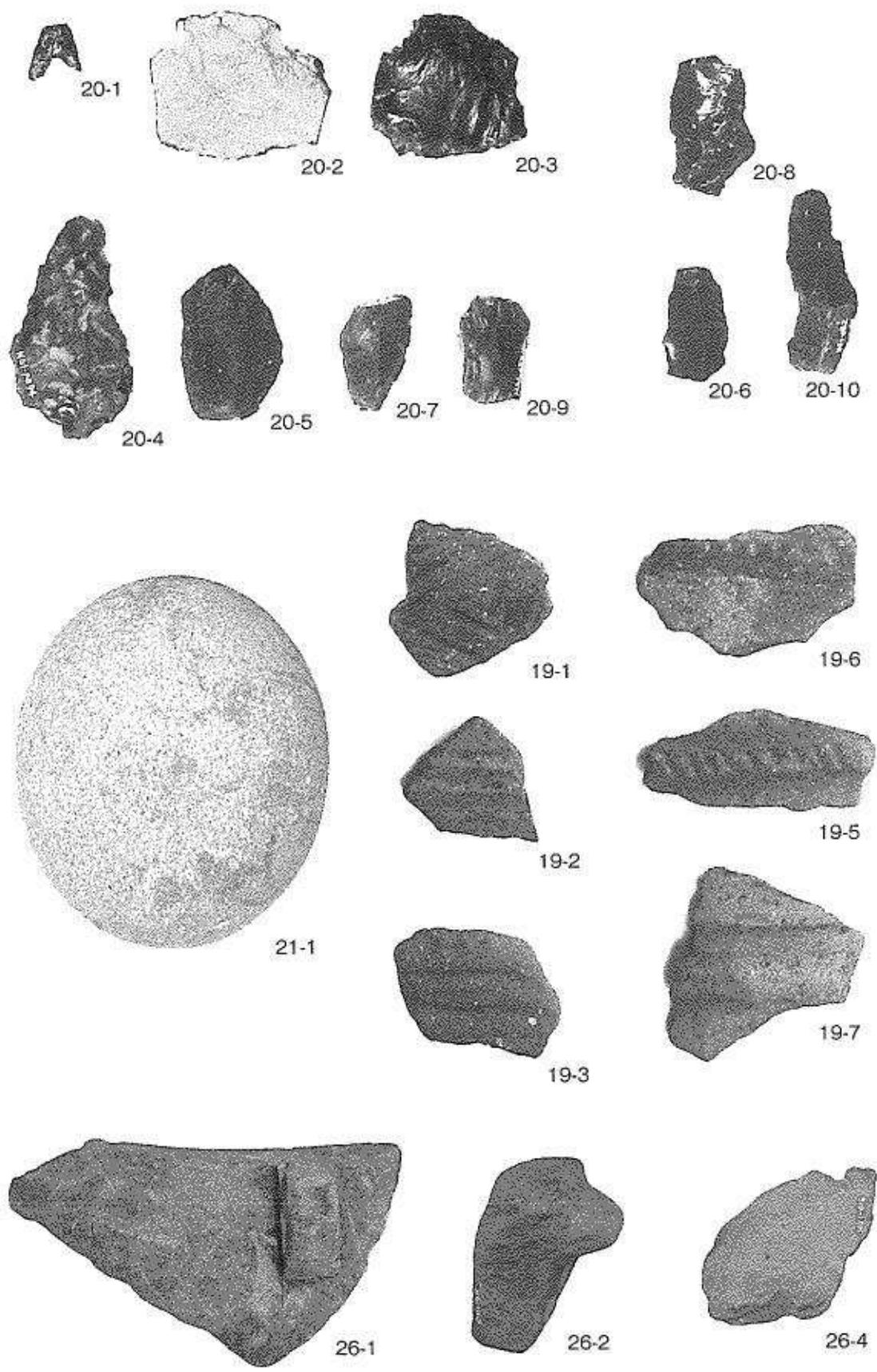


写真 18 遺物写真 (1)



写真 19 遺物写真（2）

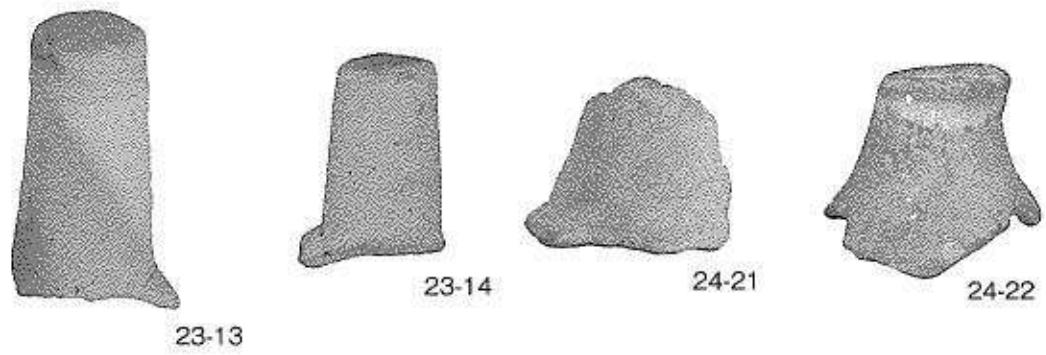
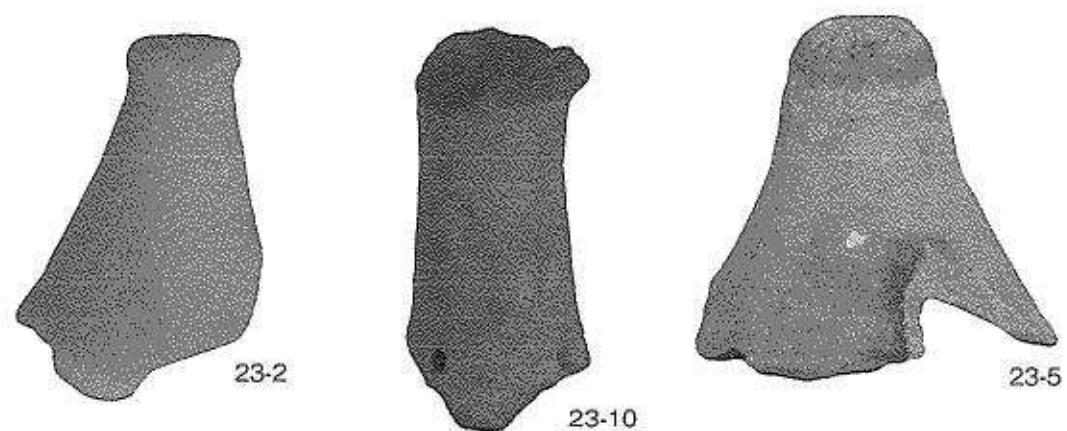


写真 20 遺物写真 (3)

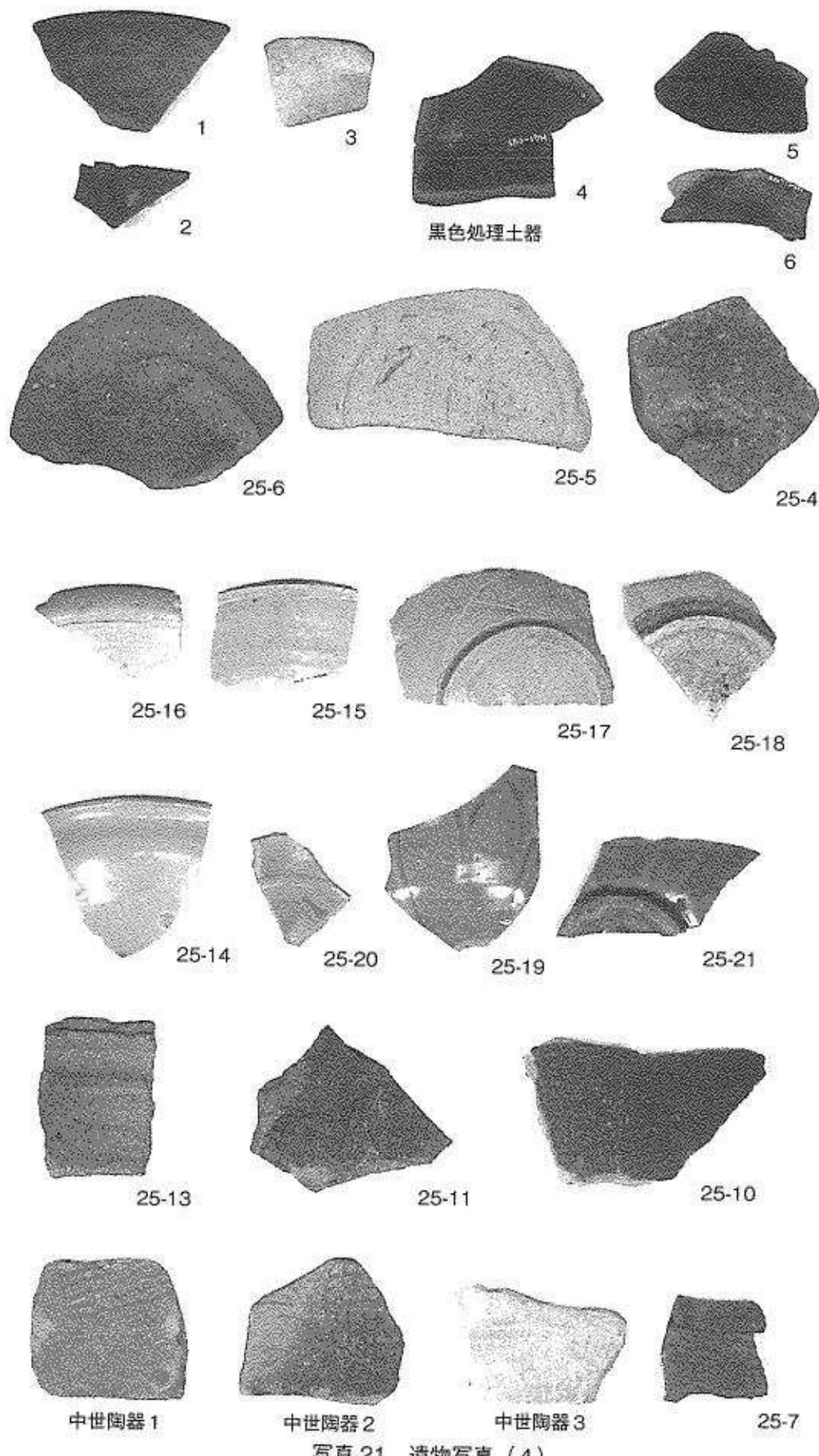


写真 21 遺物写真 (4)

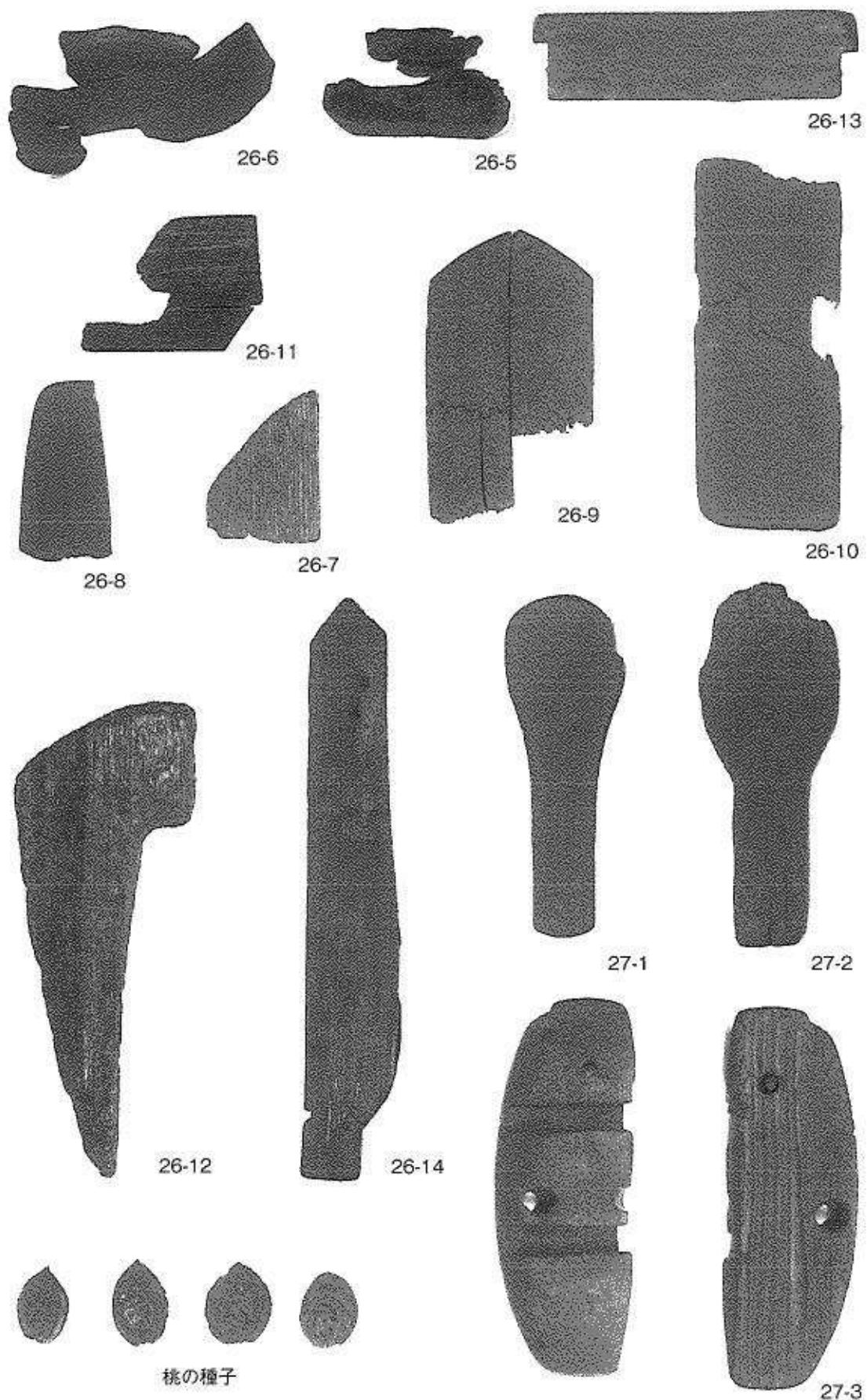


写真 22 遺物写真 (5)



写真23 遺物写真 (6) (1号~3号溝)

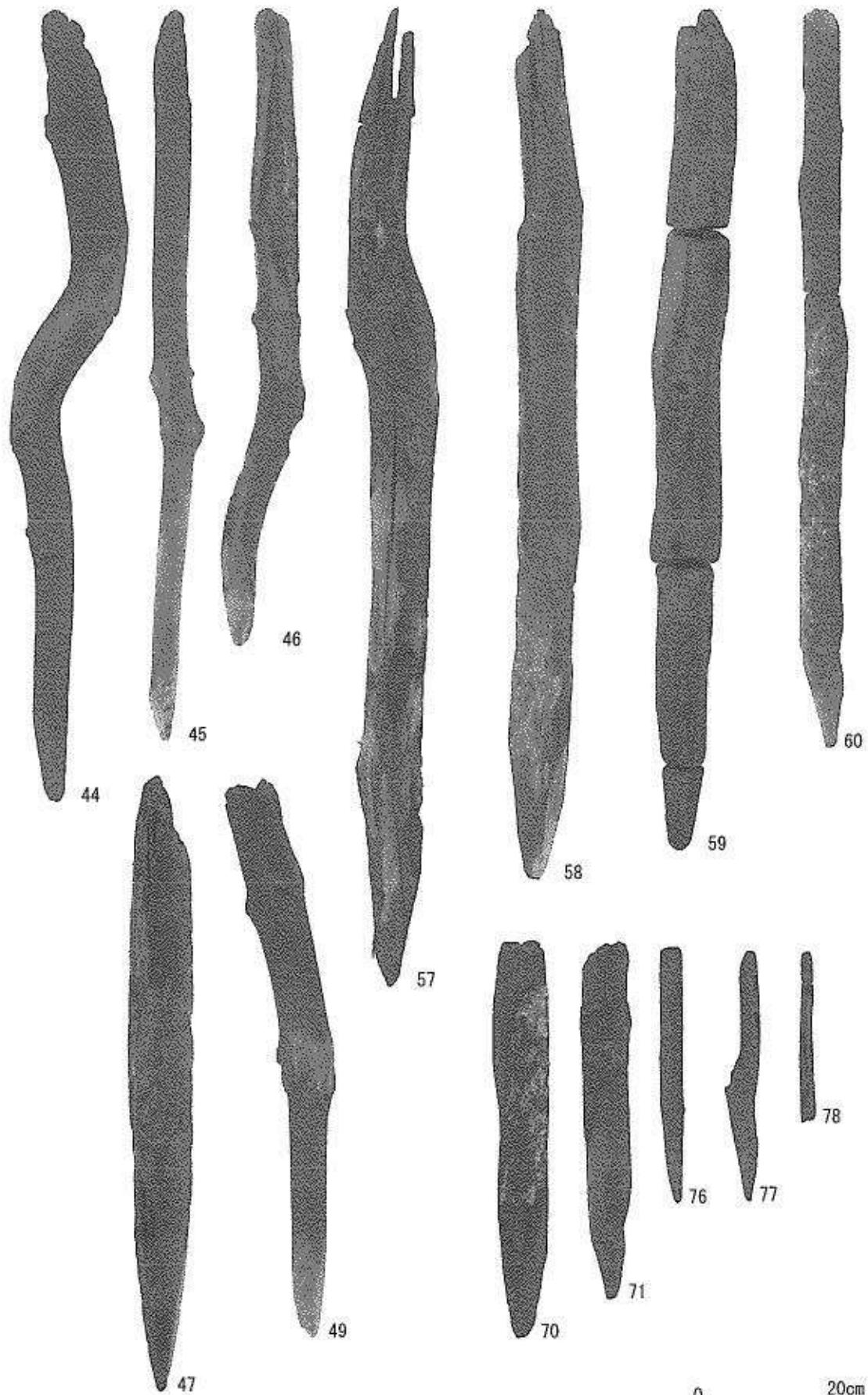


写真 24 遺物写真 (7) (1 ~ 3 号杭列)

## 報告書抄録

ふりがな	おのほりぐちいせき							
書名	小野堀口遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	秀島貞康、園村維敏、長尾聰子							
編集機関	国際航業株式会社							
所在地	東京都千代田区3番町5番地 TEL 03-3228-7148							
発行年月日	2005年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小野堀口遺跡	諫早市 宗方町 長崎県	42204	90-76	32度 49分	130度 05分	平成16年 8月28日～ 平成17年 11月28日	400 m <sup>2</sup>	農業用排水 路整備事業
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
小野堀口遺跡	杭列	中世・古代		杭列・溝		輸入陶磁器・土師器 陶器・磁器・木製品		中世杭列 縁釉陶器 円面鏡

諫早市文化財調査報告書 第17集

### 小野堀口遺跡

2005.3.31

発行所	諫早市教育委員会 諫早市東小路町7番1号
編集	国際航業株式会社 千代田区三番町5
印刷所	クイックス

